

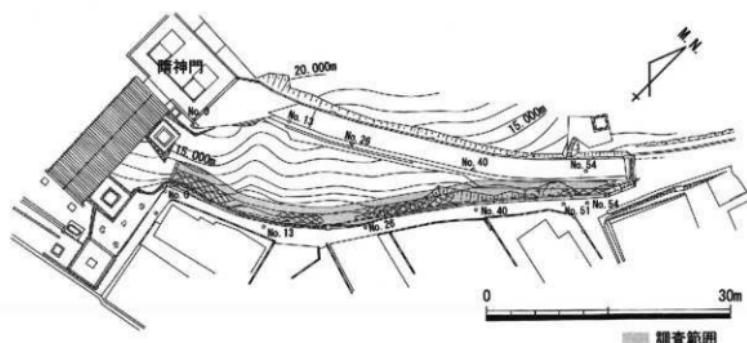
ふじ 尾 城 跡  
藤 尾 城 跡  
つくり やま じょう あと  
作 山 城 跡  
附 柿木荒神

2008年12月

高松市教育委員会

正誤表

P10 第16図



第16図 第3次調査区平面図 (S=1/600)

写真図版 4

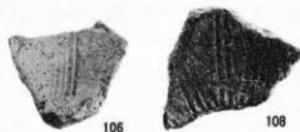
誤	正
99	→ 98
101	→ 100



100



105



108

## 例　　言

1 本報告書は、高松市香西本町に所在する藤尾城跡と香西南町に所在する作山城跡の発掘調査報告書であり、あわせて飯田町に所在する柿木荒神から出土した遺物の整理報告を収録している。

2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施した。

3 各遺跡の調査期間と担当者は以下のとおりである。

藤尾城跡	第1次調査 平成5年12月9日～17日	山元敏裕
	第2次調査 平成8年2月5日～3月14日	藤井雄三、末光甲正
	第3次調査 平成9年1月8日～10日	大嶋和則
	第4次調査 平成19年8月6日	山元敏裕、中西克也、中村茂央
作山城跡	昭和62年3月1日～31日	藤井雄三、中西克也
柿木荒神	平成10年5月25日	山元敏裕

4 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々から御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略　五十音順）

宇佐神社 香川県教育委員会

宇垣匡雅 大久保徹也 大橋雅也 乗岡 実 村上幸雄

5 本報告書の執筆は、第1章を川畑聰（文化財課文化財調査係長）、第2章・第3章第2・3節を中西克也（文化財課非常勤嘱託）、第3章第1・4節を中村茂央（文化財課非常勤嘱託）が行い、編集は中西と中村が行った。

6 遺物の写真撮影は、杉本和樹（西大寺フォト）が行った。

7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。

8 本報告書における表記および記述に関する凡例は、以下のとおりである。

- (1) 本文の挿図として、高松市都市計画図「高松市全図」3万分の1と「香西」「鬼無2」2千5百分の1を一部改変して使用した。
- (2) 色の表記については、藤尾城跡第1次・第4次調査において農林水産省農林水産技術會議事務局・財團法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』によった。
- (3) 挿図の方針は磁北であり、標高は東京湾平均海面からのプラス値である。
- (4) 使用した遺構略号は次のとおりである。

SD溝 SK 土坑 SP 柱穴

## 本文目次

第1章 調査の経緯と経過.....	1
第2章 地理的・歴史的環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	2
第3章 調査の成果.....	5
第1節 藤尾城跡.....	5
第2節 作山城跡.....	19
第3節 考察.....	38
第4節 柏木荒神.....	41

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図.....	1
第2図 周辺主要遺跡分布図.....	3
第3図 藤尾城跡調査位置図.....	5
第4図 第1次調査区平面図.....	6
第5図 1-1 トレンチ土層図.....	7
第6図 石組状遺構平・断面図.....	7
第7図 1-1 トレンチ出土遺物実測図.....	7
第8図 第2次調査区平面図.....	8
第9図 2-1 トレンチ平面図・南壁面上層図.....	9
第10図 2-2 トレンチ南壁面上層図.....	9
第11図 2-3 トレンチ東壁面上層図.....	9
第12図 2-4 トレンチ南壁面・西壁面上層図.....	9
第13図 2-6 トレンチ東壁面・南壁面上層図.....	9
第14図 2-5 トレンチ東壁面上層図.....	9
第15図 2-3 トレンチ出土・表採遺物実測図.....	9
第16図 第3次調査区平面図.....	10
第17図 3-1 トレンチ上層図.....	11
第18図 3-2 トレンチ土層図.....	11
第19図 3-3 トレンチ土層図.....	11
第20図 3-4 トレンチ土層図.....	11
第21図 第3次調査出土遺物実測図.....	12
第22図 第4次調査区平面図.....	13
第23図 第4次調査遺構平面図・北壁面上層図.....	14
第24図 第4次調査柱穴土層図.....	14

第25図	第4次調査出土・表採遺物実測図	16
第26図	作山城跡地形測量図およびトレンチ設定図	19
第27図	△トレンチ平・断面図	20
第28図	S P01～08平・断面図および出土遺物実測図	21
第29図	S K01～05平・断面図	22
第30図	Bトレンチ平・断面図	23
第31図	S K06～09平・断面図	23
第32図	Cトレンチ平・断面図および出土遺物実測図	24
第33図	Dトレンチ平・断面図および出土遺物実測図	25
第34図	Eトレンチ平・断面図および出土遺物実測図	26
第35図	Fトレンチ平・断面図および出土遺物実測図	26
第36図	Gトレンチ平・断面図	27
第37図	藏骨器山上状況実測図	27
第38図	藏骨器実測図	27
第39図	礫石経平・断面図	29
第40図	「元亀天正年間香西浦図」（『讃岐國名勝図會』）	40
第41図	柿木荒神位置図	41
第42図	柿木荒神出土遺物実測図①	42
第43図	柿木荒神出土遺物実測図②	43
第44図	柿木荒神出土遺物実測図③	44
第45図	柿木荒神出土遺物実測図④	45

## 挿 表 目 次

第1表	周辺主要遺跡分布図の遺跡名一覧	2
第2表	作山城跡縄石縁文字別個数表	28
第3表	作山城跡出土縄石縁一覧表	30
第4表	作山城跡墓標一覧表	36
第5表	作山城跡構造一覧表	37
第6表	作山城跡出土遺物観察表	37
第7表	藤尾城跡出土遺物・表採遺物観察表	46
第8表	柿木荒神出土遺物観察表	46

## 図 版 目 次

図版1	藤尾城跡	
-1	第1次 1-1トレンチ（西から）	-5 第1次 1-2トレンチ（南から）
-2	第1次 石組状遺構（北西から）	-6 第2次 2-1トレンチ（南から）
-3	第1次 石3・4（南東から）	-7 第2次 2-3トレンチ土層（西から）
-4	第1次 石1刻印「石工」	-8 第2次 2-4トレンチ土層（東から）

図版2 藤尾城跡・柿木荒神

- 1 第2次 2-6トレンチ土層（西から）
- 2 第3次 N o 13杭付近（南西から）
- 3 第3次 N o 54杭付近（北東から）
- 4 第4次 遺構検出状況（東から）
- 5 第4次 遺構完掘状況（東から）
- 6 第4次 S P 2検出状況（西から）
- 7 柿木荒神全景（東から）
- 8 柿木荒神近景（東から）

図版6 作山城跡

- 1 Dトレンチ遺構検出状況
- 2 Eトレンチ遺構検出状況
- 3 Fトレンチ完掘状況
- 4 Gトレンチ完掘状況
- 5 Hトレンチ完掘状況
- 6 藏骨器出土状況
- 7 磨石経出土状況
- 8 墓標（1号）

図版3 藤尾城跡

- 1 第1次 出土遺物
- 2 第3次 出土遺物（軒丸瓦）
- 3 第3次 出土遺物（丸瓦 コビキA）
- 4 第4次 山土・表採遺物
- 5 第4次 表採遺物（特殊器台・特殊壺）

図版7 作山城跡

- 1 墓標（2号～4号）
- 2 墓標（5号）
- 3 墓標（6号～8号）
- 4 墓標（9号）
- 5 墓標（10号～12号）
- 6 墓標（13号～15号）
- 7 墓標（16号）
- 8 墓標（17号）

図版4 柿木荒神

- 1 柿木荒神出土遺物①
- 2 柿木荒神出土遺物②
- 3 柿木荒神出土遺物③
- 4 柿木荒神出土遺物④

図版8 作山城跡出土磨石経（1）

図版9 作山城跡出土磨石経（2）

図版10 作山城跡出土磨石経（3）

図版5 作山城跡

- 1 遠景（東から）
- 2 遠景（西から）
- 3 調査以前（A・B・Hトレンチ）
- 4 調査以前（C・D・Eトレンチ）
- 5 調査以前（F・Gトレンチ）
- 6 Aトレンチ完掘状況
- 7 Bトレンチ完掘状況
- 8 Cトレンチ遺構検出状況

図版11 作山城跡出土磨石経（4）

図版12 作山城跡出土磨石経（5）

図版13 作山城跡出土磨石経（6）

図版14 作山城跡出土磨石経（7）

図版15 作山城跡出土磨石経（8）

図版16 作山城跡出土磨石経（9）

図版17 作山城跡出土磨石経（10）

図版18 作山城跡出土磨石経（11）

図版19 作山城跡出土磨石経（12）

図版20 作山城跡出土磨石経（13）

## 第1章 調査の経緯と経過

藤尾城跡は標高19.8mの小高い丘陵上に位置し、現在は宇佐神社が鎮座している。中世の有力豪族である香西氏の本拠地であることから、昭和51年に市史跡に指定され保護が図られている。平成5年度に宇佐神社が社務所建設の計画を本市教委に打診してきたが、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地でもあり、予定地は丘陵南西側中腹にある山頂部の平坦地に次ぐ広さの平坦地であることから、城跡に関係する遺構の存在が想定された。そのため、事前に本市教委が試掘調査を実施することになった。現地調査は平成5年12月9日～17日において実施した。調査の結果、石組み遺構や柱穴等を確認したが、出土遺物から藤尾城跡に伴うものではなく江戸時代以降のものであり、包蔵地でないと判断した。これが藤尾城跡の第1次調査である。

第2次調査は、平成7年度に丘陵北西側の麓において、高松市による香西公民館建設が計画されたことが契機である。包蔵地である丘陵斜面を削ることから、斜面および周辺において試掘調査を実施することになった。平成8年2月5日～3月14日において実施し、調査の結果、斜面部において人工改変箇所が認められたが、藤尾城跡に伴うものではなく江戸時代のもので、包蔵地でないと判断した。

第3次調査は、平成8年度に包蔵地である丘陵南東側斜面において計画された急傾斜地崩壊防止工事が契機である。対象範囲が急傾斜で幅も狭いことから試掘調査が不可能であると判断し、事業主体者である高松市が文化財保護法第57条の3(現94条第1項)に基づく発掘通知を提出し、香川県教委から発掘調査の指導があった。これを受け工事と並行して調査を実施した。平成9年1月8日～10日に実施した調査の結果、藤尾城跡とは関係ない江戸時代の遺構しか確認できなかつたが、出土遺物の一部に藤尾城跡と同時期の遺物を確認した。

第4次調査は、宇佐神社が丘陵頂上部で計画した拝殿建替え工事が契機である。平成19年3月に文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が宇佐神社から提出され、香川県教委から立会調査の指導があった。平成19年8月6日に拝殿基礎工事の掘削に伴って調査を実施し、藤尾城跡に直接関係する遺構は確認されず、それに先行する時期の柱穴等を確認した。

作山城跡がある丘陵は、昭和61年度に丘陵全体を削る計画が出された。地元関係者から文化財保護法第57条の2(現93条第1項)に基づく発掘届出が提出されたことから、香川県教委と協議を行い、城跡の内容が不明であることから事前の試掘調査を実施することになった。昭和62年3月1日～31日に実施した調査の結果、柱穴・土坑・溝・礫石絆・蔵骨器等の江戸時代以降の遺構を確認したが、作山城跡と直接関係する遺構が確認されず包蔵地でないと判断した。

祐木荒神については、付近において発掘調査を実施していたところ、地元の方から祐木荒神と呼ばれる祠の土台の工事を行った際、土台部分の盛土から土器が出土したとの通報が寄せられた。平成10年5月25日に本市教委の文化財専門員が訪れたところ、コンテナ約5箱分の弥生時代から近世にかけての遺物が採集された。現地において祠部分の現況を確認したところ、土台工事は終了しており、掘削はこれ以上行われないとのことから、出土した遺物を回収し、調査を終了した。



第1図 遺跡位置図

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面する香川県のほぼ中央に位置する高松平野は、西側を五色台山塊、東側を立石山地に囲まれた東西20km、南北16kmの広さである。平野部には讃岐山脈に源を発する新川・春日川・詰田川・香東川・本津川等の河川が北流し瀬戸内海に流れ込んでいる。

東西の山塊は、花崗岩塊の頂部に浸食を受けにくく安山岩が被さるもので、侵食開析から取り残されて山となったものである。一般に斜面は急傾斜で頂部が平坦な場合をメサ、独立丘となつた場合をピュートと呼ぶ。いずれも讃岐平野に見られる特徴的な山々である。屋島や五色台はその代表的な山であり、白山、六ツ目山等はメサに分類できよう。

これらの浸食作用が進んだ後、沖積土に入つて本津川、香東川や春日川をはじめとする河川の堆積作用により高松平野が形成された。香東川は県内第二位の河川であり、その堆積力は平野形成に大きな影響を及ぼしている。かつて石清尾山塊を挟んで東と西の流れがあつたが、寛永年間（1624～1643）に生駒家の家臣であった西嶋八兵衛が現状のように付け替えたといわれている。

藤尾城跡と作山城跡は五色台山系の東麓に広がる緩傾斜面に位置し、南西から延びる丘陵の先端部の標高20mの藤尾山と標高16mの作山の頂上に築かれていた。五色台山系の東麓には顕著な開析谷が発達してなく、裾近くの緩傾斜面は水田もしくは畠地として利用されている。両城跡の東側は本津川の氾濫原面で三角州帶が広がる。

柿木荒神は本津川の東側に位置し、氾濫原面と扇状地帯を画する段丘崖にほぼ接する。西側を除き周辺の地表面は平坦で、条里型地割が整然と施工されている地域でもある。

### 第2節 歴史的環境

高松平野西部において、最も古い人間の営みが検出されたのは、中間・西井坪遺跡、中森遺跡、香西南西打遺跡等であり、IH石器時代後期に属する石器群が見つかっている。

第1表 周辺主要遺跡分布図の遺跡名一覧

1 藤尾城跡	13 佐料城跡	25 今岡古墳	37 衣掛城跡
2 作山城跡	14 香西南西打遺跡	26 佐藤城跡	38 宮尾城跡
3 柿木荒神	15 西打遺跡	27 鬼無大塚古墳	39 新居氏館跡
4 本津城跡	16 鬼無藤井遺跡	28 平木古墳群	40 新居城跡
5 芝山城跡	17 筑城城跡	29 山野塚古墳	41 石清尾山13号墳
6 勝賀廃寺	18 王墓古墳	30 空家古墳	42 猫塚古墳
7 植松城跡	19 相作牛塚古墳	31 古宮古墳	43 淨願寺山古墳群
8 中山城跡	20 飯田城跡	32 神高池西古墳	44 片山池窪跡群
9 亀水城跡	21 がめ塚古墳	33 こめ塚古墳	45 坂田廃寺
10 黄峰城跡	22 中森遺跡	34 神高池北西古墳	46 御殿町水池南遺跡
11 勝賀城跡	23 八幡遺跡	35 鬼無城跡	47 牛ノ首遺跡
12 かしが谷古墳群	24 檜紙城跡	36 御殿大塚	48 横立山経塚古墳



第2図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/40,000)

縄文時代になると、香西南西打遺跡で草創期と考えられる有舌尖頭器が出土し、西打遺跡では旧河道から前期末の土器・石器が、鬼無町佐料では後期の土器が採取されており、さらに鬼無藤井遺跡では自然流路から晩期の土器が出土している。

弥生時代になると、鬼無藤井遺跡で最大径約70mの規模を誇る二重の環濠を巡らす前期の環濠集落が検出されている。後期の遺跡としては、西打遺跡で竪穴住居跡と掘立柱建物跡、中間・西井坪遺跡で掘立柱建物跡や土器棺墓が検出されている。

古墳時代になると、東方の石清尾山塊には、前期初頭の鶴尾神社4号墳を始めとして、前期に属する双方中円墳や前方後円墳といった積石塚が築造される。平野の西部では、中間・西井坪遺跡で前期古墳の周濠が3基確認されている。西方の生島湾岸地城には前期の積石塚である横立山経塚古墳や原経塚古墳がある。中期では、平野西部で最大規模の前方後円墳である今岡古墳がある。前方部から陶棺が出土しており、ほぼ同時期に中間・西井坪遺跡で埴輪や陶棺が製作・焼成されていることから、その陶棺が今岡古墳に供給されたと推測されている。後期になると横穴式石室を主体とする群集墳の築造が盛んになる。五色台山系東麓の緩傾斜面上には、古宮古墳・鬼無大塚古墳・平木1号墳などの巨石墳からなる神高古墳群が形成される。また、石清尾山塊南の淨願寺山の山頂付近には50基余りの横穴式石室からなる群集墳がある。

古墳に代わり寺院の造営が盛になると、平野部には川原寺式が退化した瓦当文様をもつ軒瓦が出土する遺跡として、白鳳期(飛鳥時代後期)の創建と推定される坂田庵寺と勝賀廃寺が知られている。また、坂田庵寺近くにある平安時代中期操業の片山池1号窯跡は坂田庵寺に瓦を供給していたと考えられる。

奈良～平安時代にかけては、正経遺跡・薬王寺遺跡から総数50棟以上の掘立柱建物跡が検出されている。また、区画溝や掘立柱建物跡の中には条里地割と方向が符合するものがあり、南海道に接する当該地区では早くから条里地割の施工が進んでいたことがわかる。香西南西打遺跡では、粘土探柵坑を多数検出しており、土器作りの可能性が指摘されている。なお、藤尾城跡の北西に位置する香西寺には重要文化財の毘沙門天立像が保存されている。像は藤原時代とされ当該地区が古い歴史をもっていたことを証明している。

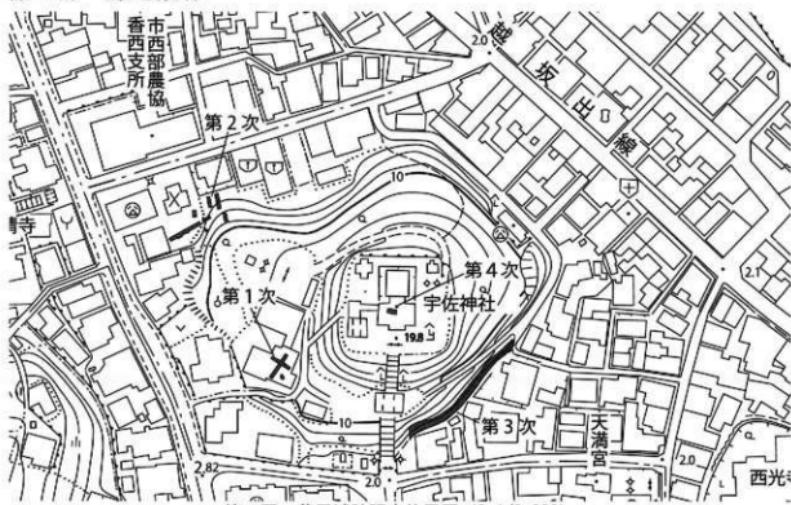
鎌倉～室町時代でも条里地割に符合する溝跡が、鬼無藤井遺跡や香西南西打遺跡、西打遺跡で広範囲に検出されている。さらに、西打遺跡では区画溝に囲まれた鎌倉時代の屋敷跡が、香西南西打遺跡ではコの字状の区画溝が確認されている。

当該地域は讃岐の代表的な豪族である香西氏の本拠地であり、関連する城跡が多数存在している。『南海治乱記』に「居城ハ笠居郷佐料也、要城ハ勝賀ノ山也」と記されるように、香西氏は、勝賀山に有事の際の城として勝賀城を築き、常に佐料城を居館とした。さらに周辺には危水城・黄峰城・芝山城・作川城・鬼無城等の支城を築いている。戦国時代末期の天正5年(1577)、香西氏は本拠地をそれまでの佐料城から香西浦に移している。これが本報告書の藤尾城である。さらに、筑城城・飯田城・櫛紙城などの香西氏に従った地元の領主たちの居城が、香川郡や阿野郡を中心と/orして、その数は一説には40余にのぼったという。飯田町や櫛紙町にある多数の塚の中には、中世の「武将の墓」という言い伝えが残るものもある。

豊臣秀吉による四国征討以後、家臣である生駒親正が讃岐を支配し、天正16年に高松城を築き、江戸時代に至る。やがて藩主は生駒家から松平家に替わり、明治維新を迎えるのである。なお、明治維新の時、宇佐神社は大きく姿を変えている。同社の別当寺であった神宮寺が解体となっている。讃岐名勝図によれば、神宮寺は宇佐神社の南西に位置していたらしい。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 藤尾城跡



第3図 藤尾城跡調査位置図 (S=1/2,000)

#### 1 第1次：宇佐神社社務所建設に伴う試掘調査（第4～7図参照）

平成5年12月9日から17日にかけて、宇佐神社社務所建設に伴い、埋蔵文化財の試掘調査を実施した。社務所建設予定地は本殿から南西方向に位置し、藤尾城跡の縄張り内にあるため、当城跡に関係する遺構・遺物が存在している可能性を想定できた。そのため、調査はトレンチを2ヶ所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。

##### (1) 基本層序（第5図）

盛土と整地層の下に土器片を包含する褐色粘性シルト、にぶい褐色土、橙色粘性土、灰褐色粘性土、浅黄橙色土褐色土混じり（遺構面）、青灰色シルト、オリーブ灰色土の順に確認した。

##### (2) 遺構

###### 1-1 トレンチ（第4図）

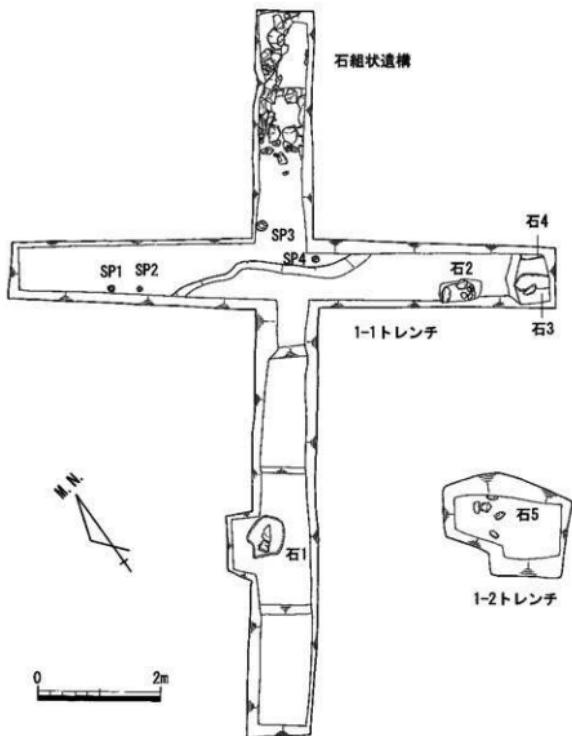
北東・南西方向に長さ約12m、幅1mのトレンチと、南東・北西方向に長さ約9m、幅1mのトレンチを、十字型になるように設定した。トレンチ内からは柱穴、石組状遺構、不整形の落ち込み、礎石と考えられる石を検出している。

###### S P（第4図）

4基の柱穴を検出した。S P1はトレンチ北西側で検出、S P2はS P1の東隣で検出している。S P3は北東・南西トレンチの交差地点から北東側で検出、S P4は同じく交差地点から南東側で検出した。直径はそれぞれ10cm、5cm、20cm、10cmを測る。遺物は出土していないため時期は不明である。

###### 石組状遺構（第6図）

トレンチ北東端で拳大から人頭大程度の石が高さ30cm～40cmほど積まれた石組を検出した。石



第4図 第1次調査区平面図 (S=1/80)

1 mの地点で拳大の石が数個まとめられていた。石3はトレンチ南東端にあった長さ50cmほどの細長い石である。石4は石3の北東隣で確認した。以上の検出した石は礎石に使用された可能性が考えられる。時期については、遺構に伴う遺物が確認できなかったが、石2・3・4付近から19世紀代の磁器碗等が出土しており、この時期に近いものと考えられる。その他、トレンチの交差地点に北東から南西へ、不整形の落ち込み状遺構を検出したが、遺物は確認できず、時期も不明である。

#### 1-2トレンチ（第4図）

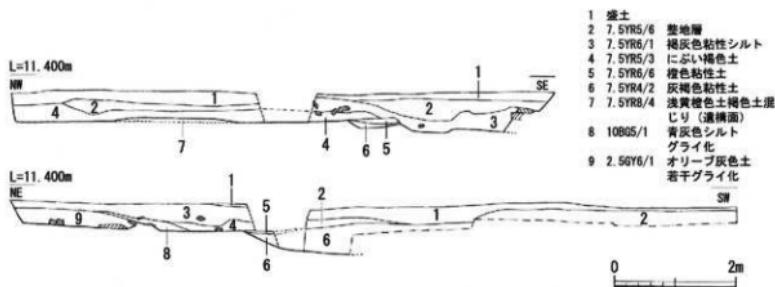
1-1トレンチの南東端と南西端から礎石と考えられる遺構を確認した後、同トレンチ内に連続する礎石が確認できないことから、礎石の有無を確認するために新たに1-1トレンチの南側に北東・南西0.50m、南東・北西1mほどのトレンチを設定した。トレンチ内からは石2と同様に拳大の石が数個まとった石5を検出した。遺物は確認しておらず、石の用途については礎石の基底部の可能性があるが断定できない。

組の壁面として南東面の一部と南西・北西面が確認できる。また、北東壁面の下端をトレーンチ端にて確認したことから、縦2m、横1mほどの規模と考えられる。内部から水が染み出しており、石で囲んでいる様子から、本来は水を溜める機能をもつたものであると推測できる。時期は青磁染付碗が出土しており、18世紀後半以降のものと考えられる。

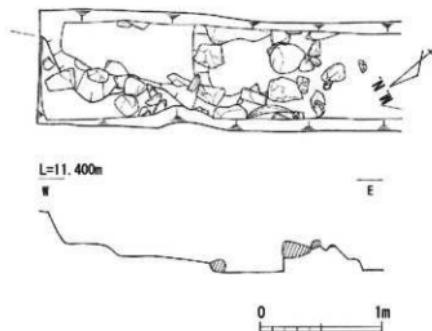


1-2トレンチ

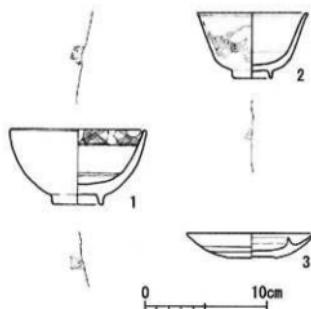
その他（第4図）  
石組状遺構の他にくつか石を検出した。石1は南西端から北東へ3m地点にある大きさ60cmほどの石である。石の表面には「石工」の刻印が見られ、礎石に使用されたものと考えられる。石2はトレーンチ南東端から北西へ



第5図 1-1トレントンチ土層図 (S=1/80)



第6図 石組状遺構平・断面図 (S=1/40)



第7図 1-1トレントンチ出土遺物  
実測図 (S=1/4)

### (3) 出土遺物 (第7図)

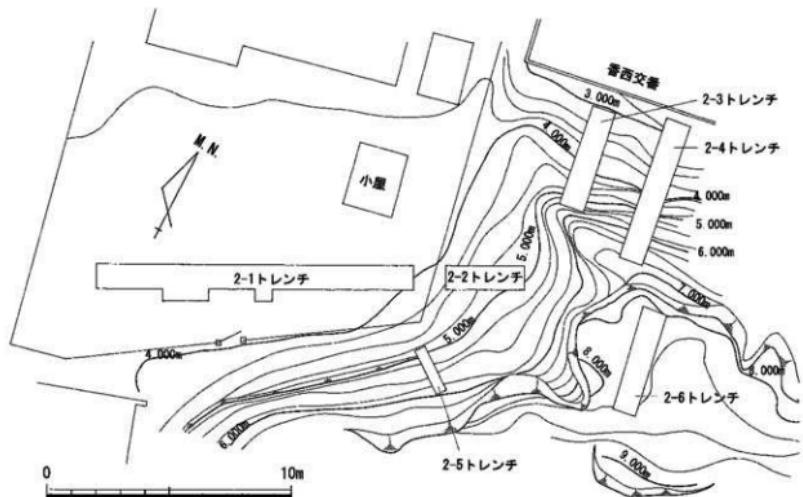
1は石組状遺構から出土したもので、肥前系磁器の青磁染付碗である。内外面に文様が認められる。2・3はトレントンチ南東側から出土した。2は瀬戸・美濃系磁器の染付碗で、内外面に文様が認められる。3は京・信楽系陶器の灯明皿で内面には軸がかかる。両者とも19世紀代のものである。

### (4)まとめ

確認した遺構は、遺物から近世もしくは近代に位置づけられるもので、藤尾城跡に直接関係する遺構・遺物は確認できなかった。そのため、中世の遺構面は後世に削平されてしまった可能性が考えられる。

### 2 第2次：香西公民館拡張工事に伴う試掘調査（第8～15図参照）

第2次調査は、香西公民館の拡張工事に伴う試掘調査である。本調査地は宇佐神社境内から北西方向にあり、藤尾城の縄張り内に位置する。調査は高松北警察署香西駐在所構内とその隣接地を範囲に、比較的平地である部分と急傾斜面、標高の高い平地に計6箇所のトレントンチを設定し、風化花崗岩（地山）層が確認できるまで掘削した。



第8図 第2次調査区平面図 (S=1/200)

#### (1) 基本層序 (第9～14図)

2-1トレンチは単層で耕作土が20cmほど堆積しており、その下に風化花崗岩の地山が確認できた。2-2トレンチは腐葉土と真砂土流土の下に、本来地山であったと考えられる真砂土が見られる。東側には擾乱である廃棄物焼却灰土が地山の上に見られた。2-3・2-4トレンチは、腐葉土と灰褐色腐蝕土の下に風化花崗岩細片およびシルトと真砂土の混和層が繰り返し見られる。この層からは土師質土器片が出土している。2-5は腐葉土と真砂土流土の下に風化花崗岩の地山を確認した。また北側に向かって2-2と同じく地山の上に廃棄物焼却灰土の擾乱層が見られた。2-6トレンチは上から腐葉土、真砂土ブロック混じり黄灰色砂質土、淡黄灰色細砂礫、暗灰褐色腐蝕土混じり真砂土、黄灰色シルト質真砂土の順に南から北へながらに堆積している。

#### (2) 遺構

##### 2-1トレンチ (第9図)

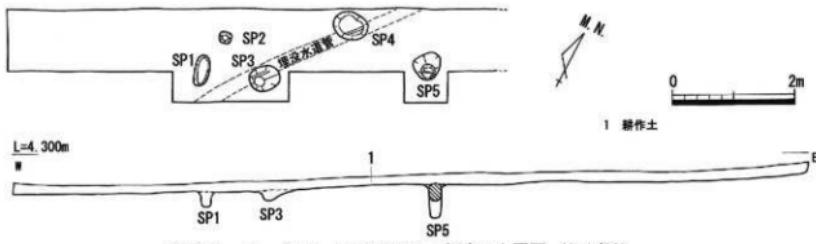
平地に長さ13m、幅1mのトレンチを設定した。柱穴を5基確認したが、その内S P3・4は、下に埋没水道管が南北に走っており、切り合ひ関係から近現代のものと考えられる。その他の柱穴については、遺物は出土しておらず時期は不明である。また、柱穴はいずれも地山である風化花崗岩を掘削している。

##### 2-3トレンチ (第11図)

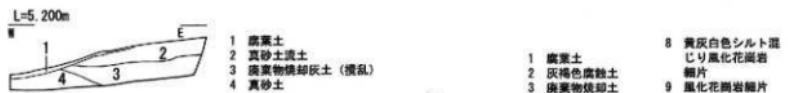
南から北へ、急斜面からなだらかな傾斜へ変わる地点に南北方向のトレンチを設定した。遺構は確認できなかったが、土層から一部叩きつけたと見えるシルト質混じりの真砂土と風化花崗岩の層が7層から14層にかけて見られ、南側では垂直に立ち上がる地山を確認した。

##### 2-4トレンチ (第12図)

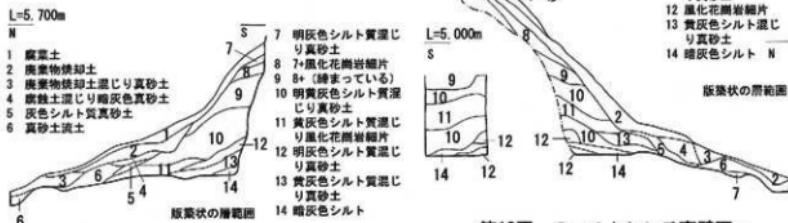
2-3トレンチの東側に並行して設定した。遺構は確認できなかったが、2-3トレンチと同様、土層に一部叩きつけたと見えるシルト質混じりの真砂土と風化花崗岩の互層を確認した。地山まで掘り切れなかったが、2-3トレンチと同じく垂直に立ち上がる地山が存在すると考えられる。



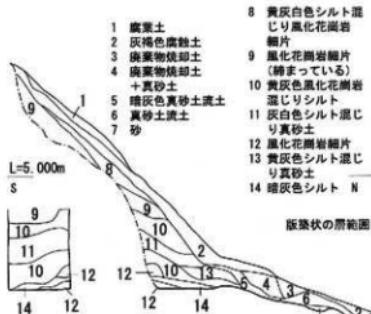
第9図 2-1 トレンチ平面図・南壁面土層図 (S=1/80)



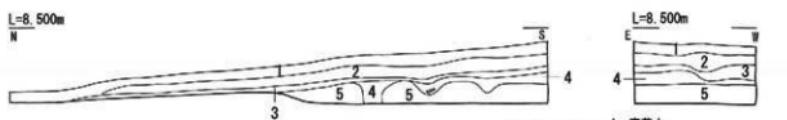
第10図 2-2 トレンチ南壁面土層図 (S=1/80)



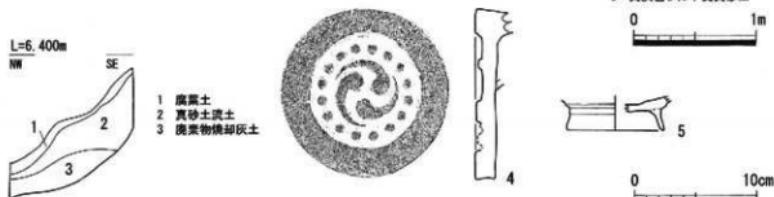
第11図 2-3 トレンチ東壁面土層図 (S=1/80)



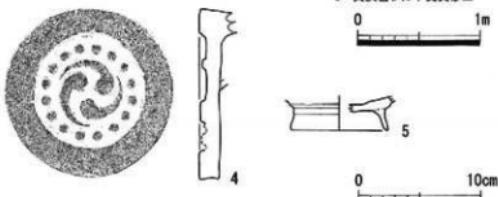
第12図 2-4 トレンチ南壁面・西壁面土層図 (S=1/80)



第13図 2-6 トレンチ東壁面・南壁面土層図 (S=1/40)



第14図 2-5 トレンチ  
東壁面土層図 (S=1/80)



第15図 2-3 トレンチ出土・表採遺物実測図 (S=1/4)

## 2-6 トレンチ（第13図）

標高8mほどの小高い平地に長さ4.5m、幅1mのトレンチを設定した。遺構は確認できなかつたが、上部器片を多く含む5層の下に、第13図および図版2-1に示す被熱したと見られる風化花崗岩の地山を確認した。

## 2-2・2-5 トレンチ（第10・14図）

擾乱（廃棄物焼却土）により、遺構は確認できなかつた。

### (3) 遺物（第15図）

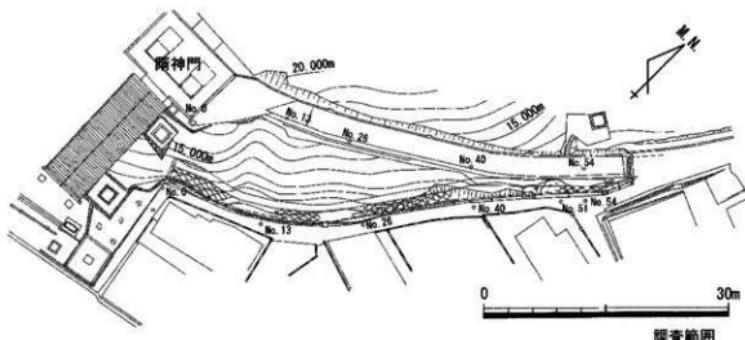
4は2-3トレンチから出土した三巴文軒丸瓦で、瓦当のみ残存する。時期は18世紀末から19世紀初め頃のものと考えられる。5は調査地周辺で表探した土師質土器の高台付皿もしくは楕で13世紀前半のものと考えられる。

### (4) まとめ

第2次調査では、調査区東側の2-3・2-4トレンチで風化花崗岩細片および真砂土とシルト混和層の互層、2-6トレンチの被熱痕と考えられるものを確認したほかは確実な遺構は検出できなかつた。この2-3・2-4トレンチについては版築状に上を叩きつけていると考えられることや、地山が垂直に伸びることが認められたことから、地山をL字状に切り出し、その前面に互層を構築しているものと考えられる。これは中世城郭の「切岸・切崖」にあたる可能性があるが、遺物がないため時期は不明である。以上、第2次調査では藤尾城跡に関係する確実な遺構の検出には至らなかつた。本調査区では、西側を中心に平坦面から急傾斜面に続く地点まで近現代に地山面まで削平を受けており、遺構面は失われているものと考えられる。

## 3 第3次：急傾斜地崩壊防止工事に伴う立会調査（第16～21図参照）

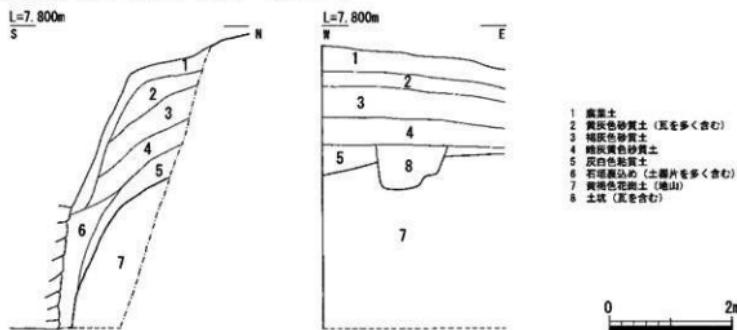
第3次は平成9年1月8日から10日かけて急傾斜地崩壊防止の工事に伴い立会調査を行なつた。調査地は宇佐神社から南東部分にある急傾斜面である。現状は山林であり、石垣で補強されていた。調査は工事と並行して行なわれ、重機により地山まで掘削した。4ヶ所において土層断面の実測図化と、遺物の有無の確認を行なつた。



第16図 第3次調査区平面図 (S=1/600)

### (1) 基本層序 (第17~20図)

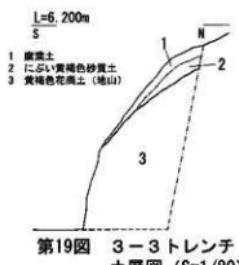
3-1トレンチは工事用N o. 0杭付近に設定した。層序は上方より腐葉土、黄灰色砂質土（瓦を多く含む）、褐灰色砂質土、暗灰黄色砂質土、灰白色粘質土、石垣裏込め（土器を含む）、黄褐色花崗土（地山）の順である。北壁面では土坑を確認している。3-2トレンチはN o. 13杭付近に設定した。層序は上方より腐葉土、暗灰黄色砂質土、褐灰色砂質土、にぶい黄褐色粗砂、灰黄色砂質土、花崗土（地山）の順である。3-3トレンチはN o. 26付近に設定した。層序は上方から腐葉土、にぶい黄褐色砂質土、黄褐色花崗土（地山）の順である。3-4トレンチは調査区東端から10m付近に設定した。層序は腐葉土、にぶい黄褐色砂質土、明黄褐色粘質土、褐灰色砂質土、黄褐色花崗土（地山）の順である。



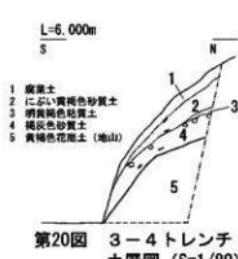
第17図 3-1トレンチ土層図 (S=1/80)



第18図 3-2トレンチ  
土層図 (S=1/80)



第19図 3-3トレンチ  
土層図 (S=1/80)



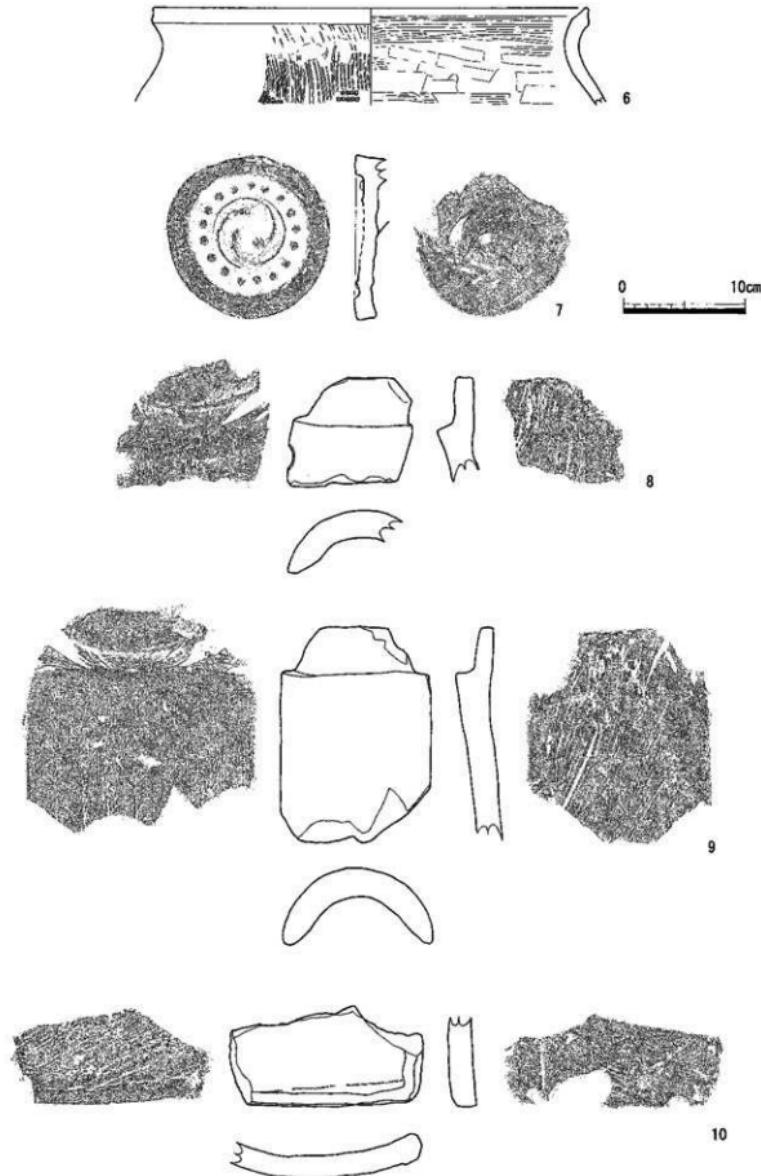
第20図 3-4トレンチ  
土層図 (S=1/80)

### (2) 遺構 (第17図)

3-1トレンチ土層から土坑を検出したのみで、その他のトレンチでは遺構は確認できなかつた。検出した土坑からは瓦が出土しており、19世紀代のものと考えられる。いずれのトレンチも土層断面から、地山の上に流上が自然堆積していると考えられる。

### (3) 遺物 (第21図)

多量の遺物が出土した。その内、藤尾城の時期に該当すると考えられる遺物を第21図に掲載した。6は調査区の東端から西へ5~10m付近で出土した土師質上器壺である。外面に格子状の叩き痕が見られる。7は調査地の西端～5m付近で出土した三巴文軒丸瓦である。中心は欠けているが、巴の尾は細く長く伸び、外区に珠文を17個めぐらしている。時期は16世紀末から17世紀にかかるものと考えられる。8は調査区の東端から西へ20~30m付近で出土した丸瓦である。外面



第21図 第3次調査出土遺物実測図 (S=1/4)

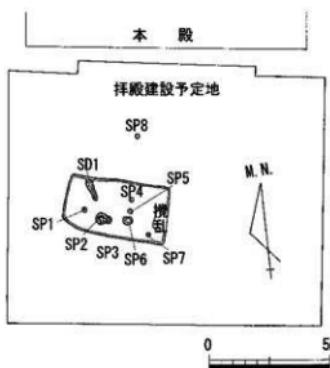
は叩き、内面は布目が確認できる。9は調査区の東端から西へ5~10m付近で出土した丸瓦である。外面は叩き後ナデ調整、内面は布目とコビキAが観察できる。10は平瓦である。調査区の東端へ5m付近で出土したもので、内外面にコビキAが顕著に認められる。出土した江戸時代以降の瓦の中には「香川郡」、「多田傳古衛門満」等の線刻されたものもある。

#### (4)まとめ

本確認調査では藤尾城に関係する遺構は検出されなかった。また、第2次調査で見られた山の裾部をL字状に掘削した痕跡や互層等の人工的な改変は認められなかった。遺物については、瓦の製作技法の一つであるコビキAの痕跡をもつ丸瓦・平瓦が出土しており、16世紀後半代の年代があてられる。その他は18世紀から19世紀のものを中心としており、宇佐神社に関係するものと考えられる。

以上、第3次確認調査では藤尾城の時期に該当する遺物を確認できた。この遺物により、繩賀期以前に瓦を用いた建物が存在していた可能性を指摘できる。

#### 4 第4次：宇佐神社拝殿建替工事に伴う立会調査（第22~25図参照）



第22図 第4次調査区平面図 (S=1/100)

宇佐神社拝殿の建替に伴い、立会調査を行なった。当初は旧拝殿建設時に削平を受け、遺構が残っていないと想定したが、トレーニング内にて柱穴と溝を確認した。また、境内には多量の土器片が散布しており、弥生時代後期末から近世に至る遺物を表探した。

##### (1) 基本層序 (第23図)

単層である。花崗岩が6cmほど堆積しており、その下に風化花崗岩（地山）層を確認した。

##### (2) 遺構

###### S P 1 (第23・24図)

トレーニング西側で検出した柱穴である。平面形は円形で、直径18cm、深さ35.5cmを測る。埋土はにぶい黄褐色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

###### S P 2 (第23・24図)

S P 1から東へ0.50m地点で検出した柱穴である。平面形は円形で、直径40.5cm、深さ45cmを測り、柱穴内部で石を2石確認した。いずれの石も安定しておらず用途は不明である。埋土はにぶい黄褐色花崗岩バイラン土の単層である。柱穴内からは土師質土器の小皿が出土しており、時期は13世紀末から14世紀初頭のものと考えられる。

###### S P 3 (第23・24図)

トレーニングの中央、S P 2の東隣にて検出した柱穴である。S P 2と切り合い関係にあり、S P 2より古いものである。平面形は円形を呈し、直径30cm、深さ29cmを測る。埋土はにぶい黄褐色花崗岩バイラン土の単層である。土師質土器片が数個出土しているが、小片のため図化できなかった。

**S P 4 (第23・24図)**

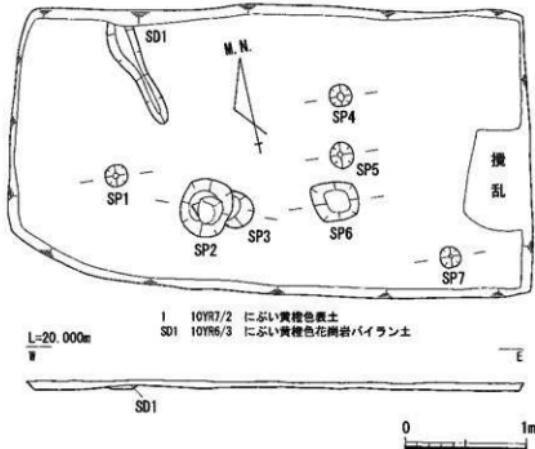
トレンチ中央、北側にて検出した柱穴である。平面形は円形で直径18.5cm、深さ21cmを測る。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は認められず時期は不明である。

**S P 5 (第23・24図)**

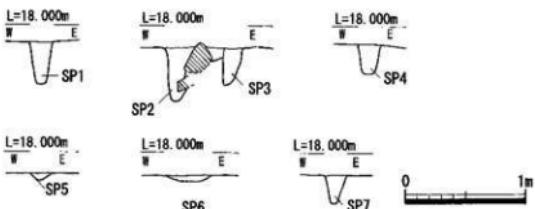
トレンチ中央、S P 4とS P 6の間に位置する。平面形は円形で、直径19cm、深さ5cmを測る浅い柱穴である。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

**S P 6 (第23・24図)**

トレンチ中央、S P 5の南側にて検出した柱穴である。平面形は方形を呈し、他の柱穴と平面形を異にする。南北31cm、南西37cm、深さ5cmを測る。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。時期については、平瓦が出土しており比較的新しい時期のものと考えられる。



第23図 第4次調査遺構平面図・北壁面土層図 (S=1/40)



第24図 第4次調査柱穴土層図 (S=1/40)

**S P 7 (第23・24図)**

トレンチ南東側にて検出した柱穴である。平面形は円形で、直径17cm、深さ23.3cmを測る。埋土は灰黄褐色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

**S P 8 (第22図)**

トレンチ外の北側にて検出した柱穴である。平面形は円形を呈し、直径18.5cmを測る。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土である。

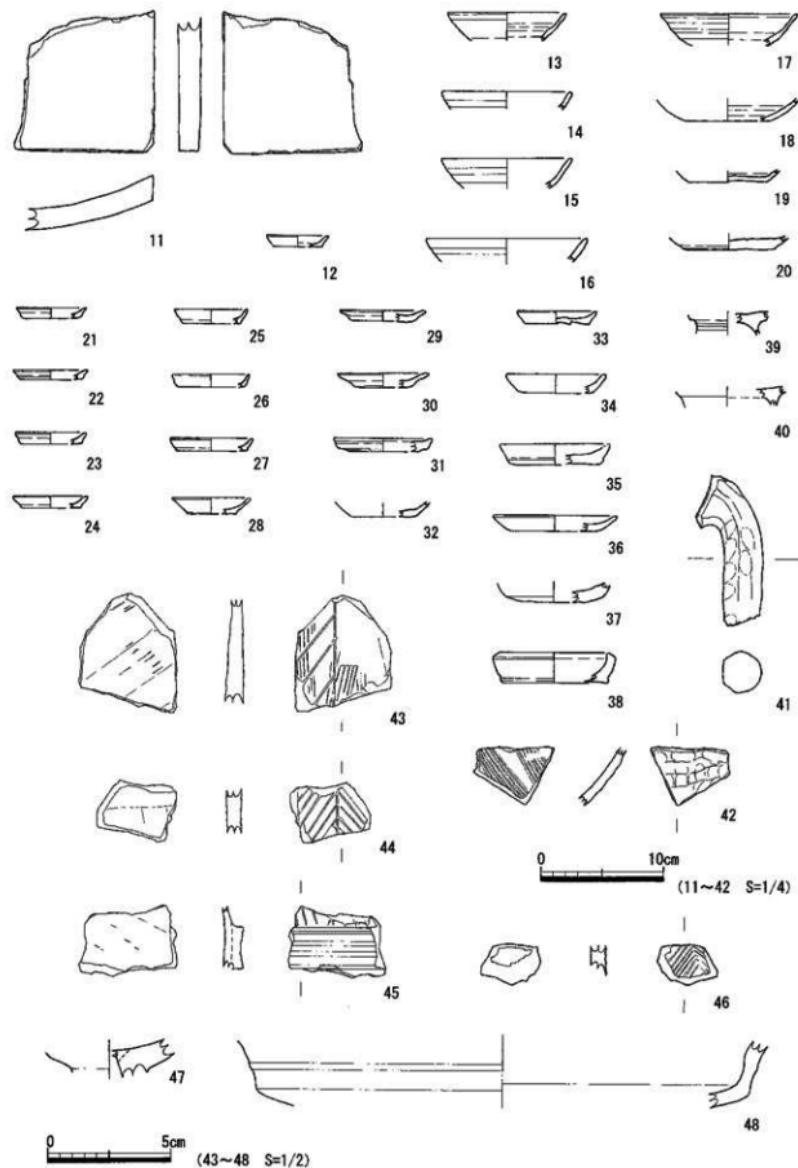
**S D 1 (第23図)**

トレンチ北側にて検出した南北に伸びる溝で、トレンチ外へ伸びる。確認長90cm、幅23cm、深さ4cmを測る。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### (3) 遺物（第25図）

調査区内から出土した遺物に加え、境内にて多量の土師質土器片を表探した。ここでは図化可能なものを報告する。11はS P 6から出土した平瓦で近世から近代のものと考えられる。12はS P 2から出土した土師質土器小皿である。底部は箒削りが施されており、底部端は角張る。13から42は宇佐神社境内で表探した上師質土器である。この内13から20は杯、21から38は小皿である。杯は口縁部の直径が10cmから13cm前後を測る。19・20は杯底部で回転箒削りの後ナデが施されている。小皿については21から24は断面が厚く、口縁部は短く外に開く。25から27は断面がやや薄く、口縁部は上方に伸びる。28は薄い断面に口縁部が外に広がる。底部は箒削りが施され、底部の端には明確な角が見られる。29・30は高さ1cm前後で口縁部が横に開く。31は底部が厚く、口縁部は極端に短い。32は底部片で、内部には漆が塗布されている。33は底部に回転箒削りが顕著に残る。34は口縁部に厚さが見られる。35は底部片で断面は厚く、外側には整形時に伸ばした粘土が段として残っている。36は口縁部、底部ともに広さをもつものである。37は底部が厚く、31のように短い口縁になると考えられる。38は小皿としているが、高台部分の可能性もある。39・40は高台付碗もしくは皿である。41は足釜の脚部である。外側には指頭圧痕とナデが確認できる。内側には横刷毛と指頭圧痕が施されている。42は擂鉢である。外側には指頭圧痕の後にナデが施され、内側には7条一束の描り目が見られる。以上、表探した遺物については杯、小皿とも底部の調整は回転箒削りのみで、糸切り調整は確認できなかった。時期は古いもので13世紀前半を示し、新しいもので14世紀前半代のものと考えられている。

表探遺物に弥生土器が6点ある。43・44は特殊器台形土器（以下特殊器台）の破片である。43の外側には縦刷毛口の後に綾杉文（もしくは斜線文）が施され、内側は箒削りが認められる。土器の厚さは0.4cmから0.8cm程度で薄いつくりである。また、外側には赤色顔料の塗布が認められる。胎土はにぶい橙色を示し、石英・長石に細かな雲母と1mm以下の角閃石が観察できる。44は磨耗が激しいが外側に綾杉文（もしくは斜線文）が確認できる。内側は磨耗して調整は不明である。土器の厚さは0.6cm程度で、胎土はにぶい橙色を示し細かな石英・長石・雲母・角閃石が観察できる。また、43と同様に外側に赤色顔料が塗布されていたものと考えられる。この43・44については綾杉文（もしくは斜線文）の幅や間隔に違いが見られるが、特殊器台は段によって文様が異なることから、両土器片は同一個体の可能性がある。45は特殊壺形土器（以下特殊壺）の突帯部分である。突帯には1~2mm幅の凹線が3条入り、その上部には鋸歯文を構成する沈線が認められる。内側には箒削りが施され、断面からは突帯の接合痕が確認できる。土器の厚さは薄い部分で0.2cm、突帯部で0.8cmを測り、非常に薄いつくりである。胎土はにぶい褐色を示し、細かな石英・長石・雲母・角閃石が観察できる。また、部位については突帯部の上部に鋸歯文が確認できることから、壺の最大径部付近のものと推測することができる。これら43・44・45については、上器の調整・形状・胎土から吉備からの搬入品であることが判明した<sup>1)</sup>。46は壺もしくは壺の体部片と推測される。外側には櫛齒状工具による波状文が確認できる。内側は磨耗して調整は不明である。47は高杯の受け部である。外側にはナデ調整、内側には箒磨きが施されている。また、受け部中央には接合痕が見られる。48は高杯の受け部である。外側にはナデが観察できる。内側の口縁部付近はナデ、受け部には箒磨きが施されている。以上の46・47・48は在地産の上器である。



第25図 第4次調査出土・表探遺物実測図 (S=1/4・1/2)

#### (4) まとめ

本調査区では柱穴8基と溝1条を検出した。各柱穴の対応関係は不明であるが、調査区外に対応する柱穴が存在するものと考えられる。検出した遺構はいずれも地山面を掘削していた。遺物が確認できたものはS P2・3・6で、時期は13世紀末から14世紀初頭頃である。また、境内で表探した土師質土器については、S P2出土のものと近い時期に位置づけられる。

以上、第4次調査では藤尾城跡の時期に伴う明確な遺構・遺物は確認できなかつたが、それに先行する遺構を確認することは重要である。また、今回表探した遺物の中に弥生土器を数点確認しており、中世以前の藤尾山には弥生時代の遺構が存在していた可能性が考えられる。ただし、遺構面まで極めて表土が薄いため後世の削平が及んでいる状態であり、弥生時代の遺構は消滅している可能性が高い。現在は中世の遺構面がわずかに残存しているものと考えられる。

#### 5 藤尾城跡における調査全般にわたるまとめ

第1次から第3次調査までは近世および近代の遺構が主に検出された。第2・3次調査では中世の遺物を確認したが、藤尾城跡に関係する遺構は認められなかつた。一方、第4次調査では、中世の遺構と遺物を検出した。この検出した遺構・遺物については藤尾城の存続時期よりも古いことが確認できた。これらの調査から、現在、藤尾山周辺の遺構面は近現代の削平を受けており、山頂部に僅かに遺構面が残っているものと考えられる。

第4次によって検出した藤尾城よりも先行する中世の遺構・遺物については、藤尾八幡宮（宇佐神社）のものと考えられる。藤尾山には藤尾城築城以前に藤尾八幡宮が存在していたとの記述が『香西記』の「讚賀香西藤尾八幡由来記」にあり、さらに同宮は嘉禄年中（1225～1227年）に阿野・香川郡の領主であった讚岐藤原氏香西左近将監資村が豊前国宇佐八幡宮から藤尾山に勧請したものとする。しかし、天正3年（1575年）に入ると藤尾城築城のため、神社は他地へ移された。この時築かれた藤尾城は香西氏の本城となるが、天正13年（1585年）に秀吉の四国平定によって香西氏は滅び廃城となる。その後、慶長年間（1596～1615年）に八幡宮が藤尾山に戻されたことが記されている。以上、藤尾山の記録として、藤尾八幡宮創建（1225～1227年）、藤尾城（1575～1585年）、八幡宮再興（1596～1615年）と続く。その後は、明治16年（1883年）の焼失と同32年（1899年）の再建、昭和3年（1928年）社務所の修繕新築が記録に見られる。今回検出したS P2は、出土遺物から13世紀末から14世紀初頭のものと考えられ、藤尾八幡宮創建時の年代より降ることから以降に建てられた建物に作成したもので、香西記の記述を裏付ける資料と言えよう。S P6は出土した瓦片から近世・近代のものと考えられる。その他の遺構については遺物が伴わないので時期は不明であるが、藤尾八幡宮または藤尾城跡の遺構が含まれているものと推測できる。

表探した弥生土器の中から特殊器台・特殊壺を確認した。香川県下では、高松市松縄町の天満・宮西遺跡に次いで2例目である<sup>2)</sup>。藤尾山は今でこそ北に陸地が続くが、かつてはすぐ北に瀬戸内海が広がり、岡山県と対峙し、海に面した小高い山であったと考えられている。遺物は藤尾山の中で最も高い場所に位置する本殿付近において表探したものである。造成の際に他地から土を山頂に運んだという記録は確認できず、あえて山頂に土を運ぶとは考えにくいことから、遺物は藤尾山に属するものと考えられる。これらの遺物は吉備からの搬入品であり、特殊器台と特殊壺がセットで搬入されている事実が明らかとなった。このことや当時の立地環境を考慮すれば、藤尾八幡宮や藤尾城が築城される以前の藤尾山には、弥生墳丘墓もしくは弥生時代の遺跡があつたと推測できる。また、特殊器台・特殊壺の分布については、近年の事例増加により吉備内で成立した後、ある時期に吉備外へ広がりを見せると推測されている。藤尾城跡で表探したものは立

坂型のものより下ると考えられ、この拡散する時期に搬入されたものと捉えることが可能である<sup>3)</sup>。

いずれにせよ、今回表した遺物は弥生時代の讃岐と吉備との関係を探る上で貴重な資料である。以上、当報告書では資料報告と若干の推測に止め、詳細な土器の型式や時期、搬入等の問題については今後の事例の増加を待つものとしたい。

#### 引用・参考文献

香西町公民館1965『宇佐神社』『新香西史』

香西記を読む会1990『高松市の文化財第13編　ふるさと覚書「香西記」読み下し』

片桐孝治1992「考察－古代から中世にかけての土器様相一」『中小河川大東川改修工事(津ノ郷橋～弘光橋間)に伴う埋蔵文化財調査報告 川津元結木遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

香川県教育委員会1994・1996・1997『香川県埋蔵文化財調査年報』平成5・7・8年度

池田 誠1988・1989「瀬戸内の港津都市と中世城郭(その一)－讃岐呑西浦と塩飽笠島浦－」

「瀬戸内の港津都市と中世城郭(その二)－讃岐塩飽島－」『中世城郭研究』第2号・第3号 中世城郭研究会

野中寛文2003「藤尾城跡」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会

佐藤龍馬2003「瓦」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告第4回 高松城跡(西の丸町地区)II』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

阿河銳二2006第11回中国・四国地区城館調査検討会資料『城郭瓦の変遷－織豊期から近世へ…』宇垣匡雅1992「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社

岡山県教育委員会ほか1994「5.甫崎天神山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』

旧岡山大学考古学研究部1997「岡山市甫崎・黒住丘陵の遺跡分布調査－雲山鳥打遺跡・49基の古墳群などの踏査－」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会

川畑 聰2004「特殊器台について」「弥生時代後期～古墳時代前期初頭における搬入土器について」『天満・宮西遺跡～旧河道編～』高松市教育委員会

#### 註

1) 特殊器台・特殊壺については、岡山県古代吉備文化財センター宇垣匡雅・大橋雅也両氏の御教示を得た。

2) 高松市内では天満・宮西遺跡、藤尾城跡の2例のほか、前方後円墳と円墳、もしくは双方中円墳と考えられる船岡山古墳から特殊器台が出土しているとされていた。2008年に当市より船岡山古墳の測量調査が行なわれ、墳丘から特殊器台形埴輪と考えられる上器片を確認した。よって、現段階では船岡山古墳出土の土器は特殊器台である可能性は低い。

また、墳丘については一部埴輪を確認したことから双方中円墳ではないことが確認されたが、依然埴丘形は確定していない。

3) 註1) と同じ。

## 第2節 作山城跡

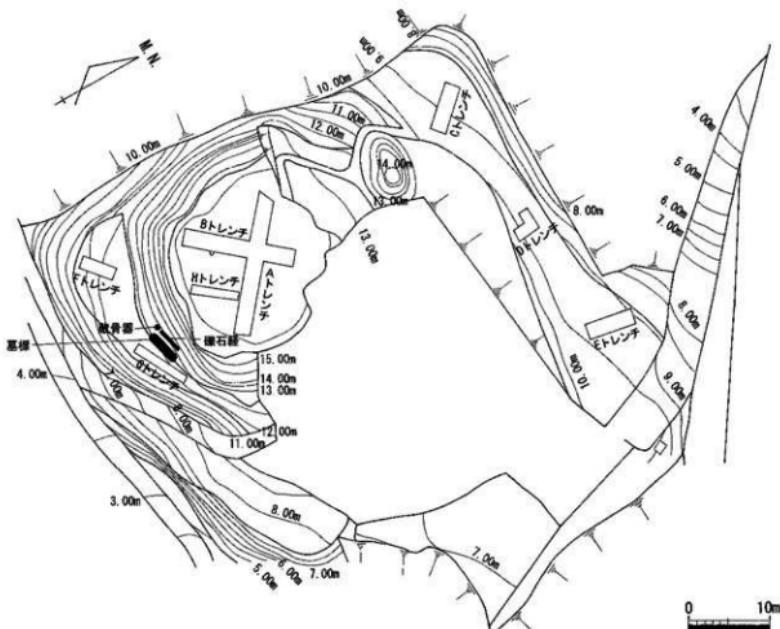
### (1) 調査の概要 (第26図)

作山城跡は香西南町にあった標高約16mの小丘陵に所在した。調査当時では作山城跡の裾部まで宅地開発が及んでいた。頂上付近は南北方向約60m、東西方向約66mを測る方形の範囲で原況を保っていた。しかし、東側の一段下がったかなり広い削平地は宅地であったため、試掘調査は頂上部と北側と南側にある細長い削平地を対象とした。

試掘調査は、城内の遺構の有無と城跡の年代的な位置づけに直接関わる遺物を検出することにより、城跡の性格をさらに解明する目的で実施した。トレントの設定は畑地の作物等の関係で任意に9本のトレントを設定し、A～Hトレントと呼称した。

A・B・Hトレントは標高約16mを測る頂上部の平坦地に設定した。平坦地は北から南に向かって緩やかな傾斜で下がっている。Aトレントは平坦地の長軸に沿うように南東一北西方向に設定し、トレントの全長は17.0m、幅は2.0mである。BトレントはAトレントに直行する北東一南西方向に設定し、全長は13.5m、幅は2.0mである。HトレントはAトレントの西側に位置し、Bトレントと平行する方向に設定し、全長は5.5m、幅は1.0mである。

C・D・Eトレントは北側の細長い削平地に設定した。削平地は南から北に向かって緩やかに下がる。Cトレントは削平地の西側に位置し、南東一北西方向に設定し、全長は5.5m、幅は2.0mである。Dトレントは中央に位置し、L字形を呈する。南北長は3.0m、東西長は2.5mである。



第26図 作山城跡地形測量図およびトレント設定図 (S=1/600)

Eトレンチは東側に位置し、南北方向に設定し、全長は5.7m、幅は2.0mである。

F・Gトレンチは南側の細長い削平地に設定した。削平地は北から南に緩やかな傾斜で下がる。Fトレンチは平坦地の西側に位置し、南西—北東方向に設定し、全長は4.0m、幅は1.5m、Gトレンチは東側に位置し、東西方向に設定し、全長は7.0m、幅は1.0mである。

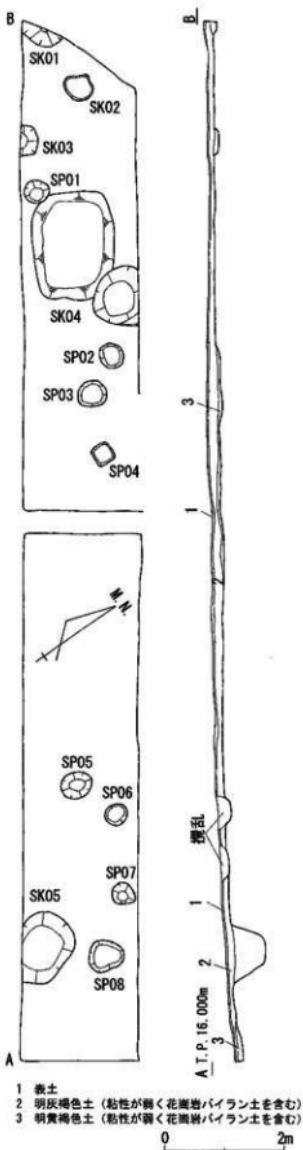
## (2) 遺構と遺物

### Aトレンチ (第27~29図)

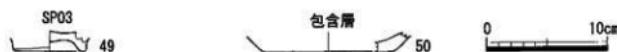
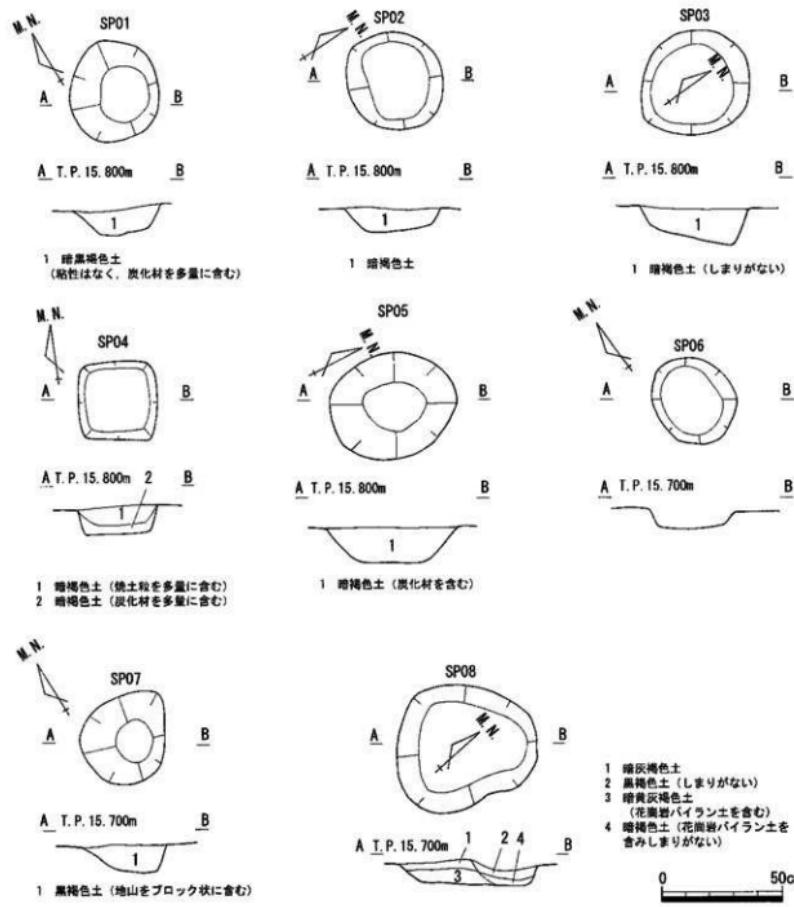
トレンチは地形の傾斜に沿うように北から南に緩やかに下がる。上層は3層であるが、大部分を占めるのは第1層の表土層と第2層の明灰褐色土・花崗岩バイラン土である。トレンチ中央部に第3層の明黄褐色土が薄く堆積する。検出した遺構は土坑5基・柱穴8基である。SK01・05は近代の陶磁器、土師質土器鉢木鉢、コンクリート、ピン、SP04は土管のみが出土し、近代の遺構である。SK01～03とSP01～03・05～08は出土遺物や検出状況および埋土から判断して近世のものと考えられる。SP03は陶器碗 (第28図49)、SP06は鉄片が出土した。49は内面と量付が無軸である。包含層からの出土遺物としては、土師質土器甕 (第28図50)、磁器碗、土師質土器杯、同植木鉢、瓦、鉄片がある。50は平底であり、内外面とも摩滅する。

### Bトレンチ (第30・31図)

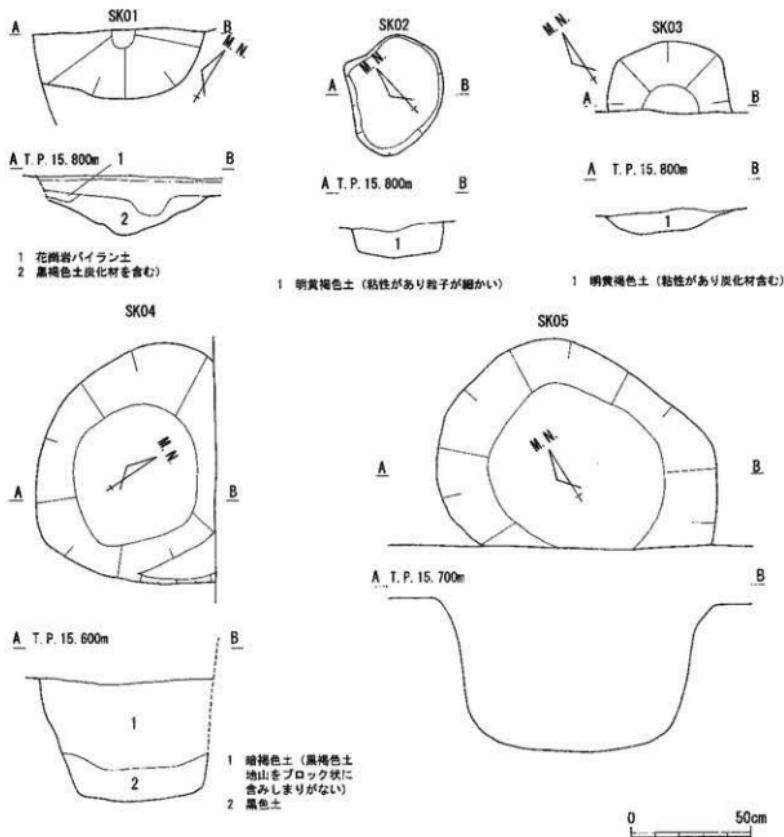
トレンチは両端が緩やかに下がる。七層の堆積状況はAトレンチと同様であり、第1層の表土層と第2層の明灰褐色土・花崗岩バイラン土が大半である。西端では第3層の明黄褐色土が厚く堆積し、中央部と東端付近には第3層が薄く堆積する。東端付近では第2層の中に第3層がブロック状に混入した第4層がある。検出した遺構は土坑4基であり、SK08は近代の陶磁器とコンクリート、ピン、タイルが出土し、他の土坑は出土遺物がないが、埋土がSK08と同一である。このことから、SK06～09は近代のものであると考えられる。包含層からの出土遺物は、磁器碗、陶器甕、土師質土器甕、同土管、瓦、鉄片があるが、図化できる遺物はなかった。



第27図 Aトレンチ平・断面図 (S=1/80)



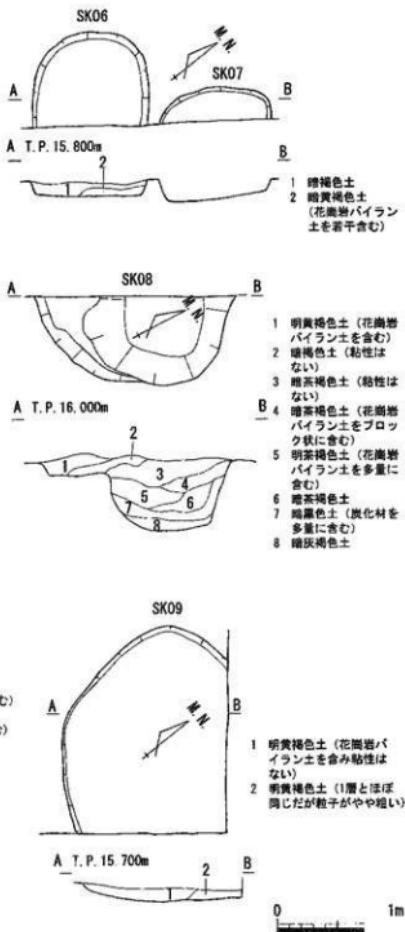
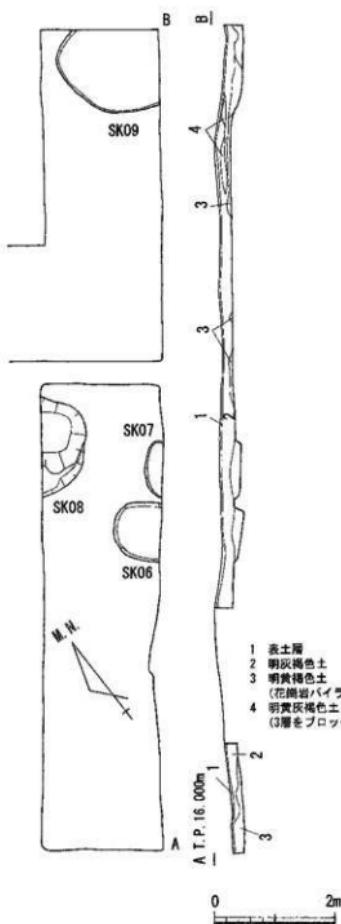
第28図 SP01~08平・断面図および出土遺物実測図 (S=1/20・1/4)



第29図 SK01~05平・断面図 (S=1/20)

C トレンチ (第32図)

トレンチは50cmの比高差をもって南から北に向かって緩やかに低くなっている。上層の堆積は10層に細分できるが、第1層～第6層と第7層～第10層に大別される。第1層～第6層は堆積状態が非常に乱れており、人為的であると考えられる。第7～10層は地山であり、グライ化や植物の根による影響などで細分できた。検出した遺構は土坑2基のみであり、近代の磁器碗、陶器火鉢、土師質土器壺、同焜炉（第32図52）、ガラス瓶、ビニール線、瓦、釘が出土することから近代の遺構である。包含層から出土した遺物は磁器小鉢（第32図51）と数点の軟質陶器土瓶、七師質土器壺がある。

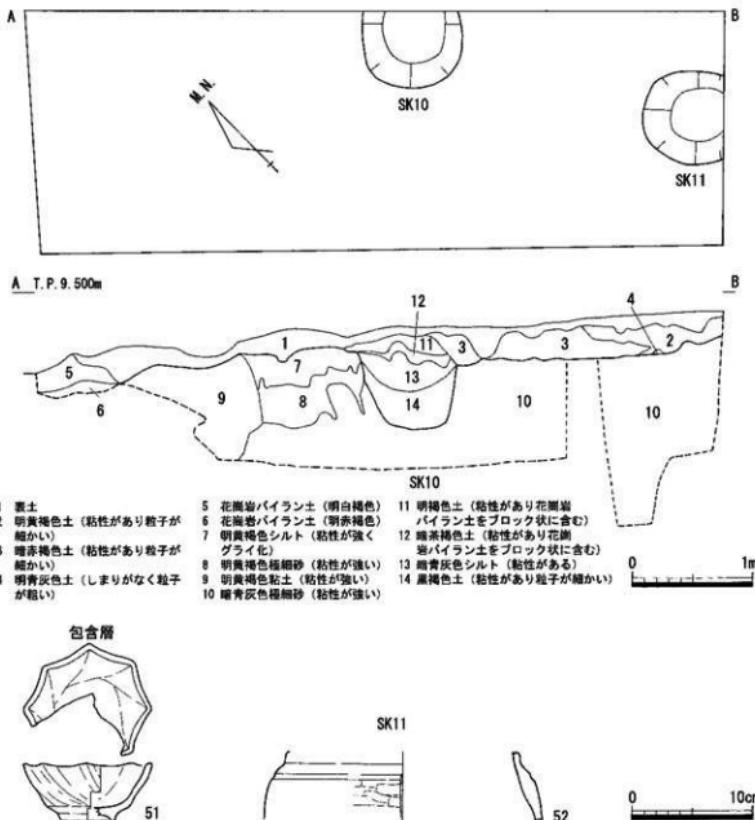


第30図 B トレンチ平・断面図 ( $S=1/80$ )

第31図 SK06~09平・断面図 ( $S=1/40$ )

#### D TRENCH (第33図)

トレンチは南端から北へ1mまで30cmの比高差で低くなり、北側は平坦である。七層の堆積は4層に細分できるが、耕作土の第1層と暗褐色土の第2層が大半である。検出した遺構は土坑2基と柱穴3基である。SK12とSK13はほぼ同一の埋土であり、軟質陶器土瓶（第33図53）、染付碗（第33図51）、陶器擂鉢（第33図55）、土師質上器甕、鉄片、コンクリート、タイル、スレートが出土し、近代の遺構である。54は外側と見込みに染付がある。55は内面全面に御目があり、外側には灰褐色の釉がかかる。SPO9～11は黒褐色土の埋土であり、SPO9は肥前系磁器皿（第33図56）が出土しており、柱穴は近世のものと考えられる。

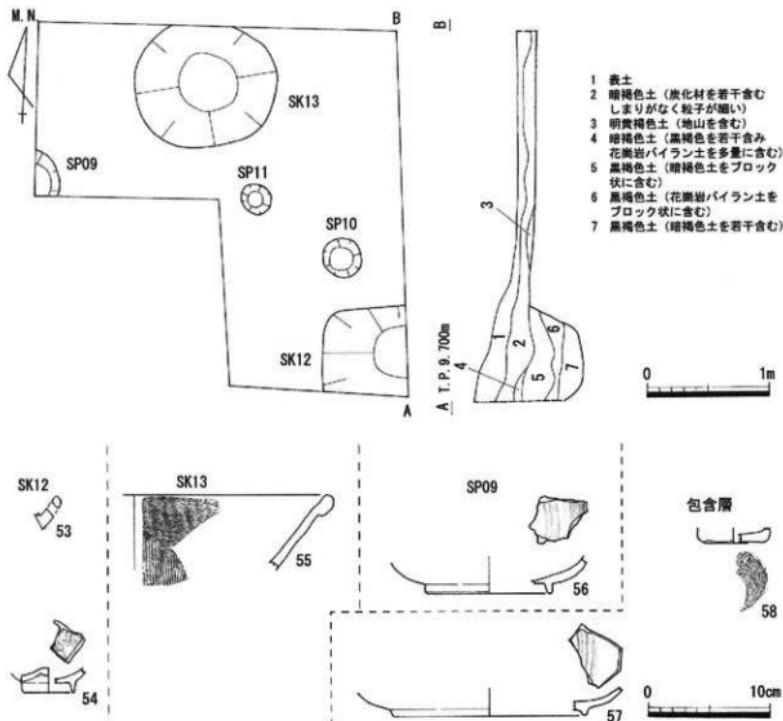


第32図 C トレンチ平・断面図および出土遺物実測図 (S=1/40・1/4)

56は内面に白色刷毛目が見られる。包含層から出土した遺物は肥前系磁器皿(第33図57)、土師質上器杯(第33図58)、数点の陶磁器片、土師質上器甕、鉄片である。57は肥前系磁器で見込みに淡青色の染付がある。58は底部に回転糸切りが残る。

#### E トレンチ (第34図)

トレンチは40cmの比高差で南から北に向かって緩やかに下がっている。基本的な土層は表土、炭化材を含む暗黒褐色土、炭化材を多量に含む暗黒褐色土の3層である。検出した遺構は溝2条と柱穴2基である。遺構から遺物は出土していないが、埴土から判断して近世のものと考えられる。包含層からの出土遺物は軟質陶器上瓶(第34図59)のみである。



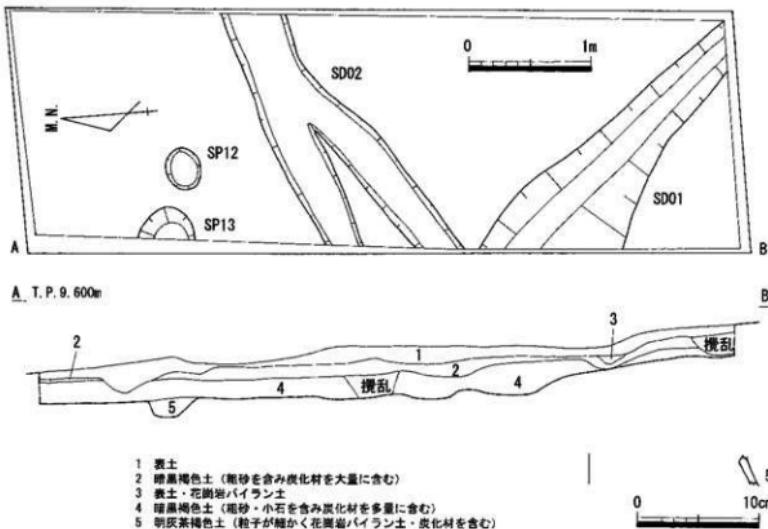
第33図 Dトレンチ平・断面図および出土遺物実測 (S=1/40・1/4)

#### Fトレンチ（第35図）

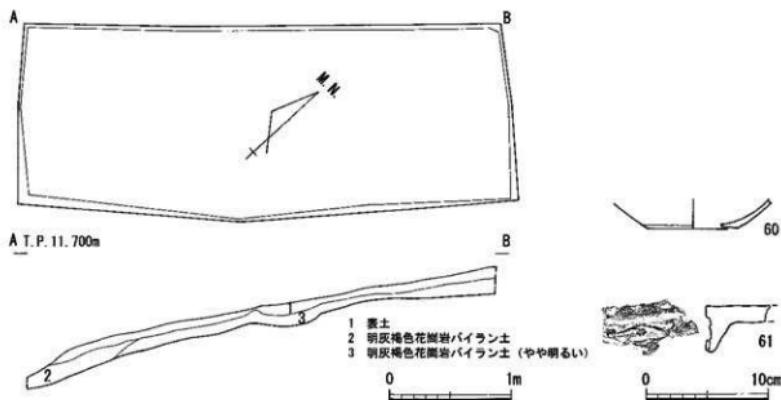
トレンチは90cmの比高差で北から南に向かって下がっている。土層は表土、花崗岩バイラン土、明灰褐色土を含む花崗岩バイラン土の3層であり、地山の傾斜に沿うように堆積する。遺構の検出はなく、包含層からの出土遺物は軟質陶器土瓶（第35図60）、軒平瓦（第35図61）のみである。60は底径7.4cmの土瓶であり、内外面にナデが施される。61は内区に一重の唐草文を有する。

#### Gトレンチ（第36図）

トレンチは20cmの比高差で東から西に向かって緩やかに下がっている。土層は表土、花崗岩バイラン土を含む暗黄褐色土、繊りがなく粒子の粗い暗褐色土、地山を多量に含む暗黄褐色土、暗黄褐色土の5層である。検出した遺構は土坑1基である。出土遺物はないため時期特定は難しいが、埋土や検出状況から近世のものと考えられる。包含層からの遺物の出土もない。



第34図 E トレンチ平・断面図および出土遺物実測図 (S=1/40・1/4)



第35図 F トレンチ平・断面図および出土遺物実測図 (S=1/40・1/4)

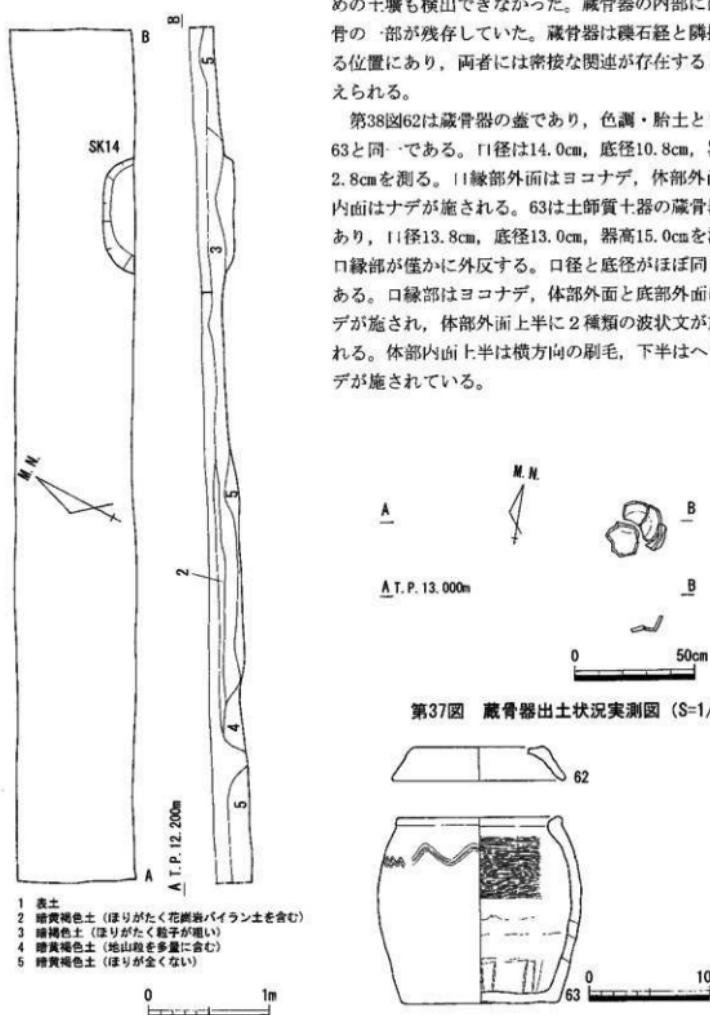
#### H トレンチ

トレンチはほとんど水平であり、土層はA・B トレンチと同様に表土層と花崗岩バイラン土を含み粘性の弱い明灰褐色土の2層である。遺構は全く検出できず、包含層からも遺物は出土しなかつた。

蔵骨器（第37・38図、第3表）

蔵骨器は土師質土器製であり、礫石経の約1m西側の斜面が削平地に移行する変換点において検出した。検出面の標高は12.95mである。地上に標識としての墓塔や墓碑は見られず、蔵骨器を埋納するための土壇も検出できなかった。蔵骨器の内部には人骨の一部が残存していた。蔵骨器は礫石経と隣接する位置にあり、両者には密接な関連が存在すると考えられる。

第38図62は蔵骨器の蓋であり、色調・胎土ともに63と同一である。口径は14.0cm、底径10.8cm、器高2.8cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、体部外面と内面はナデが施される。63は土師質土器の蔵骨器であり、口径13.8cm、底径13.0cm、器高15.0cmを測る。口縁部が僅かに外反する。口径と底径がほぼ同じである。口縁部はヨコナデ、体部外面と底部外面はナデが施され、体部外面上半に2種類の波状文が施される。体部内面上半は横方向の刷毛、下半はヘラナデが施されている。



第36図 G トレンチ平・断面図 (S=1/40)

第38図 蔵骨器実測図 (S=1/4)

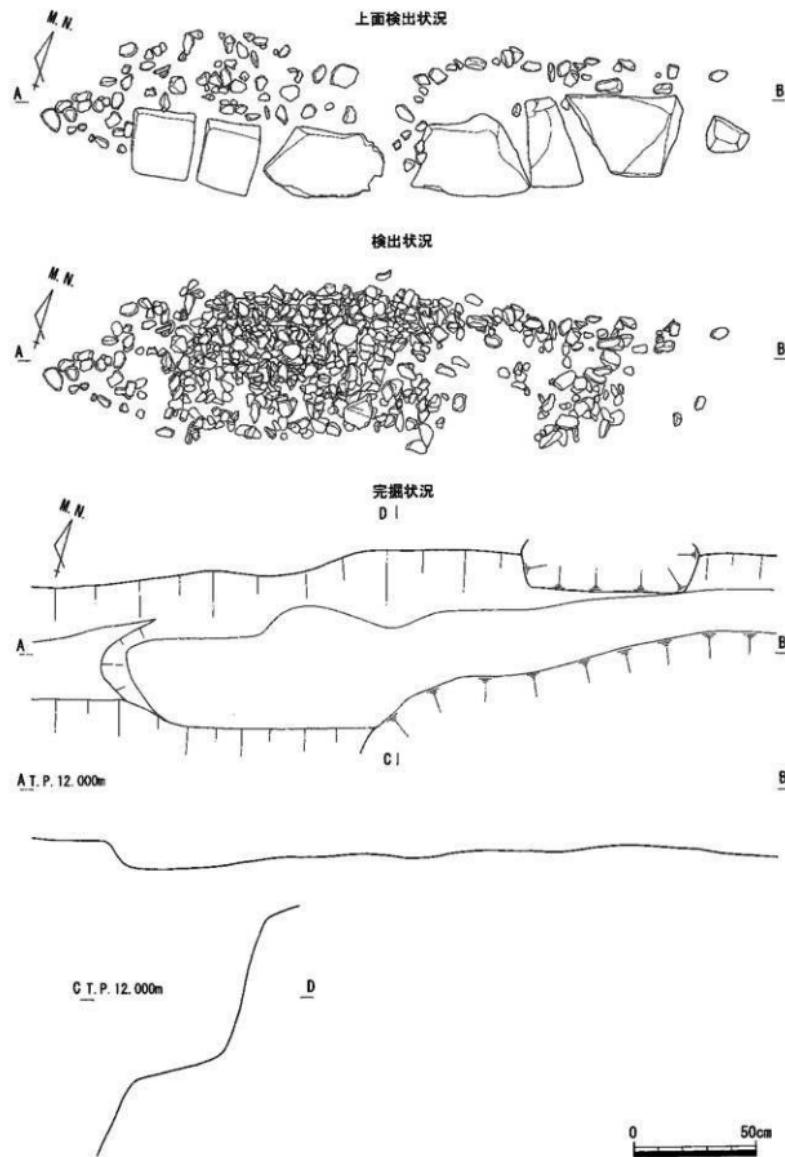
### 礫石經（第39図、第3表、図版8～20）

礫石經は、南側削平地の中央部に存在する18基の墓標の背側において礫石経の一部が露出した状態で検出した。検出地点は斜面が削平地に移行する変換点にあたり、斜面を大きく削平したテラス状の平坦部に礫石経が埋納されていた。地上には経塚としての墳丘はなく、標識である経碑も見られず、文字の書かれた石が集積するのみであった。検出上面には墓標の基礎である正方形の集塊岩2石と板状の安山岩5石がほぼ直線的に並べられていた。この7石のレベルは約20cmの比高差で西側から東側に低くなる。礫石経は全長2.90m、幅70cm、厚さ40cmを測る規模の帶状を呈するが、中央から西側1mまでの範囲に礫石が集中している。礫石は大部分が川原石であるが、非常に僅かであるが花崗岩の割石も使用されている。礫石の大きさは長径2～15.5cmを測り不定である。礫石を取り除いた状態の掘り方は、斜面を2段に大きく削平して細長いテラス状の平坦部を作り、さらに半坦部を10cm掘り下げている。底面は非常に緩やかな傾斜で東側に向かって上がり、東側の掘り込みは不明瞭である。

出土した礫石経の総数は814個であり、その内訳は文字が判読できるものは534個、文字はあるが判読できないもの134個、文字のないもの146個である。礫石経の大部分が1石に1字ずつ墨書きした一字一石経であるが、1石に多数の文字を墨書きした多字一石経も数例ある。一字一石経の文字の種類は31であり、その中で最も多く見られるのは「摩」「羅」である。多字一石経として、図版8～49は表面に「南無阿弥陀佛」、裏面には「妙林」「妙雲」、図版11～220は石の3面に「南無阿弥陀佛」「南無阿弥陀佛」「南無阿陀」と書いている。「南無阿弥陀佛」と書かれた他の礫石の裏にも「妙法」「真心」などの供養者の名が見られる。書写された経典はあきらかではないが、一般的には法華経を書写した礫石経が多い。ただ、前述したように「南無阿弥陀佛」と墨書きした礫石が17個あり、法華経以外の経典も書写されている。経碑や年号のある礫石や共伴遺物がないため築造年代は不明である。

第2表 作山城跡礫石経文字別個数表

文字	数	文字	数	文字	数
摩	62	謨	20	輶	8
羅	51	尼	19	隕	4
鉢	38	野	18	佛	3
尾	28	南無阿弥陀佛	17	南	1
阿	26	縛	16	南無	1
入	24	履	16	陀	1
捺	23	曩	16	弥	1
納	22	左	16	藏	1
犀	22	伽	14	唵	1
母	21	多	13		
吽	20	訶	11		



第39図 碓石経平・断面図 (S=1/20)

第3表 作山城跡出土礫石絆一覧表

番号	直径	短径	厚さ	石質	性質	番号	直径	短径	厚さ	石質	性質
1	9.0	6.5	3.0	安山岩	鉛	69	6.0	4.2	2.5	安山岩	判読不可
2	6.5	4.3	2.2	安山岩	鈍	70	3.6	3.0	1.2	泥灰岩	厚
3	7.0	4.6	2.5	安山岩	鋸	71	5.0	2.0	3.0	安山岩	墨書なし
4	4.0	3.5	2.0	安山岩	納	72	5.6	4.5	3.5	安山岩	墨書なし
5	4.0	3.2	2.0	安山岩	摩	73	5.5	5.0	2.3	安山岩	入
6	7.0	4.5	2.0	安山岩	鐵	74	4.6	3.0	1.3	安山岩	納
7	3.6	3.5	1.2	石英斑岩	墨書なし	75	9.5	5.5	3.2	石英斑岩	鉛
8	7.0	4.0	3.0	安山岩	多	76	4.0	4.0	1.7	安山岩	鉛
9	7.5	6.5	2.0	安山岩	厚	77	3.2	4.2	2.0	安山岩	鉛
10	4.0	3.0	2.5	安山岩	墨書なし	78	8.6	5.7	2.0	安山岩	判読不可
11	3.0	3.5	1.5	石英片岩	判読不可	79	7.0	6.0	3.0	安山岩	墨書なし
12	8.0	3.5	2.5	安山岩	鐵	80	7.0	5.3	4.3	砂岩	鉛
13	8.0	6.0	3.0	安山岩	墨書なし	81	6.0	5.0	2.6	堆積岩	墨書なし
14	4.0	3.0	3.0	砂岩	鉛	82	10.0	6.8	4.0	安山岩	鉛
15	9.0	4.8	2.3	安山岩	鉛	83	4.1	3.0	3.1	安山岩	尾
16	6.0	6.0	2.5	砂岩	摩	84	6.5	5.0	4.0	安山岩	鉛
17	9.0	6.3	1.2	砂岩	鉛	85	6.0	5.5	3.0	安山岩	舟
18	9.0	5.0	3.5	砂岩	厚	86	7.2	4.0	1.3	安山岩	(表) 南無阿弥陀佛 (裏) 紗口紗口
19	6.0	3.5	2.5	砂岩	墨書なし	87	5.0	3.0	2.5	安山岩	墨書なし
20	7.0	4.0	3.0	砂岩	判読不可	88	6.0	3.5	2.8	安山岩	墨書なし
21	8.3	5.0	2.3	安山岩	鉛	89	6.5	4.4	2.0	砂岩	判読不可
22	4.2	3.4	0.8	砂岩	鉢	90	7.0	6.0	3.0	砂岩	判読不可
23	4.2	4.0	1.1	安山岩	鉛	91	5.4	3.5	2.5	砂岩	鉢
24	7.0	4.0	2.0	安山岩	鉛	92	4.2	3.0	3.0	砂岩	墨書なし
25	7.7	2.0	1.5	安山岩	多	93	4.0	3.1	1.2	砂岩	鉛
26	4.2	3.0	2.0	砂岩	墨書なし	94	3.6	3.0	2.0	安山岩	墨書なし
27	8.0	6.0	2.8	安山岩	鉛	95	9.0	4.2	2.2	安山岩	(表) 南無阿弥陀佛 (裏) 口口
28	4.5	3.0	3.0	安山岩	墨書なし	96	3.0	3.3	2.0	安山岩	摩
29	8.5	4.2	3.5	安山岩	墨書なし	97	6.0	3.2	2.0	砂岩	尾
30	5.5	3.5	2.5	安山岩	墨書なし	98	6.0	3.5	2.5	安山岩	鉛
31	8.6	4.5	2.2	安山岩	厚	99	8.0	4.5	3.5	砂岩	墨書なし
32	7.1	4.0	2.0	安山岩	尾	100	6.0	5.0	2.5	砂岩	厚
33	6.5	5.6	2.5	安山岩	鉛	101	2.5	2.5	2.0	安山岩	墨書なし
34	4.7	4.0	2.0	安山岩	判読不可	102	3.0	2.5	1.2	砂岩	墨書なし
35	6.3	3.5	2.5	安山岩	判読不可	103	9.0	5.0	6.0	砂岩	墨書なし
36	6.0	3.8	1.5	砂岩	判読不可	104	6.9	4.8	3.0	砂岩	鉛
37	4.8	5.0	3.5	砂岩	判読不可	105	7.0	3.3	2.0	安山岩	尾
38	5.0	3.2	1.2	安山岩	鉛	106	4.0	3.0	2.5	砂岩	判読不可
39	4.2	3.0	2.0	砂岩	墨書なし	107	3.5	3.5	2.0	安山岩	判読不可
40	3.5	3.0	2.1	砂岩	鉛	108	9.0	4.0	3.0	玄武岩	墨書なし
41	8.0	6.0	4.5	安山岩	判読不可	109	5.5	3.6	3.0	砂岩	墨書なし
42	5.0	4.5	2.3	安山岩	墨書なし	110	9.0	7.3	3.0	砂岩	墨書なし
43	9.0	4.8	3.2	砂岩	厚	111	7.0	4.0	2.0	砂岩	鉛
44	7.6	3.5	2.0	安山岩	鉛	112	5.3	5.0	3.5	安山岩	鉛
45	5.5	3.0	1.8	安山岩	墨書なし	113	10.0	6.5	1.5	安山岩	鉛
46	6.0	3.8	3.6	安山岩	入	114	5.6	4.3	3.3	安山岩	鉛
47	7.5	5.0	1.5	安山岩	判読不可	115	5.6	4.6	2.5	安山岩	墨書なし
48	3.8	4.2	2.0	砂岩	鉛	116	6.0	6.0	2.5	安山岩	判読不可
49	6.5	3.0	3.0	安山岩	鉛	117	3.0	1.5	2.2	安山岩	判読不可
50	14.0	5.5	2.8	砂岩	墨書なし	118	8.3	3.5	3.5	安山岩	鉛
51	5.4	4.5	2.2	安山岩	墨書なし	119	2.1	2.0	1.3	安山岩	墨書なし
52	6.0	6.0	2.3	安山岩	鉛	120	5.0	2.3	1.2	砂岩	墨書なし
53	7.8	5.7	2.3	安山岩	墨書なし	121	7.6	5.0	2.6	砂岩	鉛
54	8.0	7.0	3.5	安山岩	判読不可	122	5.0	5.0	5.0	安山岩	摩
55	3.0	1.6	1.3	安山岩	墨書なし	123	7.0	3.6	3.6	安山岩	墨書なし
56	6.5	4.0	3.0	安山岩	納	124	6.0	4.3	3.1	安山岩	判読不可
57	5.0	4.2	2.0	安山岩	鉛	125	5.1	3.0	1.5	安山岩	入
58	7.0	4.0	4.0	安山岩	鉛	126	7.0	3.5	2.0	砂岩	納
59	7.3	7.0	2.0	砂岩	鉛	127	3.5	3.0	1.1	砂岩	墨書なし
60	7.0	3.7	2.1	安山岩	判読不可	128	4.0	2.3	1.8	砂岩	鉛
61	7.0	6.0	5.0	砂岩	墨書なし	129	6.0	4.5	1.7	安山岩	鉢
62	2.5	5.0	2.0	砂岩	鉛	130	6.2	3.2	2.2	安山岩	判読不可
63	4.0	3.5	2.0	安山岩	墨書なし	131	8.0	5.0	4.0	安山岩	摩
64	8.0	7.5	3.0	安山岩	判読不可	132	4.0	2.8	2.3	安山岩	母
65	6.8	4.3	1.5	安山岩	判読不可	133	10.5	6.0	2.3	安山岩	判読不可
66	6.0	4.6	1.5	砂岩	判読不可	134	7.1	3.3	1.5	安山岩	尾
67	8.2	7.3	2.0	砂岩	判読不可	135	3.3	3.0	0.4	砂岩	尾
68	7.0	4.5	1.8	砂岩	判読不可	136	6.5	4.0	3.0	砂岩	鉛

番号	直徑	延長	厚さ	石質	墨書	番号	直徑	延長	厚さ	石質	墨書
137	4.0	3.0	2.0	砂岩	墨書なし	205	6.0	3.2	1.0	安山岩	撫
138	3.5	3.0	2.5	安山岩	判読不可	206	7.0	3.0	2.5	安山岩	摩
139	6.0	4.0	2.0	安山岩	阿	207	5.6	5.1	1.8	安山岩	属
140	7.0	5.5	3.5	安山岩	族	208	4.0	3.1	2.0	安山岩	摩
141	4.5	3.0	3.0	安山岩	拂	209	3.3	3.0	2.1	安山岩	判読不可
142	7.0	6.5	3.0	砂岩	曉	210	4.3	3.0	1.5	安山岩	多
143	4.1	5.2	2.5	安山岩	判読不可	211	8.0	6.0	3.0	安山岩	左
144	5.0	3.2	2.6	安山岩	叶	212	6.0	5.0	3.0	花崗岩	斬
145	8.0	3.6	2.0	砂岩	判読不可	213	7.0	5.5	3.0	安山岩	阿
146	8.6	6.5	2.5	安山岩	羅	214	7.0	6.0	4.0	安山岩	阿
147	5.7	4.0	2.8	安山岩	阿	215	5.0	3.0	2.6	砂岩	多
148	5.5	3.5	2.0	安山岩	墨書なし	216	7.5	5.0	5.5	安山岩	判読不可
149	4.0	4.0	3.0	安山岩	墨書なし	217	9.3	4.5	2.0	安山岩	南極□□□
150	4.3	2.6	1.2	砂岩	叶	218	7.0	4.0	2.0	安山岩	属
151	7.0	3.5	2.3	安山岩	判読不可	219	4.5	3.5	1.7	安山岩	叶
152	2.9	1.8	1.3	砂岩	羅	220	10.5	3.0	2.5	安山岩	南極阿弥陀佛 南極阿弥陀佛 南極阿弥陀佛
153	3.0	4.5	1.3	安山岩	尼	221	5.0	3.5	1.8	安山岩	花
154	4.6	2.5	2.0	安山岩	墨書なし	222	7.6	4.0	2.0	安山岩	属
155	4.5	3.0	3.0	砂岩	野	223	5.0	2.5	1.6	安山岩	尾
156	4.5	2.1	2.0	安山岩	尼	224	3.0	2.5	2.0	安山岩	墨書なし
157	3.5	2.0	1.8	砂岩	判読不可	225	15.5	5.0	4.0	砂岩	(表) 南無阿彌陀仏 妙智(裏) 蓮
158	3.1	3.0	1.5	砂岩	叶	226	6.5	4.6	5.0	安山岩	包
159	4.0	5.1	2.0	安山岩	羅	227	4.0	4.0	2.5	安山岩	尼
160	7.0	3.0	2.0	安山岩	野	228	4.4	2.6	1.5	安山岩	摩
161	4.1	4.0	2.0	砂岩	卦	229	10.0	7.0	1.8	安山岩	判読不可
162	7.2	7.0	2.5	砂岩	摩	230	3.5	3.5	2.5	安山岩	摩
163	5.0	4.0	2.3	安山岩	左	231	5.4	4.3	1.7	安山岩	羅
164	6.0	5.0	2.5	砂岩	墨書なし	232	3.0	1.5	1.0	砂岩	判読不可
165	3.7	3.0	2.0	砂岩	墨書なし	233	7.0	6.0	2.8	安山岩	純
166	4.5	3.6	3.0	安山岩	入	234	5.0	4.0	2.0	安山岩	阿
167	5.3	3.1	2.8	安山岩	尾	235	8.5	4.5	3.0	安山岩	判読不可
168	6.0	6.0	2.3	砂岩	判読不可	236	10.3	6.3	2.0	安山岩	南無□□□妙口□□
169	6.5	4.6	4.0	安山岩	叶	237	3.7	3.3	1.5	安山岩	斬
170	4.5	6.2	3.0	安山岩	野						
171	8.0	3.5	2.0	安山岩	摩	239	5.7	3.0	2.5	安山岩	謹
172	5.0	4.5	3.1	安山岩	墨書なし	240	5.8	3.5	2.2	安山岩	伽
173	5.0	2.0	2.0	砂岩	入	241	3.5	2.5	1.5	安山岩	尼
174	3.0	3.5	2.0	砂岩	墨書なし	242	4.5	2.0	1.5	安山岩	要書なし
175	3.2	2.5	2.0	砂岩	母	243	8.5	6.5	4.0	砂岩	判読不可
176	7.0	3.6	1.0	砂岩	謹	244	7.0	4.5	2.5	花崗岩	曉
177	5.6	3.5	2.5	砂岩	属	245	7.0	5.0	3.0	安山岩	判読不可
178	8.0	4.5	3.0	安山岩	阿	246	6.1	2.7	1.5	砂岩	阿
179	6.5	3.5	2.5	安山岩	拂	247	6.8	2.7	2.0	砂岩	左
180	8.1	6.7	2.0	砂岩	晓	248	6.5	5.0	1.0	安山岩	判読不可
181	3.2	2.0	1.2	安山岩	判読不可	249	7.3	4.5	2.4	花崗岩	卦
182	8.3	5.5	2.3	砂岩	謹	250	6.5	3.0	2.2	安山岩	卦
183	6.5	4.5	2.0	安山岩	摩	251	7.5	5.2	3.1	砂岩	轟
184	5.0	3.2	2.0	安山岩	属	252	3.5	2.5	2.5	安山岩	納
185	6.5	3.0	2.3	安山岩	墨書なし	253	5.0	2.5	2.5	安山岩	墨書なし
186	6.0	4.5	1.5	安山岩	羅	254	6.5	3.7	1.5	砂岩	羅
187	5.5	4.0	2.6	安山岩	判読不可	255	4.5	3.0	2.0	安山岩	墨書なし
188	7.3	4.0	2.0	安山岩	叶	256	8.0	5.0	3.5	安山岩	墨書なし
189	8.7	4.9	1.8	砂岩	判読不可	257	7.3	2.8	1.5	砂岩	阿
190					191と接合	258	7.0	4.0	2.5	安山岩	摩
191	6.8	2.5	1.6	安山岩	母	259	4.5	2.5	1.5	安山岩	判読不可
192	10.5	7.0	3.0	安山岩	(表) 南無阿彌陀佛 妙法 真心	260	3.5	3.0	1.0	安山岩	墨書なし
193	3.7	2.6	1.5	安山岩	入	261	6.5	3.5	2.2	安山岩	判読不可
194	4.8	2.5	2.3	砂岩	墨書なし	262					261と接合
195	6.0	5.5	2.0	安山岩	判読不可	263	3.8	2.6	1.7	安山岩	判読不可
196	5.3	4.3	2.3	安山岩	左	264	5.0	3.0	2.0	砂岩	摩
197	3.5	3.5	2.0	安山岩	納	265	8.0	6.4	2.4	砂岩	卦
198	4.5	3.0	2.3	安山岩	摩	266	4.1	3.5	1.8	安山岩	阿
199	5.3	3.0	1.5	安山岩	拂	267	6.0	3.5	3.0	安山岩	墨書なし
200	6.5	3.8	2.3	安山岩	卦	268	8.4	2.6	3.0	安山岩	入
201	6.5	4.0	3.0	砂岩	墨書なし	269	4.6	2.1	1.5	安山岩	判読不可
202	7.0	4.0	5.0	安山岩	属	270	3.0	5.0	2.0	花崗岩	阿
203						271	8.5	4.5	2.8	安山岩	野
204	6.0	4.0	1.3	安山岩	墨書なし	272	3.6	3.6	3.0	安山岩	摩

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨書き	番号	直径	短径	厚さ	石質	墨書き
273	7.0	5.0	2.0	砂岩	塊	341	6.5	4.0	2.0	花崗岩	塊
274	5.7	3.4	1.3	砂岩	塊	342	4.0	3.0	1.2	砂岩	判読不可
275	2.5	3.5	2.0	安山岩	墨書きなし	343	4.0	2.5	2.0	砂岩	尼
276	4.1	3.1	1.5	砂岩	判読不可	344	7.0	4.5	3.0	安山岩	判読不可
277	3.0	2.5	1.2	安山岩	入	345	6.0	4.0	2.8	安山岩	摩
278	4.5	3.0	2.0	砂岩	網	346	10.0	5.0	3.0	安山岩	摩
279	5.5	4.5	1.5	砂岩	左	347	3.6	3.0	1.6	砂岩	母
280	5.3	4.2	2.0	安山岩	摩	348	4.5	2.5	2.5	砂岩	判読不可
281	3.5	2.3	0.9	安山岩	網	349	5.0	4.5	3.5	砂岩	判読不可
282	4.3	4.5	2.4	安山岩	吽	350	4.5	4.2	2.1	砂岩	摩
283	6.5	5.0	3.0	砂岩	尼	351	10.0	7.0	4.5	砂岩	墨書きなし
284	6.8	3.2	3.0	砂岩	網	352	12.0	5.0	2.5	砂岩	(表) 南無阿弥陀仏 (裏) □□□
285	6.5	4.5	3.0	安山岩	判読不可	353	5.5	3.0	2.3	砂岩	鈎
286	10.0	5.5	3.2	安山岩	網	354	5.0	4.0	2.1	安山岩	墨書きなし
287	8.5	6.1	3.5	安山岩	網	355	8.0	4.0	3.0	安山岩	鈎
288	6.0	3.5	2.0	安山岩	網	356	4.8	4.0	1.5	安山岩	判読不可
289	4.3	2.6	1.5	安山岩	摩	357	4.5	4.5	1.5	安山岩	鉢
290	4.0	3.0	1.5	砂岩	墨書きなし	358	6.0	3.5	2.4	砂岩	摩
291	4.0	3.6	2.0	安山岩	判読不可	359	6.0	3.0	2.0	安山岩	網
292	8.0	3.5	2.0	安山岩	摩	360	3.6	2.9	1.6	安山岩	判読不可
293	12.0	8.0	2.5	安山岩	(表) 南無阿弥陀仏 (裏) □□□	361	4.0	3.0	3.0	砂岩	判読不可
294	3.5	3.5	1.8	砂岩	墨書きなし	362	6.7	7.0	4.0	安山岩	摩
295	8.3	6.0	3.3	安山岩	判読不可	363	7.5	5.5	4.2	砂岩	判読不可
296	4.0	5.5	1.0	砂岩	網	364	7.0	5.8	3.6	安山岩	判読不可
297	7.5	5.0	3.0	安山岩	南無阿彌陀佛	365	8.0	5.0	4.6	砂岩	網
298	3.0	3.0	1.1	砂岩	墨書きなし	366	4.0	3.0	1.0	花崗岩	墨書きなし
299	6.5	3.5	1.7	安山岩	判読不可	367	5.0	3.2	2.5	安山岩	墨書きなし
300	4.2	3.0	1.2	砂岩	摩	368	5.0	5.0	2.0	砂岩	尾
301	7.0	5.0	3.0	砂岩	網	369	7.5	6.0	4.0	砂岩	鉢
302	6.0	3.0	3.0	安山岩	墨書きなし	370	7.2	5.0	2.8	砂岩	摩
303	10.5	5.5	3.5	安山岩	墨書きなし	371	6.0	5.5	3.0	砂岩	佛
304	4.5	2.0	1.8	安山岩	納	372	7.0	5.5	2.5	花崗岩	墨書きなし
305	4.5	3.5	2.0	砂岩	摩	373	6.0	4.5	3.1	安山岩	墨書きなし
306	3.7	3.1	1.0	安山岩	判読不可	374	6.0	4.0	2.3	砂岩	人
307	6.0	3.1	3.1	安山岩	納	375	4.2	3.0	1.6	砂岩	野
308	7.0	4.5	3.0	安山岩	尾	376	4.0	3.5	2.0	砂岩	母
309	4.0	3.0	1.8	安山岩	岳	377	7.8	6.0	3.0	安山岩	判読不可
310	4.5	4.2	3.0	安山岩	佛	378	5.5	4.0	3.0	安山岩	尾
311	8.0	6.0	2.5	安山岩	墨書きなし	379	5.0	4.0	2.0	安山岩	尾
312	9.0	5.2	3.0	砂岩	墨書きなし	380	7.0	5.5	3.0	砂岩	摩
313	4.0	3.0	3.0	花崗岩	墨書きなし	381	6.3	5.0	2.0	砂岩	網
314	9.0	5.0	3.0	安山岩	判読不可	382	7.5	6.2	3.0	砂岩	墨書きなし
315	7.3	3.7	2.0	花崗岩	墨書きなし	383	4.0	4.0	2.6	砂岩	曉
316	10.5	6.0	4.5	安山岩	摩	384	3.5	4.0	2.3	安山岩	摩
317	5.3	2.6	2.3	安山岩	墨書きなし	385	3.5	3.0	2.6	砂岩	墨書きなし
318	3.5	2.0	2.0	花崗岩	墨書きなし	386	3.0	3.6	3.5	砂岩	摩
319	3.0	3.0	3.0	安山岩	尼	387	4.6	6.3	1.1	砂岩	網
320	3.5	3.0	1.8	安山岩	鉢	388	3.5	2.7	2.0	砂岩	判読不可
321	3.5	2.3	1.3	安山岩	入	389	4.6	2.1	1.8	砂岩	羅
322	6.2	5.0	2.0	砂岩	吽	390	4.8	5.3	1.0	安山岩	摩
323	8.0	4.8	2.0	安山岩	陀	391	6.0	3.0	2.5	安山岩	摩
324	3.7	2.5	3.0	安山岩	曉	392	4.8	2.0	1.5	砂岩	判読不可
325	7.5	5.5	2.0	砂岩	判読不可	393	6.5	4.0	1.5	(表) (裏) 摩	
326	4.5	3.0	2.0	安山岩	墨書きなし	394	6.5	5.1	2.0	砂岩	網
327	6.0	3.0	1.5	安山岩	判読不可	395	4.3	3.0	1.0	砂岩	網
328	6.3	3.5	2.5	安山岩	曉	396	4.5	4.5	2.1	安山岩	曉
329	8.3	3.5	2.3	安山岩	判読不可	397	4.3	3.1	2.6	砂岩	網
330	5.3	4.0	2.5	安山岩	多	398	5.0	3.0	1.3	安山岩	墨書きなし
331	5.5	2.5	1.0	安山岩	墨書きなし	399	8.5	4.5	2.6	安山岩	人
332	5.5	4.0	2.6	砂岩	尾	400	11.0	5.0	4.0	砂岩	墨書きなし
333	3.5	3.5	1.3	砂岩	入	401	4.5	3.0	1.8	安山岩	判読不可
334	6.0	4.5	2.5	砂岩	納	402	5.8	5.0	2.5	花崗岩	評
335	3.5	3.0	2.0	安山岩	摩	403	7.0	5.0	1.8	安山岩	尾
336	4.6	2.8	1.5	砂岩	曉	404	6.3	3.7	2.7	安山岩	曉
337	5.6	3.3	1.0	砂岩	尾	405	3.8	3.0	1.8	砂岩	墨書きなし
338	4.6	2.8	1.3	砂岩	判読不可	406	7.8	4.6	3.0	安山岩	判読不可
339	4.0	3.1	1.6	砂岩	多	407	4.3	3.0	2.1	砂岩	墨書きなし
340	8.0	3.0	3.5	砂岩	南無阿彌陀佛	408	3.0	2.5	2.8	砂岩	墨書きなし

番号	直徑	短径	厚さ	石質	墨書	番号	直徑	短径	厚さ	石質	墨書
409	2.8	1.9	1.5	花崗岩	墨書なし	477	6.0	3.0	2.0	安山岩	畔
410	5.0	3.0	1.5	花崗岩	墨書なし	478	5.3	4.0	1.5	砂岩	捺
411	3.1	2.6	1.0	安山岩	阿	479	5.0	3.0	3.0	安山岩	墨
412	4.6	3.1	1.8	安山岩	納	480	5.2	3.0	1.5	砂岩	野
413	4.8	4.0	1.8	砂岩	羅	481	3.5	3.0	3.0	砂岩	羅
414	4.0	3.0	2.0	安山岩	墨書なし	482	5.2	5.0	1.5	安山岩	羅
415	5.3	4.5	1.5	砂岩	羅	483	7.3	5.5	3.0	砂岩	尾
416	3.2	4.2	1.0	砂岩	捺	484	8.5	5.0	2.0	砂岩	墨書なし
417	8.0	6.3	3.0	砂岩	判決不可	485	8.5	4.0	2.5	安山岩	鉢
418	4.6	3.7	1.5	砂岩	(表)尾 (裏)口	486	7.0	6.5	1.5	砂岩	崎
419	4.0	3.0	3.0	花崗岩	判決不可	487	7.5	3.5	2.8	砂岩	墨書なし
420	4.0	2.8	1.7	砂岩	判決不可	488	4.0	3.5	1.8	安山岩	墨書なし
421	3.2	2.5	2.5	安山岩	判決不可	489	6.0	4.0	3.0	安山岩	摩
422	7.0	5.0	3.5	花崗岩	羅	490	4.0	2.5	3.0	砂岩	頭
423	9.0	6.5	6.0	砂岩	墨書なし	491	4.5	3.6	1.1	砂岩	摩
424	8.0	6.0	2.3	安山岩	判決不可	492	4.4	3.5	1.5	安山岩	鉢
425	6.5	4.3	1.0	安山岩	墨書なし	493	10.5	6.2	4.0	砂岩	藏
426	7.5	3.0	3.1	砂岩	阿	494	6.0	5.0	3.0	砂岩	摩
427	5.5	3.5	2.0	砂岩	尾	495	7.5	4.6	2.2	砂岩	墨書なし
428	3.2	2.5	1.2	砂岩	鉢	496	6.5	6.0	3.0	安山岩	墨書なし
429	4.5	4.0	3.0	砂岩	龙	497	5.5	4.6	2.0	安山岩	頭
430	4.7	2.5	1.0	安山岩	崎	498	5.5	4.1	3.5	花崗岩	墨書なし
431	8.0	4.5	2.2	安山岩	羅	499	9.0	4.0	2.0	安山岩	墨書なし
432	10.0	10.0	6.0	花崗岩	墨書なし	500	6.0	4.5	2.0	砂岩	尼
433	3.6	2.6	2.3	砂岩	尼	501	4.5	3.8	1.0	砂岩	墨書なし
434	4.3	4.0	2.0	安山岩	母	502	6.0	5.0	4.0	砂岩	判決不可
435	3.3	3.0	2.0	安山岩	尾	503	7.0	8.0	2.5	安山岩	羅
436	6.2	4.0	2.0	安山岩	墨書なし	504	6.3	5.3	2.0	安山岩	墨
437	7.0	4.5	1.5	安山岩	鉢	505	8.0	6.5	3.0	安山岩	崎
438	4.5	3.4	2.0	安山岩	墨書なし	506	5.0	5.0	3.0	砂岩	藏
439	7.0	4.3	1.5	砂岩	野	507	8.0	7.5	4.5	砂岩	阿
440	6.0	2.8	2.0	花崗岩	墨書なし	508	4.0	3.8	2.0	安山岩	摩
441	6.0	4.0	2.5	砂岩	頭	509	7.2	4.0	2.0	砂岩	羅
442	8.3	3.5	1.2	安山岩	龙	510	6.0	6.0	3.0	砂岩	崎
443	6.5	5.0	3.8	安山岩	判決不可	511	6.0	4.5	2.0	安山岩	龙
444	4.0	2.2	1.0	花崗岩	判決不可	512	8.0	4.0	2.0	砂岩	伽
445	3.2	4.0	1.4	安山岩	摩	513	3.0	3.5	2.0	砂岩	摩
446	8.0	4.5	4.0	安山岩	判決不可	514	6.5	4.0	4.0	安山岩	阿
447	5.5	4.0	2.5	安山岩	崎	515	6.0	4.3	1.6	安山岩	判決不可
448	8.0	4.0	2.5	砂岩	頭	516	7.0	5.5	2.5	安山岩	判決不可
449	5.3	3.8	2.3	安山岩	阿	517	6.0	3.5	1.2	砂岩	判決不可
450	6.5	4.0	2.0	安山岩	羅	518	7.3	5.0	2.0	安山岩	墨書なし
451	7.2	6.3	3.0	安山岩	佛	519	5.5	3.2	2.0	安山岩	野
452	6.0	5.0	2.8	砂岩	佛	520	6.0	3.0	2.0	安山岩	藏
453	4.5	3.5	2.5	砂岩	判決不可	521	7.5	4.0	2.3	安山岩	尼
454	6.0	3.2	2.0	安山岩	鉢	522	4.0	3.5	2.0	安山岩	墨
455	10.0	7.0	2.5	砂岩	墨書なし	523	6.3	4.6	1.5	安山岩	墨
456	4.5	4.0	3.5	砂岩	尼	524	5.6	3.8	2.0	安山岩	龙
457					447と接合	525	6.6	4.3	1.3	砂岩	畔
458	8.0	6.5	1.6	砂岩	(表)(裏)鉢	526	7.0	4.8	2.5	安山岩	判決不可
459	6.3	3.1	2.2	砂岩	羅	527	6.8	5.0	2.5	安山岩	墨
460	6.5	4.5	2.0	砂岩	摩	528	6.0	2.1	1.3	安山岩	墨書なし
461	5.0	4.0	3.8	砂岩	多	529	4.6	4.0	2.0	砂岩	厚
462	6.0	3.2	2.5	砂岩	入	530	4.6	2.5	3.0	花崗岩	墨書なし
463	5.0	2.0	2.0	安山岩	拂	531	4.5	2.5	2.0	安山岩	墨書なし
464	4.8	3.8	1.0	安山岩	拂	532	8.2	3.2	2.8	安山岩	所無阿弥陀佛
465	5.0	3.0	2.2	花崗岩	拂	533	4.2	3.0	0.6	安山岩	阿
466	3.5	2.5	0.5	砂岩	納	534	5.9	3.5	1.2	砂岩	鉢
467	3.5	3.0	1.0	砂岩	拂	535					534と接合
468	5.0	5.0	3.5	安山岩	判決不可	536	3.0	2.0	1.5	砂岩	尼
469	9.0	4.5	3.0	砂岩	判決不可	537	3.4	4.2	1.6	砂岩	多
470	4.0	2.5	2.0	花崗岩	墨書なし	538	8.0	6.0	3.5	泥灰岩	墨書なし
471	4.0	4.0	2.5	砂岩	摩	539	7.0	4.5	4.5	泥灰岩	墨書なし
472	6.0	3.6	1.0	砂岩	墨書なし	540	8.7	5.6	1.1	泥灰岩	墨書なし
473	8.0	4.3	2.5	安山岩	羅	541	6.0	4.0	1.0	泥灰岩	墨書なし
474	7.0	4.5	2.0	安山岩	龙	542	3.5	5.0	2.0	砂岩	拂
475	5.5	5.0	3.0	安山岩	尾	543	8.5	5.0	3.0	安山岩	羅
476	5.0	4.0	1.5	安山岩	墨書なし	544	7.0	6.3	2.5	安山岩	墨書なし

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨書き	番号	直径	短径	厚さ	石質	墨書き
545	5.5	3.5	3.0	花崗岩	墨書きなし	513	7.8	7.0	3.0	安山岩	厘
546	3.3	3.7	3.3	砂岩	無	514	6.0	3.2	2.5	安山岩	廣
547	8.0	5.0	1.8	泥灰岩	墨書きなし	515	5.0	5.0	2.5	花崗岩	判読不可
548	8.5	8.0	5.0	泥灰岩	墨書きなし	516	4.0	4.0	3.2	安山岩	尾
549	5.0	4.0	3.5	砂岩	鉢	517	6.0	4.0	3.1	安山岩	阿
550	5.5	3.0	1.2	泥灰岩	墨書きなし	518	6.0	5.0	1.5	砂岩	厘
551	7.0	2.5	2.0	安山岩	母	519	8.1	3.5	2.3	安山岩	墨書きなし
552	5.0	4.5	2.0	安山岩	判読不可	520	7.0	6.0	2.0	砂岩	羅
553	4.0	2.5	2.0	花崗岩	墨書きなし	521	5.0	4.1	1.2	安山岩	人
554	3.5	4.0	2.1	安山岩	穂	522	4.5	2.8	2.8	花崗岩	鉢
555	4.0	3.0	1.5	安山岩	脚	523	5.2	3.5	2.0	砂岩	判読不可
556	9.0	5.0	2.0	花崗岩	墨書きなし	524	4.0	3.0	2.3	安山岩	墨書きなし
557	4.8	3.8	1.4	砂岩	人	525	3.5	2.8	2.5	安山岩	阿
558	3.5	5.8	2.0	安山岩	摩	526	7.0	3.0	2.4	安山岩	墨書きなし
559	4.0	4.0	1.3	安山岩	納	527	5.0	4.0	2.2	砂岩	母
560	4.7	3.5	3.5	花崗岩	判読不可	528	4.1	3.1	1.0	砂岩	摩
561	12.0	3.0	3.0	安山岩	(表)南無阿弥陀佛(裏)口□	529	8.5	4.5	2.5	砂岩	唵
562	18.0	6.0	3.0	泥灰岩	墨書きなし	530	7.0	4.5	3.5	砂岩	判読不可
563	4.0	2.5	1.6	砂岩	摩	531	4.0	3.5	1.4	砂岩	吽
564	5.0	2.3	2.3	砂岩	界	532	3.5	3.0	2.0	砂岩	判読不可
565	4.5	2.6	1.8	砂岩	墨書きなし	533	4.5	3.0	2.0	砂岩	判読不可
566	4.5	3.0	2.5	安山岩	判読不可	534	9.0	3.5	2.0	砂岩	摩
567	5.0	4.0	3.0	花崗岩	墨書きなし	535	7.0	4.3	2.3	安山岩	鉢
568	7.5	3.0	2.0	安山岩	穂	536	3.0	2.0	1.2	砂岩	尼
569	7.0	4.0	2.0	安山岩	母	537	3.0	2.1	2.0	砂岩	阿
570	5.0	3.5	2.0	安山岩	判読不可	538	6.0	2.5	1.5	砂岩	摩
571	4.5	3.4	2.1	砂岩	墨書きなし	539	3.9	4.0	2.0	安山岩	厘
572	4.5	8.0	2.0	花崗岩	摩	540	3.5	2.0	1.8	泥灰岩	墨書きなし
573	5.5	4.5	3.0	砂岩	墨書きなし	541	3.0	2.0	1.5	砂岩	墨書きなし
574	8.0	4.6	3.0	武昌岩	墨書きなし	542	4.6	3.0	2.0	安山岩	納
575	7.5	3.0	2.6	砂岩	尾	543	8.0	4.5	2.3	安山岩	捺
576	8.0	2.5	3.5	砂岩	摩	544	8.3	4.5	1.2	安山岩	多
577	4.2	3.0	1.2	安山岩	墨書きなし	545	9.0	4.0	2.0	砂岩	(表)南無阿弥陀佛(裏)口□□□
578	6.0	4.0	4.0	砂岩	尤	546	9.0	4.2	2.6	泥灰岩	判読不可
579	6.2	5.0	2.0	砂岩	鉢	547	11.3	6.0	3.5	安山岩	(表)南無阿弥陀佛(裏)口□口由心
580	15.0	3.5	2.0	泥灰岩	墨書きなし	548	3.7	3.0	2.0	安山岩	判読不可
581	5.6	3.5	1.7	砂岩	鉢	549	3.5	2.5	2.0	砂岩	尤
582	4.5	3.0	0.8	砂岩	納	550	5.0	4.0	2.0	砂岩	墨書きなし
583	4.0	4.0	1.0	砂岩	捺	551	5.5	4.0	4.0	安山岩	裏
584	5.0	2.5	1.3	砂岩	墨書きなし	552	7.0	7.0	3.0	安山岩	唵
585	4.0	3.8	2.5	砂岩	摩	553	3.3	3.0	1.4	砂岩	吽
586	5.7	3.8	2.8	砂岩	多	554	5.6	3.6	2.0	安山岩	鉢
587	11.0	5.0	2.0	砂岩	(表)南無阿弥陀佛(裏)妙口妙口	555	5.6	4.7	1.8	安山岩	判読不可
588	7.5	4.0	2.5	安山岩	穂	556	3.0	3.0	1.5	安山岩	判読不可
589	4.5	2.8	1.1	砂岩	穂	557	3.5	2.0	1.6	安山岩	南
590	6.0	4.0	2.0	砂岩	墨書きなし	558	4.5	3.0	2.5	砂岩	鉢
591	5.1	2.2	1.5	砂岩	判読不可	559	5.7	3.1	1.8	砂岩	摩
592	4.1	2.0	1.7	砂岩	墨書きなし	560	4.3	4.0	1.8	砂岩	鉢
593	6.0	4.0	1.5	安山岩	鉢	561	4.8	3.0	1.3	安山岩	多
594	6.0	4.0	2.5	安山岩	摩	562	8.3	3.2	2.5	安山岩	伽
595	8.2	4.0	2.4	砂岩	判読不可	563	6.0	3.1	2.5	安山岩	阿
596	4.3	3.5	2.0	砂岩	人	564	5.0	4.5	2.0	安山岩	墨書きなし
597	5.5	3.6	2.0	砂岩	穂	565	5.5	4.0	3.0	砂岩	判読不可
598	9.0	6.0	3.0	砂岩	判読不可	566	7.7	5.6	2.0	安山岩	鉢
599	6.0	4.2	2.5	安山岩	墨書きなし	567	6.0	4.0	1.5	安山岩	輔
600	5.5	3.0	3.0	砂岩	無	568	9.5	5.1	2.5	安山岩	厘
601	5.3	5.0	3.0	砂岩	母	569	6.0	4.2	3.2	砂岩	鉢
602	7.5	8.6	2.3	砂岩	穂	570	4.1	3.5	2.1	安山岩	墨書きなし
603	6.5	4.0	2.5	砂岩	吽	571	4.3	3.1	1.0	砂岩	尾
604	4.6	2.6	1.6	砂岩	穂	572	8.0	3.5	2.6	安山岩	墨書きなし
605	5.0	3.0	2.0	安山岩	墨書きなし	573	3.1	3.0	2.0	砂岩	墨書きなし
606	5.3	3.0	2.0	安山岩	尾	574	8.0	4.0	1.8	安山岩	母
607	5.3	2.5	2.0	安山岩	人	575	4.0	3.5	3.5	安山岩	穂
608	4.0	3.5	2.0	安山岩	墨書きなし	576	5.5	3.6	1.8	安山岩	穂
609	8.0	6.0	2.5	安山岩	判読不可	577	4.0	4.0	2.5	安山岩	墨書きなし
610	6.5	6.1	2.3	砂岩	阿	578	6.8	4.5	2.5	安山岩	納
611	4.0	3.0	2.2	砂岩	鉢	579	8.0	7.0	2.0	安山岩	墨書きなし
612	9.0	5.6	2.0	安山岩	判読不可	580	4.5	3.0	2.3	砂岩	鉢

番号	产地	地層	厚さ	石質	形態	番号	直徑	短程	屢さ	石質	形態
681	6.5	2.3	2.5	砂岩	伽	749	9.0	6.0	3.0	砂岩	判読不可
682	6.0	3.2	2.0	安山岩	吽	750	7.0	5.5	3.0	花崗岩	尼
683	5.6	4.2	2.0	砂岩	入	751	9.3	5.5	2.0	安山岩	吽
684	5.0	5.5	2.0	安山岩	人	752	7.0	6.0	4.0	安山岩	鉢
685	4.6	3.2	1.2	安山岩	肉	753	8.0	5.0	4.5	安山岩	曉
686	6.5	2.6	2.0	安山岩	母	754	7.7	7.3	2.4	安山岩	羅
687	7.0	5.5	2.0	砂岩	母	755	4.6	3.3	2.8	安山岩	阿
688	6.5	5.6	2.5	安山岩	鉢	756	2.0	3.0	1.5	砂岩	母
689	3.5	2.5	1.5	安山岩	鉢	757	5.5	4.3	2.5	花崗岩	摩
690	5.0	4.6	3.3	安山岩	鉢	758	5.0	3.0	1.5	花崗岩	尼
691	5.5	3.5	3.5	安山岩	鉢	759	8.3	6.0	3.0	安山岩	裏
692	7.0	6.5	1.5	砂岩	鉢	760	6.3	6.0	3.7	砂岩	尾
693	9.6	5.0	3.0	安山岩	鉢	761	8.5	4.2	2.0	安山岩	判読不可
694	9.7	3.5	2.6	砂岩	納	762	6.3	4.1	2.5	花崗岩	羅
695	5.4	3.8	1.5	安山岩	裏	763	7.0	5.2	2.7	安山岩	摩
696	4.3	3.5	2.0	砂岩	裏	764	8.0	5.0	2.5	安山岩	判読不可
697	7.0	4.3	4.0	安山岩	裏	765	7.8	4.0	1.8	安山岩	曉
698	6.5	4.0	2.0	砂岩	野	766	6.5	4.5	4.7	安山岩	母
699	3.8	3.1	1.5	安山岩	吽	767	5.5	4.1	2.3	花崗岩	判読不可
700	3.0	3.7	1.5	砂岩	尼	768	6.5	4.9	2.0	安山岩	謙
701	4.5	2.5	2.0	砂岩	捺	769	3.5	3.0	1.0	泥灰岩	摩
702	5.0	4.0	1.5	砂岩	尾	770	4.5	3.5	1.8	花崗岩	判読不可
703	4.2	3.0	3.2	砂岩	尾	771	5.0	3.2	2.0	安山岩	吽
704	4.5	2.5	2.4	砂岩	多	772	2.6	3.0	1.8	砂岩	尼
705	3.2	4.0	1.4	砂岩	阿	773	4.0	2.2	1.8	安山岩	尼
706	3.0	3.6	2.8	砂岩	阿	774	5.6	3.0	2.3	安山岩	羅
707	2.0	4.0	2.0	砂岩	阿	775	4.1	3.6	2.0	砂岩	母
708	5.0	2.3	1.5	砂岩	阿	776	5.0	3.2	4.0	安山岩	納
709	6.0	6.0	2.0	砂岩	阿	777	4.5	2.0	2.0	安山岩	人
710	9.0	4.5	3.3	安山岩	阿	778	6.6	3.8	2.2	花崗岩	阿
711	5.9	2.0	1.0	安山岩	吽	779	3.3	4.0	1.5	安山岩	鉢
712	8.0	3.5	1.0	安山岩	吽	780	5.6	3.5	0.9	砂岩	羅
713	6.0	5.0	1.3	砂岩	摩	781	3.0	2.5	1.0	安山岩	判読不可
714	5.2	4.0	1.6	安山岩	摩	782	5.0	4.0	1.4	安山岩	母
715	5.0	4.5	2.5	安山岩	左	783	4.5	3.3	3.6	砂岩	捺
716	5.5	5.0	3.0	安山岩	模	784	4.5	3.5	3.5	安山岩	人
717	7.5	4.0	2.0	安山岩	模	785	5.0	2.3	1.5	安山岩	(表)(表)判読不可
718	5.6	3.1	2.2	砂岩	曉	786	4.5	3.0	2.0	安山岩	裏
719	6.0	5.0	2.8	安山岩	曉	787	5.5	3.0	2.5	安山岩	鉢
720	10.5	7.0	3.0	砂岩	曉	788	4.4	3.6	1.2	安山岩	判読不可
721	8.0	5.5	2.5	安山岩	拂	789	6.0	3.0	1.8	安山岩	判読不可
722	11.0	9.0	3.0	在湖邊	曉	790	6.7	4.5	3.5	花崗岩	判読不可
723	4.5	5.8	2.0	安山岩	曉	791	9.2	8.0	4.5	安山岩	判読不可
724	6.2	4.0	1.3	砂岩	羅	792	6.0	4.5	2.0	花崗岩	判読不可
725	6.0	4.4	2.8	安山岩	羅	793	4.3	3.5	2.0	砂岩	判読不可
726	7.2	6.5	3.0	安山岩	左	794	4.5	3.5	1.7	安山岩	鉢
727	8.0	7.0	2.5	安山岩	拂	795	3.5	3.0	3.2	安山岩	判読不可
728	8.6	6.0	5.0	砂岩	拂	796	4.7	3.5	1.0	安山岩	判読不可
729	7.0	8.0	3.5	安山岩	曉	797	7.1	4.1	3.0	安山岩	判読不可
730	9.0	7.0	3.0	安山岩	屋	798	4.0	3.5	1.7	安山岩	判読不可
731	9.5	8.4	1.5	砂岩	(表)南無阿彌陀佛(表)妙解妙盡	799	6.5	4.2	2.0	安山岩	判読不可
732	8.0	7.0	3.0	安山岩	曉	800	5.0	3.0	1.3	安山岩	尾
733	4.6	4.5	1.5	砂岩	判讀不可	801	8.5	6.5	3.0	安山岩	摩
734	5.0	3.6	4.0	死灰岩	摩	802	3.7	4.8	1.8	安山岩	拂
735	5.5	3.5	2.5	安山岩	鉢	803	3.8	2.8	2.2	安山岩	人
736	8.5	4.5	1.5	砂岩	入	804	6.8	3.0	2.5	安山岩	野
737	7.0	8.0	3.5	安山岩	鉢	805	3.5	3.1	1.8	安山岩	謙
738	7.0	7.0	3.0	安山岩	羅	806	4.5	2.9	1.6	砂岩	母
739	8.0	6.0	3.8	安山岩	拂	807	5.7	3.2	2.0	安山岩	多
740	9.0	4.8	2.8	安山岩	判讀不可	808	4.5	7.3	1.8	安山岩	阿
741	9.1	7.2	3.0	安山岩	南無	809	6.1	4.6	2.7	花崗岩	拂
742	6.8	3.7	3.6	花崗岩	吽	810	4.0	4.2	1.9	安山岩	納
743	4.3	3.5	2.8	安山岩	入	811	5.2	3.3	2.2	安山岩	摩
744	4.5	2.5	1.7	安山岩	羅	812	8.5	4.2	5.0	安山岩	拂
745	3.9	2.3	2.2	安山岩	判讀不可	813	6.5	5.6	2.6	砂岩	判讀不可
746	7.0	3.5	2.0	點板岩	判讀不可	814	5.2	5.4	2.5	花崗岩	判讀不可
747	7.8	7.0	5.0	砂岩	拂	815	5.5	3.0	2.5	安山岩	鉢
748	7.0	5.5	6.5	安山岩	羅	816	8.8	4.5	5.4	安山岩	判讀不可

墓標（図版6・7）

南側削平地において18基の墓標が礫石経の前面に存在していた。東側の墓標から1号墓標・2号墓標・・・17号墓標・18号墓標とした。ただし、18号墓標はすでに崩落しており原形を保っていない。1号～9号墓標は東西方向にほぼ直線的に並んでいた。10・11号墓標は南北方向に、11・12号墓標は東西方向に並んでおり、13～15号墓標は南北方向に、16・17号墓標は東西方向に並んでいた。墓標の形態は仏像類・五輪塔類・無縫塔類・近世墓標の4種類であり、判読できる範囲の年代は享保元年（1716）～明治15年（1882）で、大部分は17世紀初頭から18世紀初頭のものである。

第4表 作山城跡墓標一覧表

番号	形態	年号	墓碑名	
1号墓標	無縫塔類	解説不可	敬真□□□（表）	図版6-8
2号墓標	無縫塔類	明和九〇 六月二一日（裏）	口義本空寶阿闍梨（表）	図版7-1
3号墓標	無縫塔類	享保一年内申 十一月二九日（裏）	口本□□長阿闍梨（表）	図版7-1
4号墓標	仏像類	解説不可	解説不可	図版7-1
5号墓標	仏像類	享保□□□□ 八月□□□（表）	口登□□□（表）	図版7-2
6号墓標	仏像類	解説不可	解説不可	図版7-3
7号墓標	無縫塔類	解説不可	口法心靈覺口作 覺心真士 □□真尼（表）	図版7-3
8号墓標	五輪塔類	解説不可		図版7-3
9号墓標	五輪塔類	解説不可		図版7-4
10号墓標	近代墓標	明治十五年午卯十月□日 明治八年亥一月十二日 (右側)	山田林七墓 俗名又イ七十三才 享年六十三才（右側） 門人中建（左側）	図版7-5
11号墓標	五輪塔類	解説不可	解説不可	図版7-5
12号墓標	仏像類	文化十四丁丑年 四月二十二日寂（左側）	密懶惠淨阿闍梨（表）	図版7-5
13号墓標	五輪塔類	解説不可	真空大阿闍梨之塔（表）	図版7-6
14号墓標	仏像類	安永六丁酉年（右側）	法圓真淨阿闍梨（表）	図版7-6
15号墓標	仏像類	文化四年丁卯（左側） 七月九日卒（右側）	智圓淨月阿闍梨（表）	図版7-6
16号墓標	無縫塔類	解説不可	富庵□ハ止□□和吉永□□	図版7-7
17号墓標	仏像類	文政四辛巳 九月三十日	檀良榮阿闍梨（表）	図版7-8
18号墓標	五輪塔類	解説不可	解説不可	崩壊

### (3) まとめ

本試掘調査では、溝2条、上坑13基、柱穴10基、蔵骨器、礫石絆を検出し、墓標18基を確認した。蔵骨器と礫石絆と墓標は南側削平地のほぼ同じ位置に集中しており、この場所は近世～近代には墓域であった。遺物を出土した遺構は少なく、時期特定は難しいが、近代の遺構であるSK04～13、SP04を除くその他の遺構は近世のものである。結論として、本試掘調査において作山城に直接関係する遺構・遺物は確認できなかった。その原因として、中世の遺構面は後世に削平されてしまったと考えられる。しかし、後世の削平を受けていないとすると、築城時には海上異変等を佐料城に伝達するための烽火場があったと伝えられる作山城には、規模の大きな建物は建てられていなかった可能性が考えられる。

第5表 作山城跡遺構一覧 ( )は検出した法量

遺構	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物	時期
SD01	約51～93		10	△		近世
SD02	約50		10	△		近世
SK01	(70)	(26)	16	楕円形	なし	近世
SK02	45	36	13	不規則円形	なし	近世
SK03	31	(29)	9	円形	なし	近世
SK04	88	(75)	45	円形	陶磁器、土師質土器、ビン、コンクリート	近代
SK05	121	92	60	円形	陶磁器、土師質土器、ビン、コンクリート	近代
SK06	95	(75)	12	円形	なし	近代
SK07	92	(26)	18	円形	なし	近代
SK08	157	(72)	58	不規則円形	陶磁器、ビン、コンクリート、タイル	近代
SK09	(169)	(135)	10	不規則円形	なし	近代
SK10	85		7	円形	陶磁器、ビン、ガラス	近代
SK11	76		6	円形	陶磁器、瓦、剣、ビニール袋	近代
SK12	70		11	方盤	陶磁器、十角形土器、破壊陶器、瓦、タイル、スレート	近代
SK13	117		40	円形	十角形土器、破壊陶器、瓦質土器、瓦	近代
SK14	95		8	円形	なし	近代
SP01	41	37	10	不規則円形	なし	近世
SP02	39		10	円形	なし	近世
SP03	45		15	不規則円形	陶磁器	近世
SP04	33		12	△方形	土器	近代
SP05	53	44	14	椭円形	なし	近世
SP06	35		8	円形	瓦六	近代
SP07	35		12	不規則円形	土師質土器	近世
SP08	57	31	9	不規則円形	なし	近世
SP09	37		5	円形	陶瓶系陶器	近世
SP10	32		5	円形	なし	近代
SP11	21		5	円形	なし	近代
SP12	35	27	5	楕円形	なし	近世
SP13	47		9	円形	なし	近代

第6表 作山城跡出土遺物観察表 ( )は残存高

遺物 番号	種類	II段 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	調査	色調	地土
19	電器 部品		6.1	(1.7)	施釉	黒地にぶい真壁10YR7/3 紅:透明	精選
50	土師質土器 蓋		10.8	(1.6)	堆積	内外面にぶい黄壁10YR6/3 1～5mmの石片を含む	
51	磁器 小鉢	10.6	8.6	(4.7)	施釉	黒地:白 釉:明瞭	精選
52	土師質土器 盆			(5.6)	外:陶器底面コナデ、底部ヘラケズ 内:外壁ナダ	内外面にぶい黄壁5YR6/4 1～3mmの石片、金星 金星ナダ	
53	飲食関連 上皿				施釉	黒地:2.5YR8/6 釉:灰赤焼2.5YR3/6	精選
54	陶器 瓶		4.0	(2.0)	施釉	赤地:白 釉:透明	埋藏
55	陶器 杯	31.6		(6.1)	施釉	黒地:灰白3Y7/2 釉:灰褐色7.5YR4/3	精選
56	把柄式磁器 瓶		10.4	(2.1)	施釉、瓦込みに白色の泥舟	赤地:陶灰7.5YR8/1 釉:オシーブ7.5YR6/2	精選
57	把柄式磁器 瓶	15.6	(2.3)	施釉、見込みに紙青色の染付け	黒地:11YR7/3 釉:透赤	精選	
58	土師質土器 杯		4.8	(1.2)	底端:凹凸あり模様	内外面にぶい黒5YR6/4	微妙を含む
59	飲食関連 土器			(2.8)	外:ナダ:ヘラケズ 内:施釉	黒地:褐5YR6/6 釉:明瞭2.5YR5/6	精選
60	飲食関連 上皿		7.4	(2.4)	内外面:ナダ	内外面:褐2.5YR6/8	精選
61	鉢				底面	内外面:白	
62	上部質土器 蓋	14.0	10.8	2.8	外:コナデ、ナダ 内:ナダ	内外面にぶい黄壁10YR7/3	精妙、粗妙を含む
63	上部質土器 瓶	13.8	13.0	15.0	外:陶器底面コナデ、ナダ 内:ナダ	内外面にぶい黄壁10YR7/3	精妙、粗妙を含む

### 第3節 考察

今回報告した藤尾城跡と作山城跡の発掘調査では城内の遺構と城跡の年代的な位置づけに直接関わる遺物はほとんど検出しておらず、新たな見地を示すことはできなかった。そこで、中世における旧地形を復元して、藤尾城跡と作山城跡を中心とした香西地区周辺の中世の城について若干論考する。

藤尾城は、香川・阿野2郡を治めた国人領主の香西氏が佐料城に替わる新しい本拠地として天正3～5年（1575～1577）に築造された城であり、南西から延びる丘陵の先端部を掘り切ってできた標高約20mの藤尾山に存在する。現在は築城以前にあった宇佐神社が再び祀られている。城の縄張りは、藤尾山に本丸を構え、南東側に大神郭、北東側に堀の内郭、北西側に北の丸郭、南側に五反地郭を配し、周囲に水堀を巡らしていた。城内は頂上の平地に本丸、斜面には数段の細長い削平地が巡り、その西側下方には二ノ丸とみなしうる広い平坦地がある。この城で特筆すべきことは藤尾山を中心とした変形五角形の總構えが見られることである。

作山城跡は藤尾城跡から南東方向へ約250m離れた位置にあり、南西から延びる丘陵の先端部を掘り切ってできた標高16mの作山に存在した。築城時には海上異変等を佐料城に伝達するための烽火場があったとも伝えられる。城の縄張りは、頂上に主郭と考えられる最高所の曲輪が残り、斜面部には2段下がりの細長い削平地が取り附むように巡らしていた<sup>1)</sup>。

藤尾城跡と作山城跡の周辺には、同様に香西氏と関係する木津城跡・芝山城跡・植松城跡・中山城跡・亀水城跡・黄峰城跡・勝賀城跡・佐料城跡・佐藤城跡・筑城城跡・飯田城跡・鬼無城跡が存在する。立地を見ると四つのタイプに分けられる。タイプ1は急峻な山頂に築かれた城であり、勝賀城跡・鬼無城跡・亀水城跡・黄峰城跡である。タイプ2はやや内陸の平地部に築かれた城であり、佐料城跡・佐藤城跡・筑城城跡・飯田城跡である。タイプ3は海岸線付近の平地部に築かれた城であり、植松城跡・中山城跡・木津城跡である。そして最後のタイプ4は海岸線付近の小高い小山に築かれた城であり、藤尾城跡・作山城跡・芝山城跡である。

香西氏の本拠地である勝賀城は、標高364mを測る急峻な勝賀山の山頂に築かれた城であり、主郭は完全に土塁に囲まれ、折れ・櫓台・橋形虎口・曲輪の方形化など戦国末期の城郭の様相を色濃く残している。鬼無城は、標高262mを測る袋山の山頂に築かれた城であり、勝賀城からの展望が不十分な南西方面への物見の城<sup>2)</sup>と考えられている。亀水城と黄峰城は、五色台山系の紅峰と黄峰山の山頂に築かれた城であり、海上を監視する役割と勝賀城の北側を固める役割を担っていた。

佐料城跡は、平地に築かれた城であり、天正5年（1577）に十八代佳清が藤尾城を築いて移り住むまでの約360年にわたって香西氏の居館であった。周辺の地形や地名などに城の痕跡が多く見られる。植松城と中山城は、勝賀城の北側の細長い平地に築かれた城であり、方形の区画が残る。筑城城・飯田城・佐藤城は平地に築かれた城であるが、その詳細は不明である。

藤尾城について『香西記』では「前略・・佐料城北十余町有海浜景地之小山、此山也、東南及北入海、西続干是竹山謂之於磯崎山、後改号藤尾山、・・後略」と記し、『三代物語』では「前略・・瀬海・・後略」と記している。両書の記載内容は藤尾城の近くまで海が入り込んでおり、東南北側の三方は後背湿地（ラグーン）に囲まれていたことを表しており、復元した旧地形と整合する。一方、作山城は、「是竹山に続ける小さき尾流なり。是を切り別けて小峰を築きたれば、作山と言う」<sup>3)</sup> 小山に築かれた城である。旧地形の復元図を参考にすると藤尾城と同様に後背湿地（ラグーン）に三方を囲まれていたことが推定できる。木津城は藤尾城の東側に堆積する砂帯に築かれた城であるが、現在では所在地を確認することはできない。木津川に臨み東に堀、西は海に面していたという。芝山城は藤尾城の北側にある「内海に突出せる小岳・芝山」<sup>4)</sup>に築かれ

た城である。標高は44mであり、城の東北西の三方は海岸であり、南端において陸地部と接する陸繫島のような地形である。

藤尾城を中心とした香西浦における城の構成は、南側には内陸部にあった旧本拠地の佐料城と香西を結ぶルート上にあたり香西の南口を固める最後の閑門である作山城があり、北側には海上交通の監視ができる芝山城があり、東側には中世の港町として発展している「野原」に通じるルート上に位置する木津城がある。前述したように藤尾城は天正5年(1577)に内陸部にある佐料城から香西氏の新しい本拠地として香西浦に築かれた。その大きな要因として土佐・長宗我部氏による讃岐侵攻が挙げられる。香西氏は代々綾南条・綾北条・香西・香西の4郡を治め、浦と島については香西・屋島・直島・塩飽を従属させていた。その城館は『南海治乱記』に「居城ハ笠居郷佐料也、要城ハ勝賀ノ山也」と記されるように、内陸部にある佐料城と難攻不落の勝賀城の二城体制であった。しかし、長宗我部氏による讃岐侵攻の危機感から、讃岐国内のほかの国人領主や織田信長ではなく、「向地」すなわち中国地方の勢力に頼ることに決したため、海岸の近くで海上交通の便がよい藤尾城に居城を移した。そして、「香西の町は向き向き」と言われるようにすべての道は迷路であり、袋小路・鍵形に折れる道があり、要塞化された城下集落と周辺の諸城を取り込んだ防御形成の強化が考えられる<sup>4</sup>。長宗我部氏の讃岐侵攻と言う緊張状態を背景に領主としての権力集中が図られ、香西浦の藤尾城下町化の動きが存在したと指摘できる<sup>5</sup>。

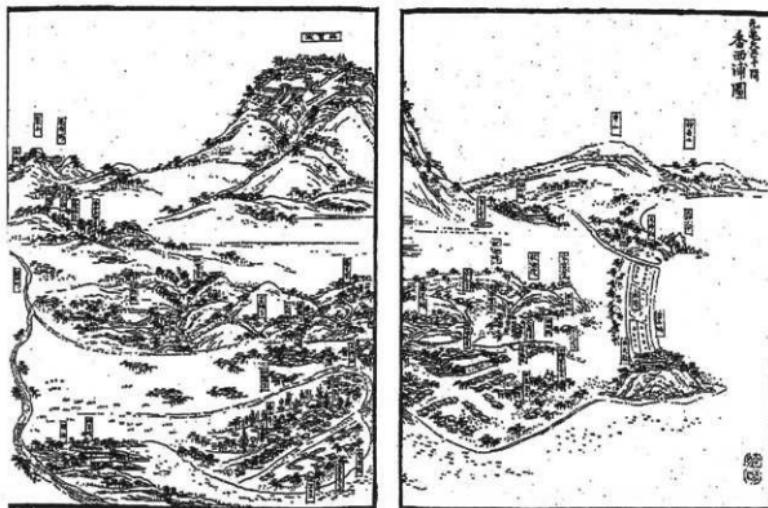
中世港町に関する北山氏の分類<sup>6</sup>)では、香西浦はII-1型（小規模な河川の河口部に位置し、砂堆上に集落が展開し、内湾部に港湾機能をもつ）であり、野原はII-3型（小規模な河川の河口部に位置し、大きく内湾した入り江に砂堆が付随し、河口部に港湾機能をもち、砂堆の外側も船舶の停泊機能をもち、複合的な港湾施設の存在をうかがわせる）に分類できる。

『兵庫北関入船納帳』によれば、中世の讃岐の港町として17ヶ所が記されており、高松湾には東から湯元・野原・香西の3港の名前がある。最近の発掘調査の成果と地形復元を基に古代から近世にわたる3港の推移を考えてみる。中世以前は東の新川・春日川河口付近と西の旧香東川河口付近が物資輸送の拠点となっており、特に屋島の重要性は大きく、新田本村遺跡<sup>7</sup>)と小山・南谷遺跡<sup>8</sup>は官衙的な性格を持ち、海岸線が内陸部まで入り込んでおり、両遺跡の近くに港湾施設があったと考えられる。しかし、古代末期からの河川の氾濫や土砂堆積に伴い海岸線は次第に後退し、港湾の機能を失っていった。中世になると、屋島の南側にある湯元（片本）港、現在の高松駅にあたる野原港、そして西側の香西港が発展する。『兵庫北関入船納帳』（文安2年 1445）に、香西の船籍船はのべ六回、船頭は七郎佐衛門以下四人、問丸は道親、野原の船籍船はのべ十三回、船頭は藤三郎以下七人、問丸は係太郎以下二人、湯元の船籍船は十一回、船頭は兵庫以下二人、問丸は衛門九郎以下二人と記されている。この数値のみで判断できないが、香西は他の2港に比べるとやや小規模であると想定できる。一方、湯元は前代の本拠地としての機能を継承していると考えられる。野原は、『南海通記』には西側と東側に海が湾入り、その間の砂州が海に突き出し、郷内には西濱と東濱の二つの漁村があると記載され、從来はひびた漁村としてのイメージが強かった。しかし、近年の高松城周辺の発掘調査では塗・寺院・墓地・集落と考えられる遺構群が検出されており、野原が交通・流通の拠点として大きな経済力をもった中世都市であったと考えられるようになってきた。中世から近世に時代が経るに伴って湯元・野原・香西の3港から野原への一極化が顕著に表れてくる。天正16年(1588)に生駒親正により野原に高松城が築かれ、それ以後に生駒氏4代、松平氏11代の城下町として野原は発展していく。湯元は、「古・高松湾」の埋没といった自然環境の変化と屋島の存在意義が失われたことにより、次第にその勢力は衰えていった。一方、豊臣秀吉の四国征討により天正13年(1585)に香西氏は滅亡したため、香西浦は藤尾城の城下町としての基盤を失ってしまう。

古代から現在にいたるまでの港町の推移は、次のように考えられる。古代では東の新川・春日川河口付近と西の旧香東川河口付近に物資の集積地があり、中世には湯元・野原・香西の3港となり、近世になると高松城を中心とする城下町として野原のみが発展し、明治以降は四国の玄関口となり現在に至るのである。

註

- 1) 香川県教育委員会2003『香川県中世城館詳細分布調査報告』  
高松市教育委員会1979『勝賀城跡』  
高松市教育委員会1980『勝賀城跡II』  
池田誠1988「瀬戸内の港洋都市と中世城郭（その一）」『中世城郭研究』第2号
- 2) 秋山忠1982『古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会
- 3) 香川県香西町役場発行1930『香西史』
- 4) 新居直矩1792『香西記』
- 5) 佐藤竜馬2007「初期高松城下町の在地的要素」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』 四国村落遺跡研究会
- 6) 北山健一郎2007「中世港町の地形と空間構成」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』 四国村落遺跡研究会
- 7) 高松市教育委員会2006『新田本村遺跡』
- 8) 香川県教育委員会1997・2006『小山・南谷遺跡I』『小山・南谷遺跡II』



第40図 「元龜天正年間香西浦図」（『讃岐國名勝図會』）

## 第4節 柿木荒神

### 1 立地環境（第2・41図）

柿木荒神が所在する飯田町は、高松平野の北西部にあたる。東は淨願寺山、西は堂山に挟まれ、その間には本津川が北流する。当該地はこの両山に挟まれた平野の中央、本津川の東側に位置する。周辺遺跡は当該地を中心にして、北には半田・小坂塚群が近接し、さらに北には玉墓古墳、相作牛塚古墳が確認されている。北東には青木塚群と中世の城である飯田城跡が所在し、南東には紙漉塚群等の塚群が確認されている。また、南西に御厩大塚古墳があり、本津川を挟んで西には鬼塚が所在する。

### 2 出土遺物

調査の経緯で記したように、出土状況等の確認はできなかった。そのため、ここでは出土した遺物を、時代と種類ごとに分けて報告する。

#### 〔弥生時代～古代〕（第42図）

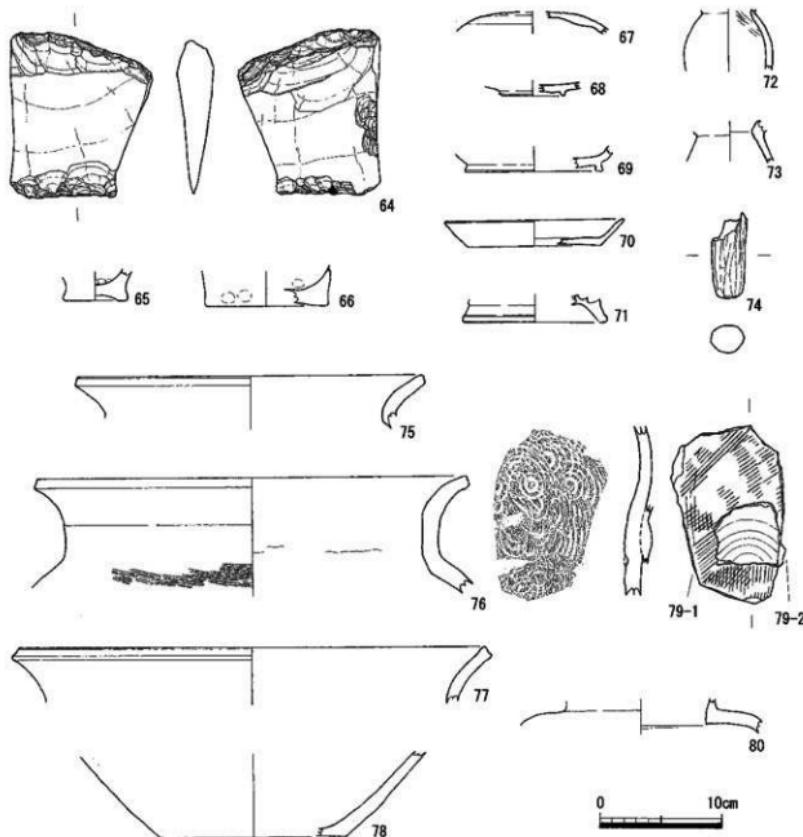
石器、弥生土器、須恵器が出土している。64はスクレイバーである。縁辺部には細かな調整が施され、刃部を形成している。65・66は弥生土器の壺底部と考えられる。67～80は須恵器である。67は杯蓋であり、天井部と考えられる。68・69は高台付杯の底部である。70は皿で、9世紀～10世紀のものである。71は壺の高台部分と考えられる。表面は磨耗しており、内側には僅かに内面が残っている。72は小型の壺である。73は甕の頸部と考えられる。74は鍋の脚端部もしくは把手部と考えられる。75～80は甕である。その内75・76・77は口縁部である。いずれも内外面に回転ナデがみられる。76は十瓶座と考えられる。頸部下に平行叩き痕が見られる。77は焼成がやや甘く、軟質のため表面は磨耗している。78は底部で内外面に回転ナデが施されている。79-1は甕の体部である。外面には平行叩き痕、内面には同心円文状の当て具痕が見られる。また外面には79-2の杯底部が付着している。80の頸部は約90度近い角度で折れ、肩が明確に表れる。

#### 〔中世〕（第43・44図）

81～85は足釜の口縁部から鈴部である。81の鈴部は水平に突出する。82・83は水平に突出するが端部はやや上方に伸びる。また、83は口縁部に内側へ凹みが見られ、焼成までに直されずに残ったものと考えられる。84の鈴部は上方に向かい端部は丸くおさめている。85の鈴部は上方に向かうが短化し、断面も厚くなっている。比較的新しい時期のものと考えられる。86～94は土師質土器錠である。86・87は口縁部が上方に開き、体部は垂直におりるものである。86は外面口縁部に指頭圧痕、87は外面に指頭圧痕と刷毛目、内面には横刷毛が施されている。88～90・93は口縁部が上方に大きく開き、口縁部はやや反り返り気味である。91・92・94は口縁部内面が直線もしくはやや窪み気味で、口縁端部は垂直におりる。また、口縁部から体部へ向かう括れの部分には明確な角度をもつ。95～97は足釜の脚部である。いずれもナデと指頭圧痕によって整形されてい



第41図 柿木荒神位置図 (S=1/5,000)

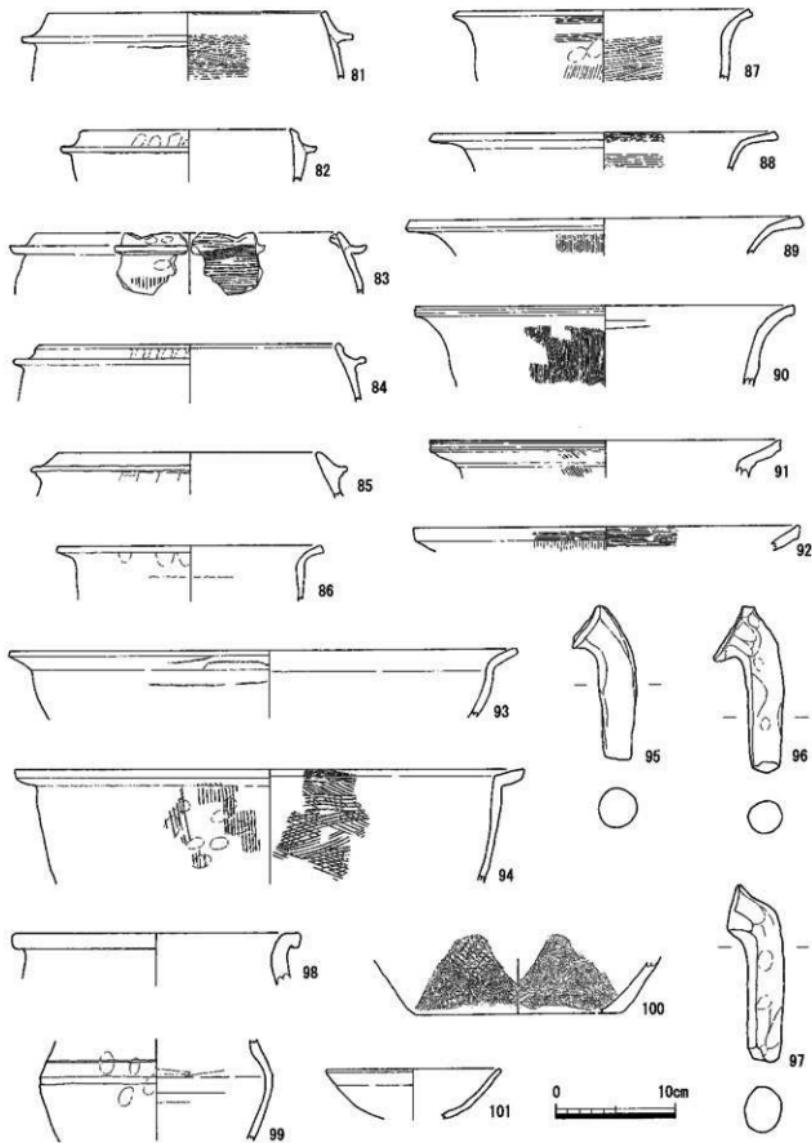


第42図 柿木荒神出土遺物実測図① (S=1/4)

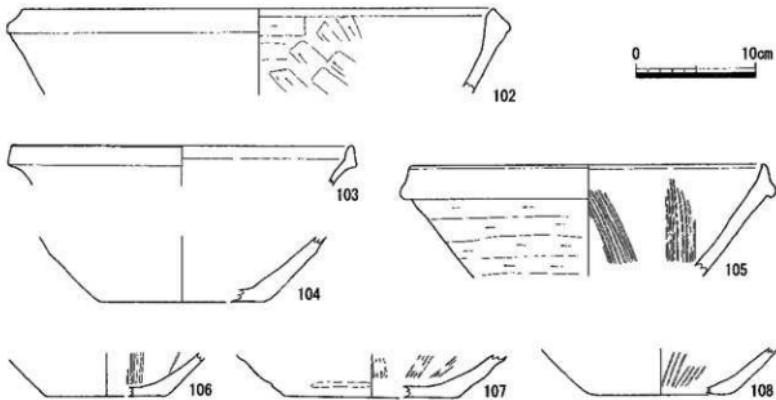
る。98は壺口縁部である。口縁部が丸く肥厚する特徴から桶井産と考えられる。99は壺体部である。100は壺底部である。外面には格子状の叩き痕、内面には底部にナデが見られる。101は土師器杯である。内面には回転ナデと板ナデ、外面には回転ナデが見られる。古代から中世にかけてのものと考えられる。102~108は捕鉢もしくは捏鉢である。102・103は捏鉢と考えられる。104は捏鉢の底部である。105は備前焼の捕鉢である。15世紀代のものと考えられる。106・107・108は捕鉢の底部で、いずれも内面に4条一束の攝目が見られる。

【近世～近代】(第45図)

109~118は陶器である。109は肥前・唐津系の皿である。内面には蛇の目釉剥ぎが見られる。110は天目茶碗である。内面には黒色の釉薬が見られる。111は唐津系の皿である。内面は施釉が施され、外面においても一部施釉が見られる。112は京・信楽系の皿で内面に施釉と針支えの痕跡が残る。113は唐津系の碗で内面施釉が見られる。114は鉢もしくは壺で備前系と考えられる。



第43図 柿木荒神出土遺物実測図② (S=1/4)



第44図 柿木荒神出土遺物実測図③ (S=1/4)

115は備前系の徳利である。116は備前系の壺口縁部である。117・118は捕鉢である。119は備前系の捕鉢で口縁部に横書きが2条入る。119・120は土師質上器である。119は壺と考えられる。120は壺もしくは焜炉の底部と考えられる。121～125は磁器である。121・122は肥前系の瓶底部である。内面は回転ナデが見られる。123は肥前系染付碗である。124は染付皿である。内外面に模様が施されている。125は肥前系の染付皿である。内面には蛇の目釉剥ぎが見られる。

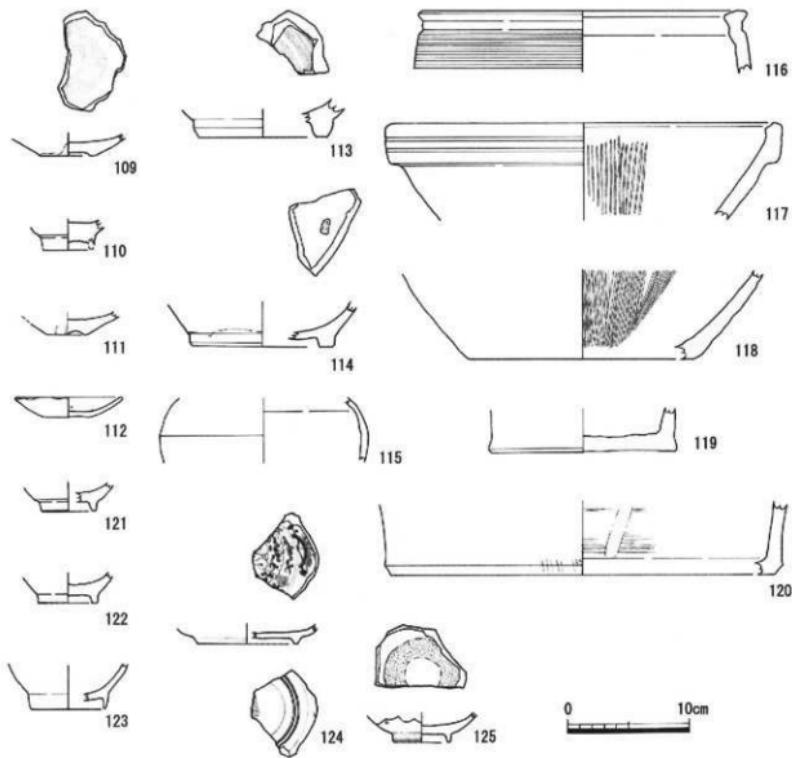
### 3まとめ

以上、柿木荒神からは弥生時代から近世にかけての遺物が出土している。特に土師質土器の足盤や土鍋の類が多く出土しており、中には楠井産と考えられるものも含まれている。前述の通り現地確認時に塚は既に削平されており埴丘規模、埋葬施設の有無、遺物の出土状況等の詳細は不明である。地元の方の話では、祠の石垣補修工事とともに十台の工事を行い、その際に塚のコンクリート土台の東側約2m幅分を削り、祠の後ろ(西側)に移し足したということである。この掘削した東側2m幅内から遺物が出土した。そのため、工事の削平を免れた十台の下には遺物が含まれている可能性が高い。当該地近辺にはいくつか塚群が確認されていることから、元は小高い塚が存在していたものと考えられる。

柿木荒神の位置づけであるが、半田・小坂塚群に近接することから、同様に形成された塚群の一つであったと考えられるが、築造時期は不明である。また、周辺の塚の中には埴輪片を含むものが確認されていることから、当該地で古墳時代の須恵器が出土したことは、かつて周辺に存在した古墳の遺物が塚造成時に混入したものであるか、もしくは柿木荒神自体が元は古墳であった可能性がある。現在はコンクリート上台の上に祠が立ち、塚の場所を留めるにすぎない。また、周辺の田畠から須恵器・土師器片が確認できるのみで、元の面影は見ることができない。

### 引用・参考文献

(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第18冊 国分寺楠井遺跡』



第45図 柿木荒神出土遺物実測図④ (S=1/4)

#### 第7表 藤尾城跡出土遺物・表採遺物觀察表

第8章 柚木嵒神出土遺物研究



1 第1次 I-1トレンチ（西から）



2 第1次 石組状造様（北西から）



3 第1次 石3・4（南東から）



4 第1次 石1刻印「石工」



5 第1次 I-2トレンチ（南から）



6 第2次 2-1トレンチ（南から）



7 第2次 2-3トレンチ土層（西から）



8 第2次 2-4トレンチ土層（東から）



1 第2次 2-6トレンチ土層（西から）



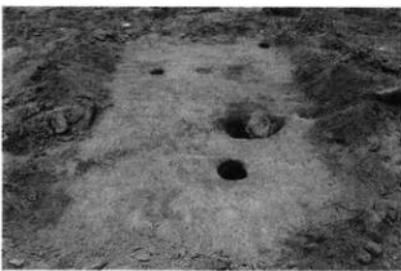
2 第3次 No.13杭付近（南西から）



3 第3次 No.54杭付近（北東から）



4 第4次 造構検出状況（東から）



5 第4次 造構完掘状況（東から）



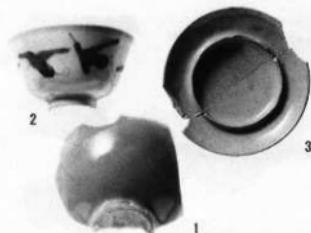
6 第4次 SP 2検出状況（西から）



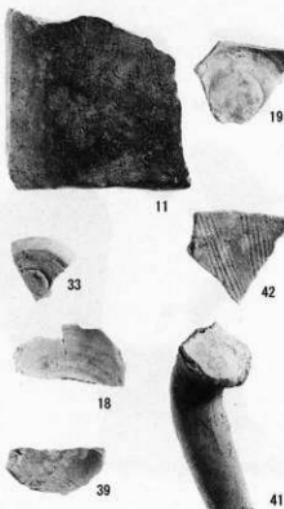
7 柿木荒神全景（東から）



8 柿木荒神近景（東から）



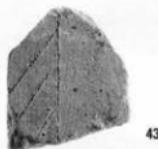
1 第1次 出土遺物



4 第4次 出土・表探遺物



2 第3次 出土遺物（軒丸瓦）



43



9

3 第3次 出土遺物（丸瓦 コビキA）

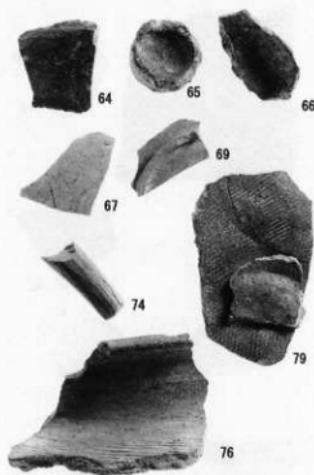


44

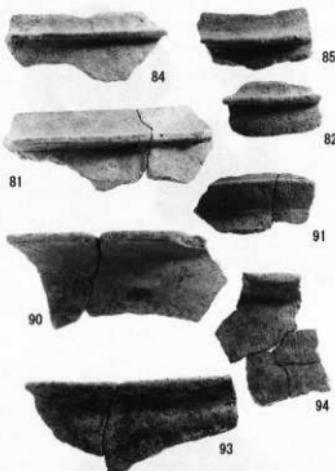


45

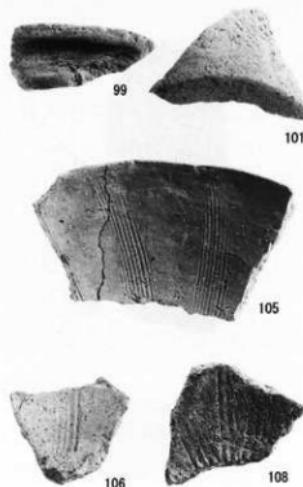
5 第4次 表探遺物（特殊器台・特殊壺）



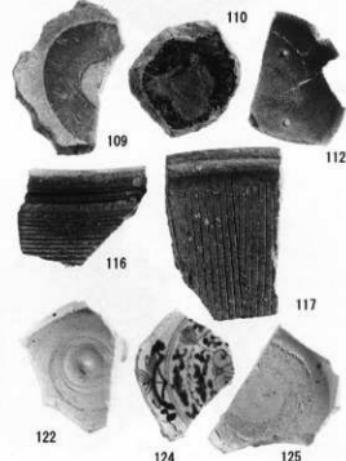
1 柿木荒神出土遗物①



2 柿木荒神出土遗物②



3 柿木荒神出土遗物③



4 柿木荒神出土遗物④



1 遠景（東から）



2 遠景（西から）



3 調査以前 (A・B・Hトレンチ)



4 調査以前 (C・D・Eトレンチ)



5 調査以前 (F・Gトレンチ)



6 Aトレンチ完掘状況



7 Bトレンチ完掘状況



8 Cトレンチ完掘状況



1 Dトレンチ遺構検出状況



2 Eトレンチ遺構検出状況



3 Fトレンチ完掘状況



4 Gトレンチ完掘状況



5 Hトレンチ完掘状況



6 骨器出土状況



7 磚石経出土状況



8 墓標（1号）



1 墓標 (2号～4号)



2 墓標 (5号)



3 墓標 (6号～8号)



4 墓標 (9号)



5 墓標 (10号～12号)



6 墓標 (13号～15号)

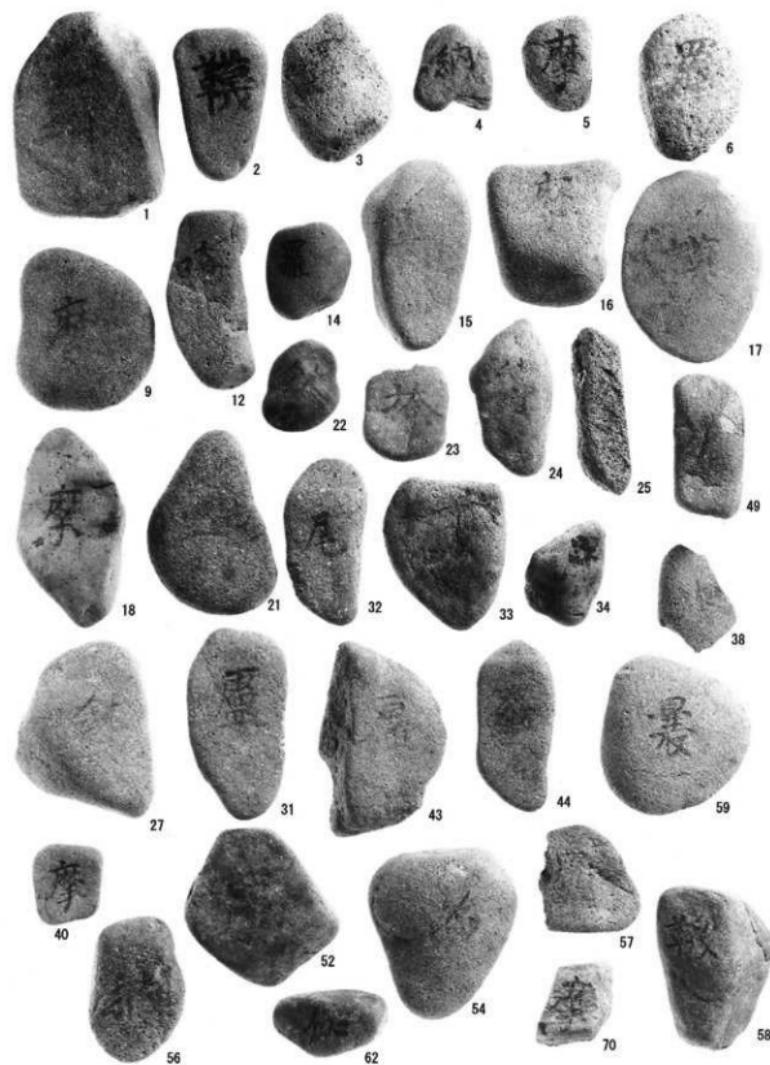


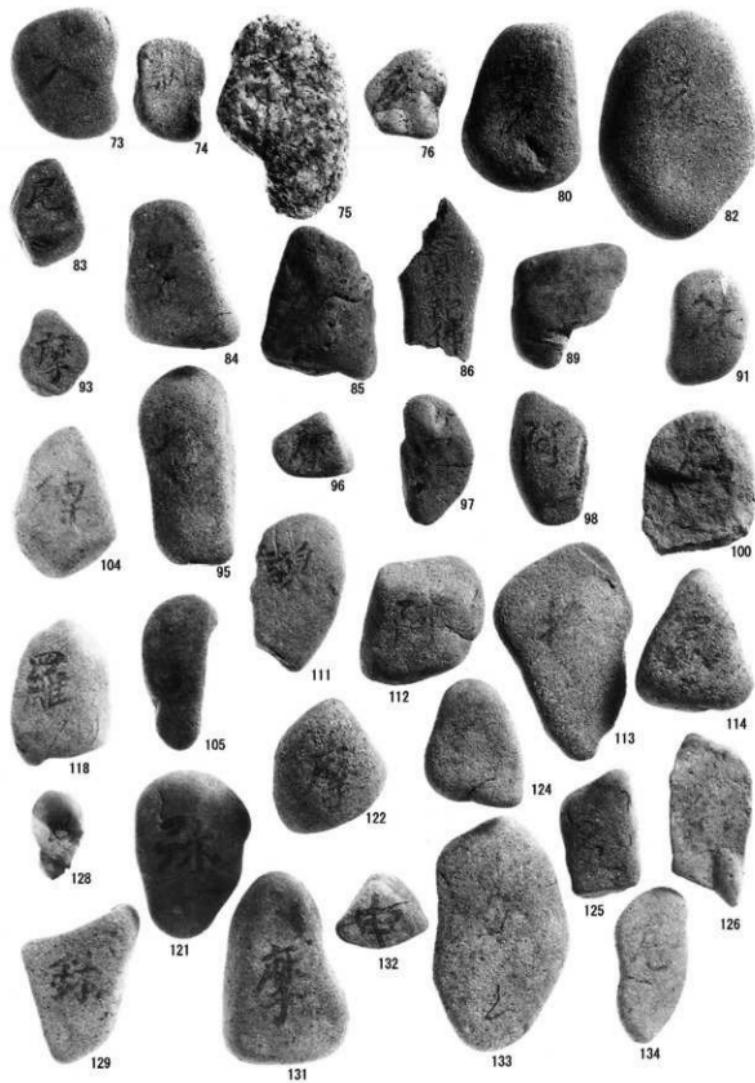
7 墓標 (16号)

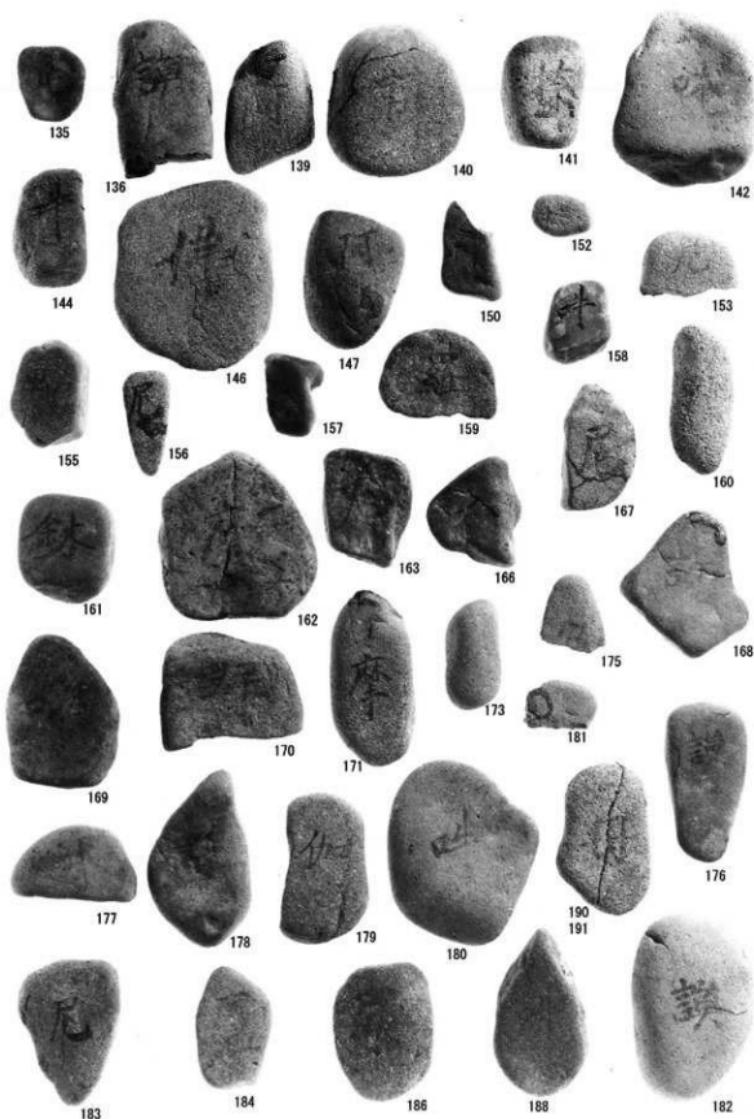


8 墓標 (17号)

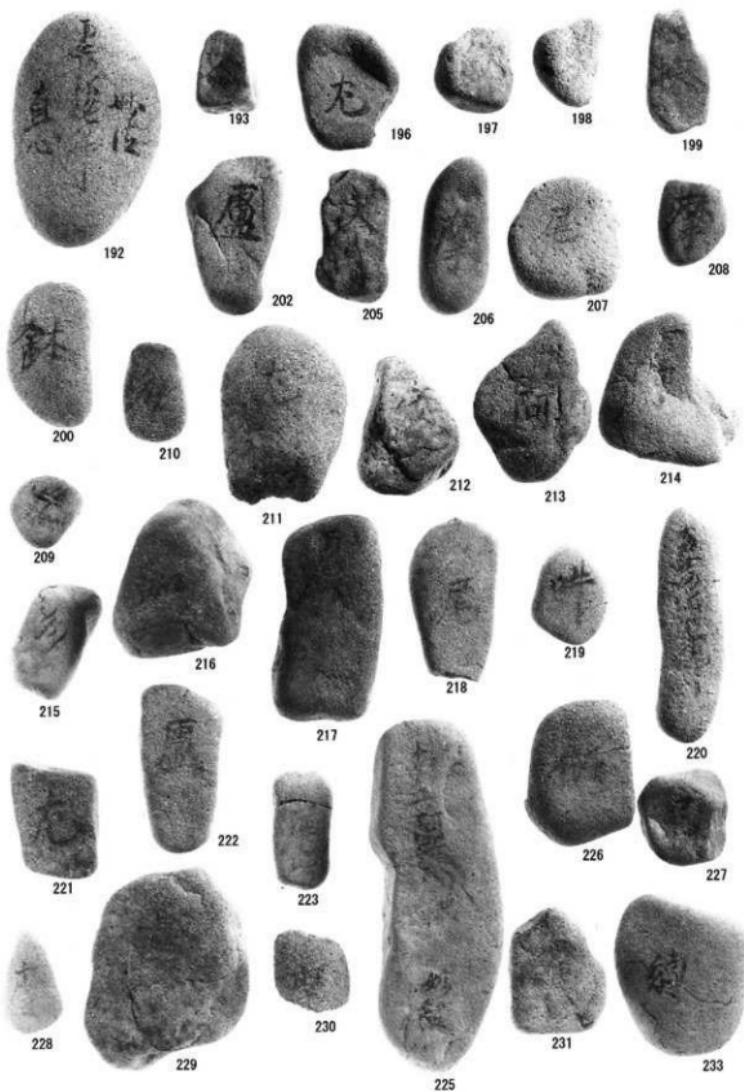
圖版 8  
作山城跡出土石經(1)

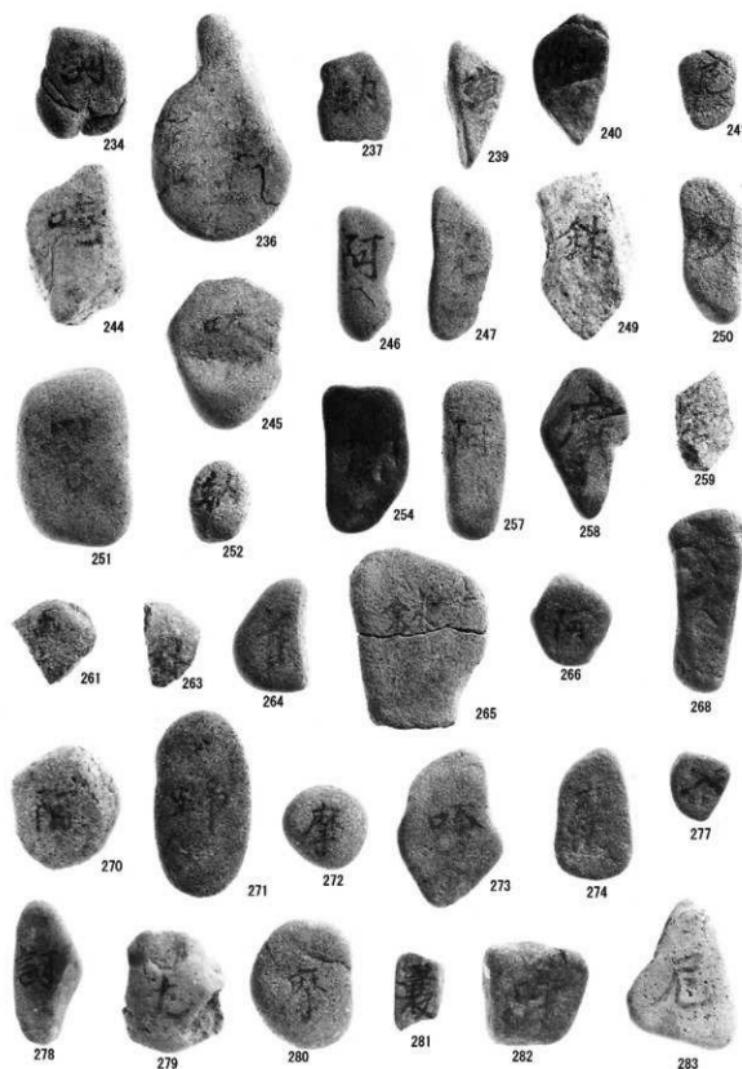


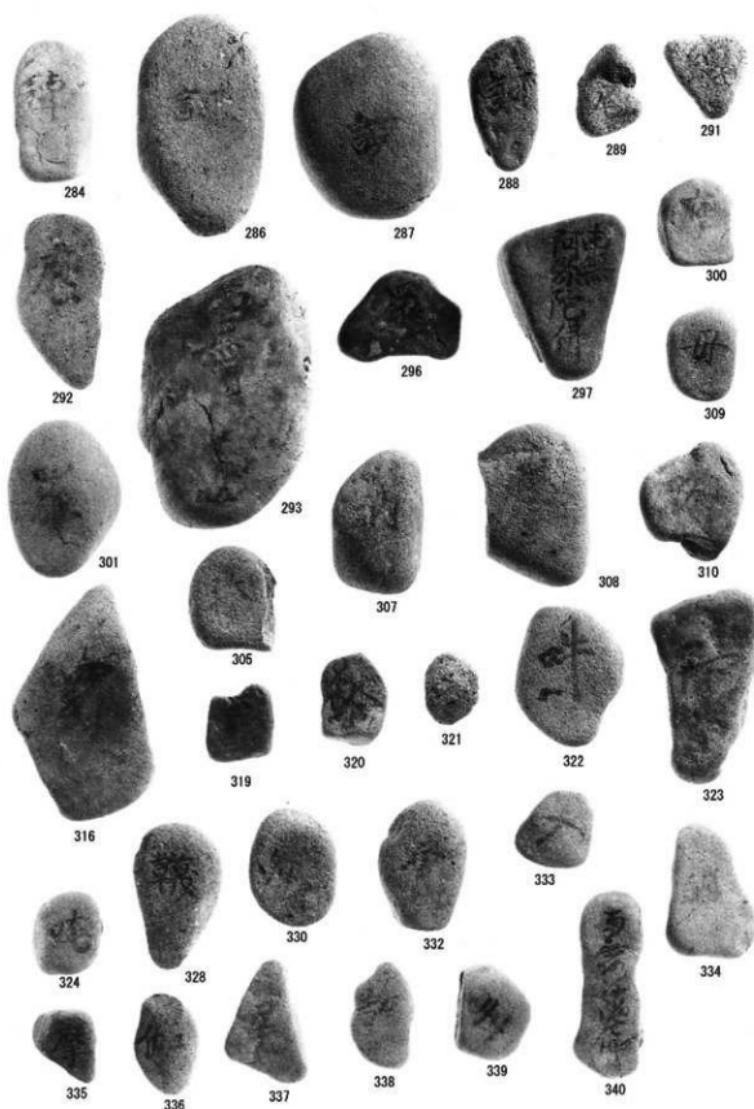


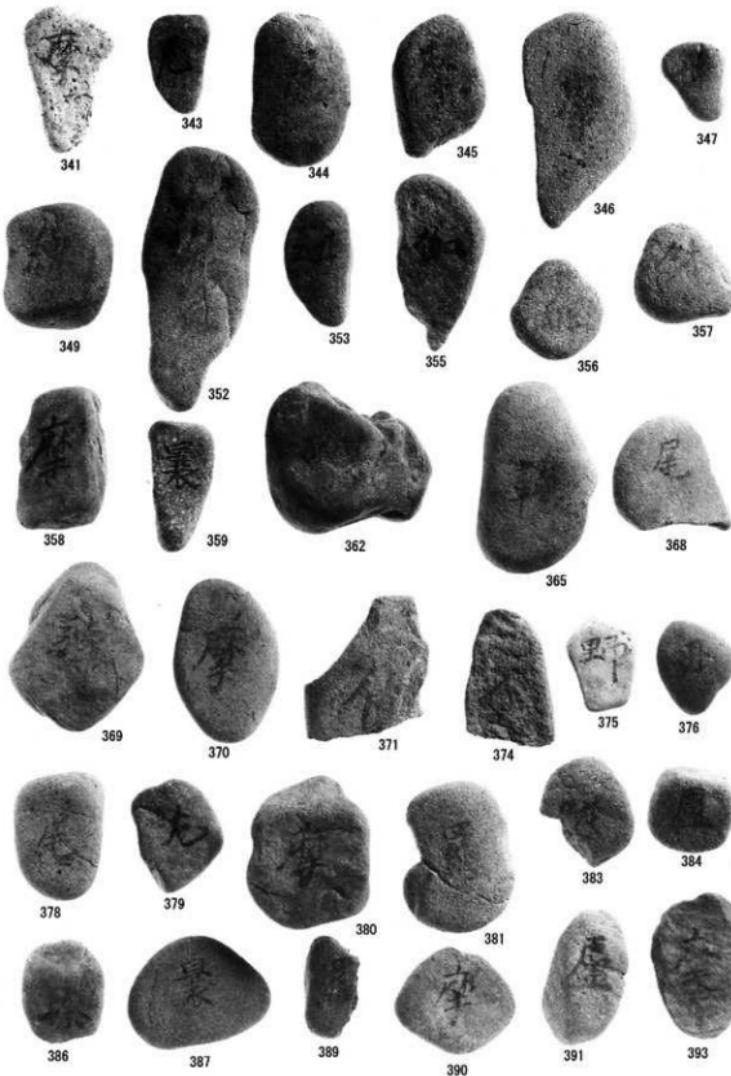


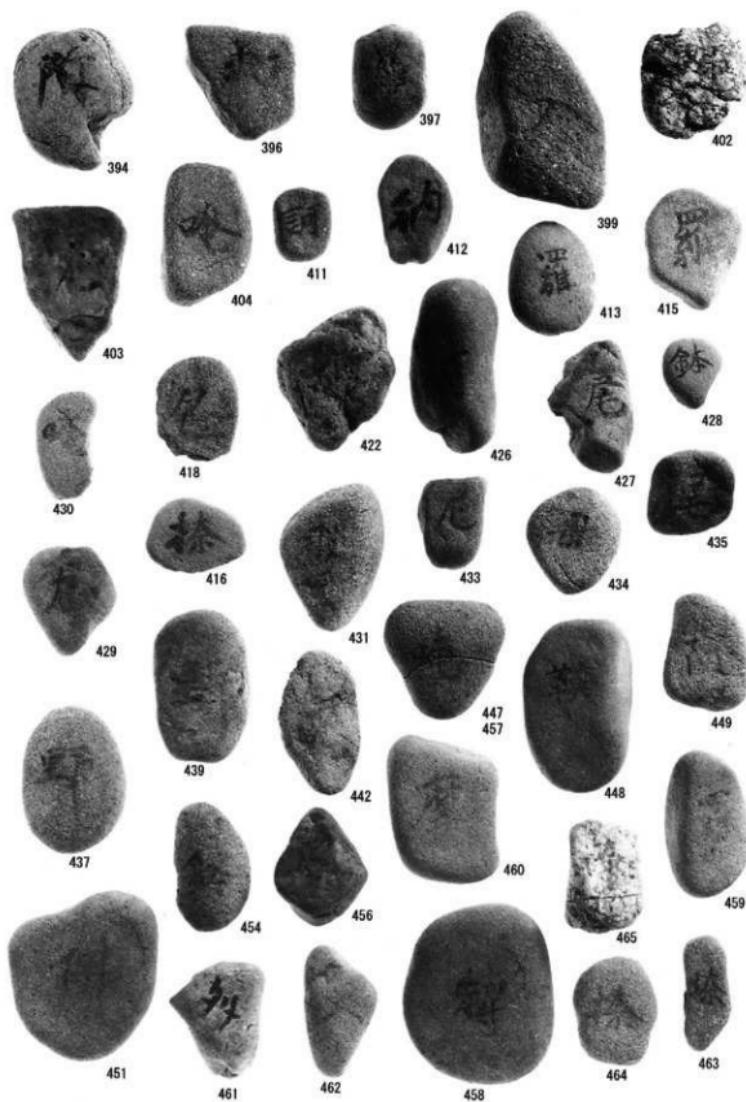
圖版 11  
作山城跡出土璣石經(4)

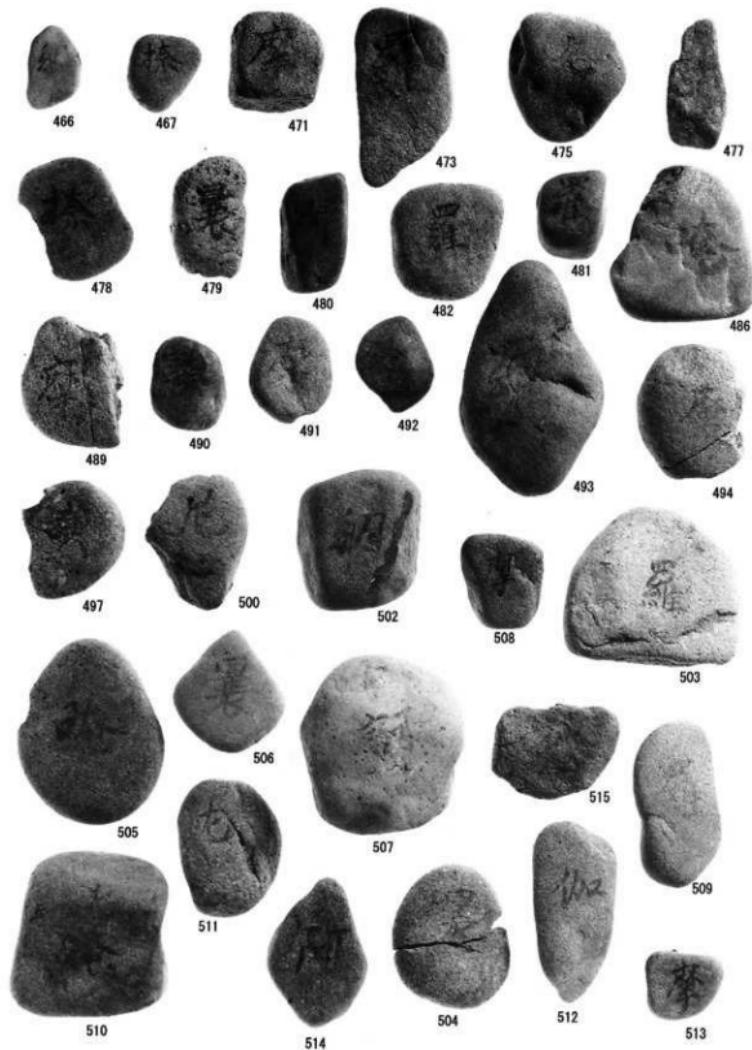


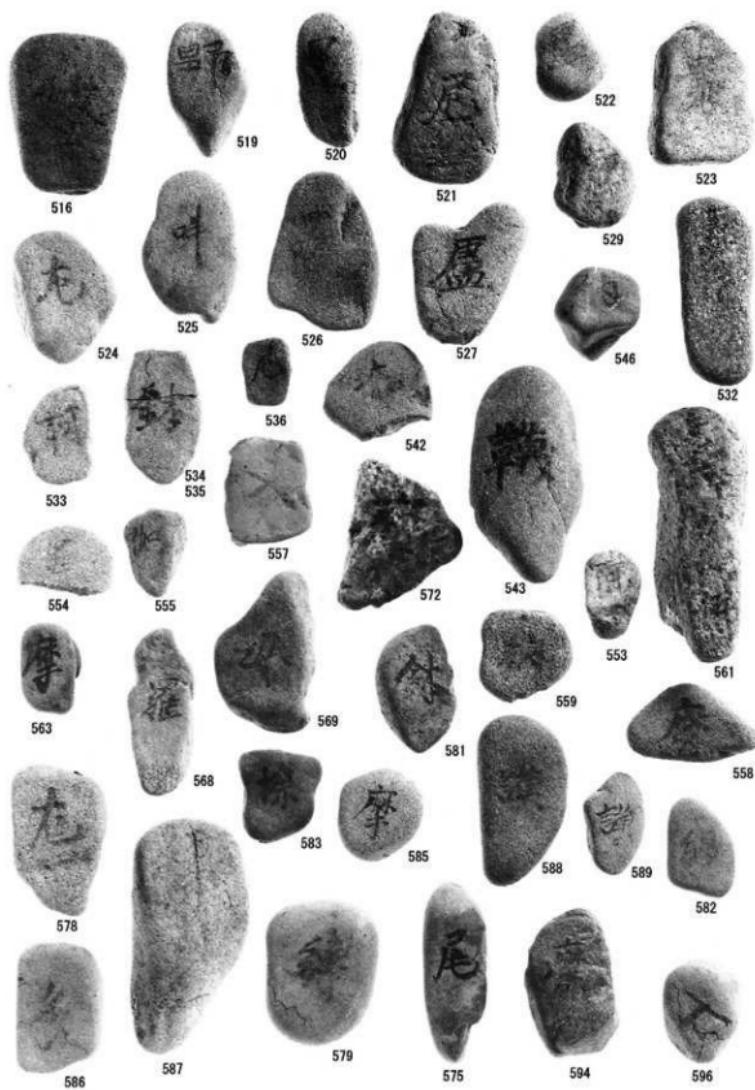


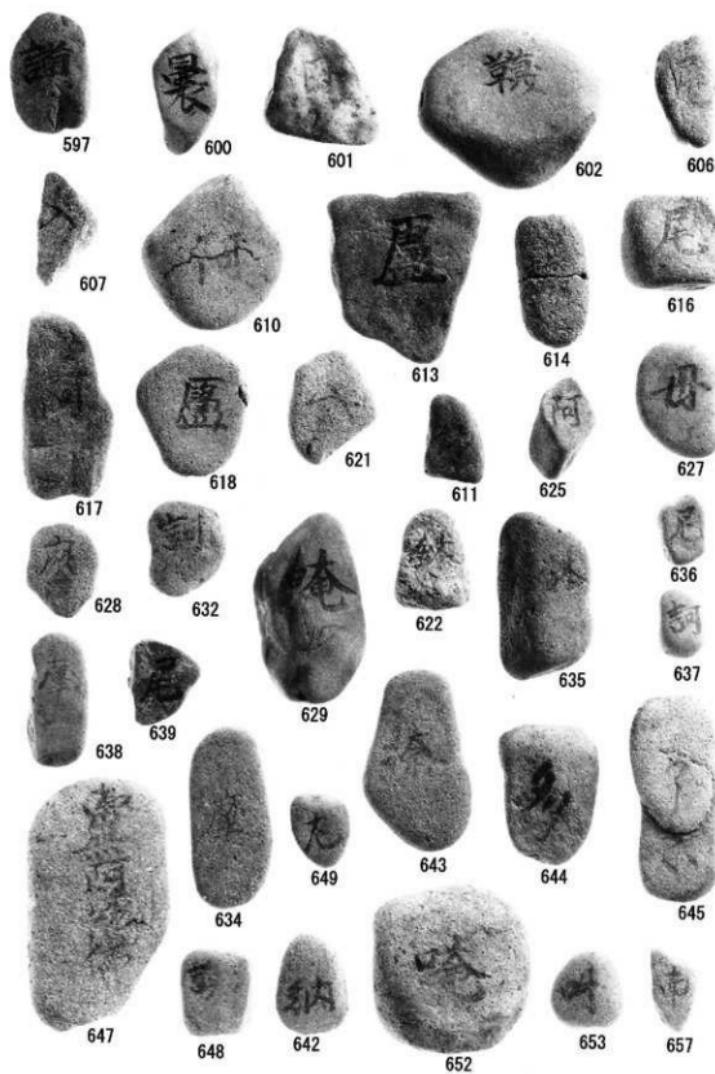


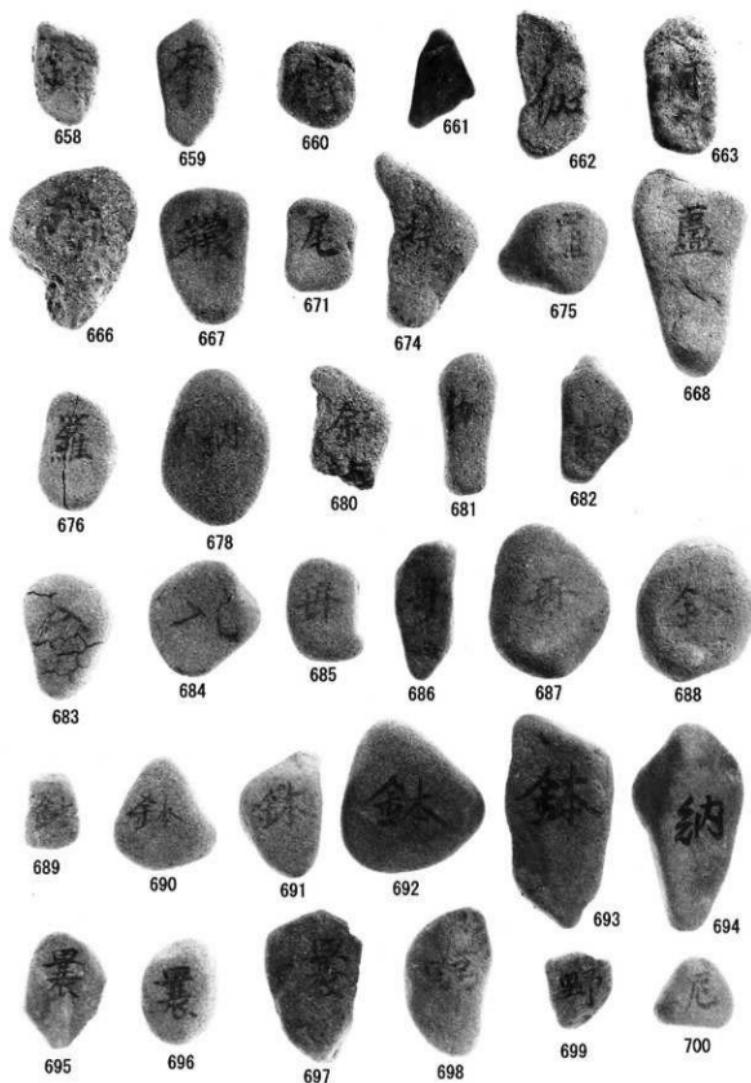


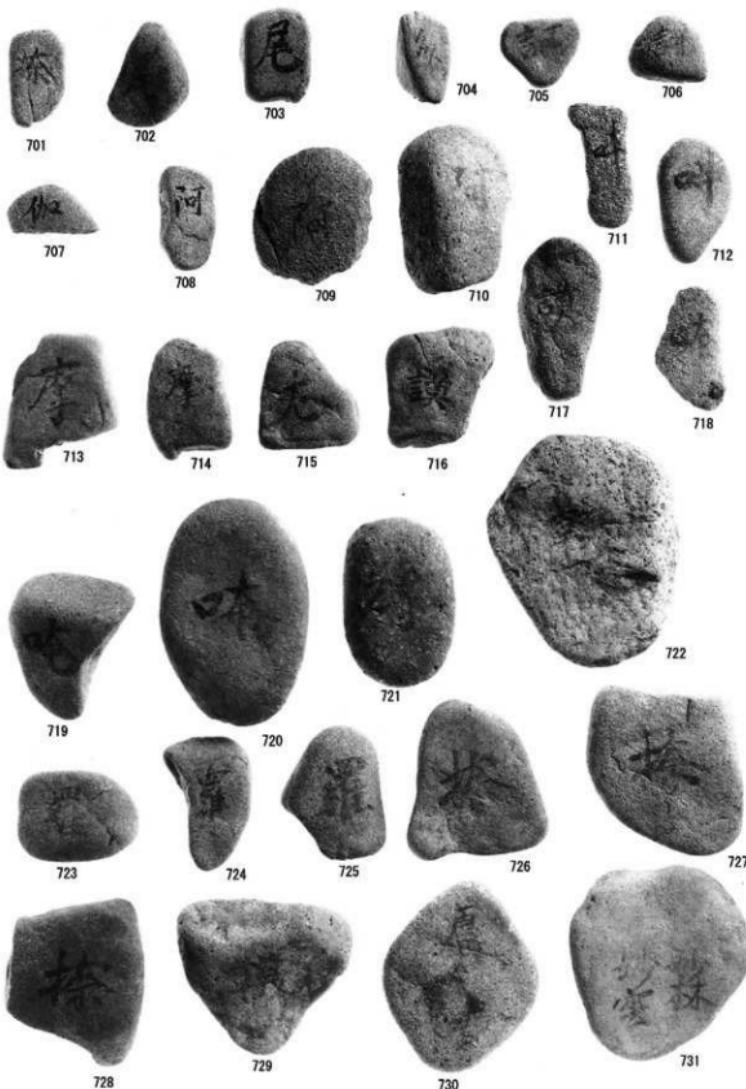












# 報告書抄録

ふりがな	ふじおじょうあと つくりやまじょうあと かきのきこうじん											
書名	藤尾城跡 作山城跡 附 柿木荒神											
副書名												
巻次												
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告											
シリーズ番号	第117集											
編著者名	中西克也 中村茂夫											
編集機関	高松市教育委員会											
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL.087-839-2660											
発行年月日	西暦2008年12月28日											
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因					
市町村												
ふじおじょうあと 藤尾城跡 第一回 たけおじょうあと 藤尾城跡 第二回 たけおじょうあと 藤尾城跡 第三回 たけおじょうあと 藤尾城跡 第四回	香川県高松市 香西本町	37201			1993.12.9~12.17	50m <sup>2</sup>	宇佐八幡宮社務所建設					
			34°	133°								
			24'	59'	1996.2.6~3.14	31.8m <sup>2</sup>	香西公民館拡張工事					
			48°	56°	1997.1.8~1.10	206m <sup>2</sup>	急傾斜地崩壊防止工事					
					2007.8.6	9m <sup>2</sup>	桜殿塗装工事					
つくやまじょうあと 作山城跡	香川県高松市 香西南町	37201	34°	133°								
			20'	59'	1987.3.1~3.31	100m <sup>2</sup>	土取工事					
			37°	55°								
かきのきこうじん 柿木荒神	香川県高松市 飯出町	37201	34°	133°			祠改修工事					
			19'	59'	1998.5.25							
			3°	36°								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項							
藤尾城跡	城跡	中世～近世	土坑、柱穴	弥生上器、土師質土器 陶磁器、瓦	特殊器台形土器							
作山城跡	城跡	近世～近代	土坑、柱穴	陶磁器、礫石絆	特殊素形土器							
柿木荒神	散布地	弥生～近世	なし	弥生上器、陶磁器								
要約	藤尾城跡	本書は平成5年から19年までに実施された4回にわたる調査を収録した。調査により、藤尾城跡に伴う確実な遺構・遺物は確認できなかった。しかし、藤尾城跡以前の建物に伴うものとして、藤尾八幡宮に関わる可能性がある遺構・遺物を確認した。また、特殊器台形土器・素等の弥生上器も確認しており、弥生時代の遺跡が存在していた可能性がある。										
	作山城跡	柱穴・土坑・溝等の遺構を確認したが、出土遺物は近世・近代のものであり、作山城跡に直接関係する遺構・遺物は確認できなかった。										
	柿木荒神	祠の改修工事とともに、塚の一部改変に伴い遺物が出土した。弥生時代から近世に至る遺物を確認したのみで、当塚の詳細な時期・墳丘規模・埋葬施設等は不明である。										

藤尾城跡 作山城跡

附 柿木荒神

平成20年12月28日

編 集 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目8番15号  
発 行 高松市教育委員会  
印 刷 有限会社 河端商会